756
151

0027192000

0027192-000

７５６－１５１

貨幣価値論序説

岡橋保・著

有斐閣

昭１３

ADH

帝國圖書館藏

貨幣價値論序說

著保　橋岡

有　斐　閣

昭和十三年一月十日 帝國圖書館藏

756
151

序論

Wer die Gegenwart seiner Wissenschaft
recht verstehen und ihre Zukunft beherrschen will,
der muss ihre Vergangenheit kennen.
Roscher.

この書は私の貨幣の價値についての思索の中間報告である。

私はいまやつと貨幣の價値の問題に對して、みづからの態度を決定すべき時機に到達してゐるがごとくに考へてゐる。いまや私は自己の進みゆくべき動向において、おぼろげながらも一つの目標を見出し得たるがごとくである。

この道標へと導かれてきた私が、これまで多くの先學の辿つてきた足跡から如何にしてそれ、そうしてなにがゆゑに岐れてきたかを、こゝに、一應、ふりかへつて見ておくことも、あながち無用のことがらではなからう。このやう

な意味においてこの書は貨幣の價値に關する私の積極論への序説であり、他の諸學説に對する批判編である。またそのかぎりにおいてこれは一つの中間報告たるにすぎざるものなのである。

この書はもとより貨幣の理論の世界への寄與を誇示し得るものではない。しかしながら、私にとつてはながき理論的遍歴のなつかしき想ひでの記であり、なにものにもかへがたき體驗錄でもある。たゞこの書において私のとくに强調せる一つの點を擧げるならば、非交換論的貨幣理論なるものゝ存し得ざることこれである。

ミーゼスによつて創唱されてよりこのかた、久しく學界に行はれたる交換論的貨幣理論(Katallaktische Geldtheorie)と非交換論的貨幣理論(Akatallaktische Geldtheorie)との類別の仕方に對して、私はこゝに異議をさしはさむものである。すなはち、元來、貨幣の理論たるべきものは、なにらかの意味において貨幣の價値の問題に對して一定の態度決定のなすべきことをせまられる。貨幣の價値の問題を回避しては、それは貨幣の理論としてのみづからの存在理由をば

否定することゝならざるを得ない。一見、非交換論的なる貨幣理論であつても、やがては貨幣の價値の問題についての一定の態度を明らかにしなければならないやうに思はれる。この場合、そのとるところの貨幣の價値の原理が動態的性格のものなるや、あるひは靜態的性格のものなるやはまつたく問ふところではない。こゝにおいて貨幣の理論は、そのいづれかの意味において、交換論的貨幣理論とならざるを得ざるがごとくである。

そのはじめミーゼスによつて商品價値原理と貨幣價値原理との一元性をもつて、しかも價値の靜態的原理の一貫性によつて、交換論的貨幣理論の樹立さるべきことが企圖された。そうして商品價値原理、ことに限界效用學説の貨幣への適用を拒否せる指圖證券學説をもつて、非交換論的貨幣理論と宣せられるにいたつたのである。しかしこの指圖證券學説における貨幣價値原理の商品價値原理よりの獨自性は、貨幣價値理論の特殊的性格、したがつてそれ自體の存在の理由を基礎づけるところのものとして却つて論者の唱導するところともなつた。とはいへ、いまや貨幣數量説の理論的に貫徹されがた

きことと一般均衡理論の擡頭とは、貨幣價値の理論への一般均衡理論の擴充適用となり、指圖證券學說における貨幣價値の理論として、貨幣數量說にかはつて一般均衡論的貨幣價値理論が現はれるにいたつたのである。この一般均衡の理論なるものは、元來が商品價値の動態的原理であり、動態論的性格のものたるをもつて、それが貨幣の價値の理論に適用されたとしても、動態的貨幣價値理論たるの性格を帶びねばならないことは言ふをまたざるところである。かくして指圖證券學說は、貨幣價値原理において一般均衡の理論と結びつくことによつて、こゝに商品價値原理との一元性を獲得することゝなつた。かくしてこゝに、指圖證券學說も交換論的貨幣理論たり得るの理論的根據を見出すにいたつたのである。

シュムペーターによつて企圖され、ミーゼスによつてその可能性を否定されし指圖證券說的貨幣本質觀による交換論的貨幣理論の樹立は、一般均衡理論の貨幣價値理論への擴充適用の可能化とゝもに、こゝに成就せられることとなつたのである。もちろんミーゼスの否定せし點は、指圖證券學說はその理論的性格からして限界效用學說、すなはち商品價値の靜態的原理を受け容れることが出來ないといふことにあつたのであつて、從つて靜態的價値原理の一元性のうへに立てる交換論的貨幣理論が指圖證券學說にあつては樹立さるべくもなきことが强調せられたるにすぎないのである。然れども限界效用學說たるものが、元來、その意圖にも拘らず、價値の靜態理論たり得ざるものであつて、この意味においてミーゼスの貨幣理論も靜態的價値原理の一元性のうへにたてるところの交換論的貨幣理論たり得ざるものなのである。限界效用學說と貨幣機能價値學說との結合によつて一元的な靜態的價値原理のうへに樹立せんとされし交換論的貨幣理論は、限界效用學說の動態論的性格を徹底化せる一般均衡理論と、貨幣機能價値學說の醇化されたる指圖證券學說との結合によつて、こゝに一元的な動態的價値原理に依據せる交換論的貨幣理論とならざるを得なかつたのである。

このやうな歸結からして吾々の學び得たる唯一のことがらは、貨幣の理論は商品價値の理論の發展であり、商品價値に對する正しき洞察にしてはじめ

て貨幣理論、したがつてまた貨幣の價値の理論についての正當なる認識を約束し得るものなることこれなのである。もとよりこゝに價値の靜態理論とゆひ動態理論とゆふも、それはあくまでもアルトマンの用語例に倣へるものである。それは彼によつてそこにもられし意味より以上のものを含むものではまつたくない。而して價値の靜態理論なるものは、もとより價値の變動の理論を排除するものではない。從つてこのことは、むしろ、價値の本質、それの靜態的な質的な側面の究明を俟ちて、はじめて、それの量的動態的側面の眞の解決が得らるべきことを强調するものなのである。然るに謂はゆる價値の動態理論なるものにあつては、これに反して、價値の質的、靜態的側面が無視ないしは看過されて、もつぱら價値の量的變動のことのみ强調されて、これのみの解決に重點がおかれてゐるに過ぎないのである。併しながらこの價値の靜態理論を缺いては、それの動態理論は實はまことの動態理論たることすらもが難きことを强調しなければならない。

はじめ貨幣機能價値學說に自己の出發點を求めたる私は、この貨幣本質觀を徹底させてゆくときには、それが必ず指圖證券學說へといたらねばならないことを知つた。いま貨幣の價値の理論において、主觀的價値學說ことに限界效用學說に依據してゆくならば、それが道程の一般均衡の理論へと導びかれてゆくことの必然なることを悟らねばならなかつた。そうして貨幣本質觀における「交換手段學說」なるものは、その價値原理においては、一般均衡理論的貨幣價値理論なる動態的價値原理に結びつくべき內的必然性を持てるがごとくである。しかれどもそこには問題の解決への動向の看取されがたきことに失望せる私は、從つてそれから次第に離れてゆかねばならなかつた。それにも拘らず行つては戻り、行つては戻りすること幾くたびか、私には依然として過去への愛著のなほ斷ち切りがたきものあるを覺ゆ。

限界效用學說の一般均衡理論への展開はまことに刮目するにたりるものがある。その理論體系は一つの巨大なる殿堂にも喩ふべきである。古き酒は新しき革囊にもらるべきではなきがごとく、一般均衡理論の革新的なる輪

奥の美は價値の理論の動態論的性格觀のうちに現はれてゐるものとなすことが出來やう。併し私にはどうしてもこゝに魂の安住を求めることは出來なかつた。それは古典學派以來の經濟學の古き傳統が、一般均衡理論にあつては、あまりにも無造作に放棄せられてゐるからなのである。價値の靜態理論は古典學派以來の經濟學の傳統的遺産である。限界效用學說もその出發點においては、この傳統的遺産への一寄與を目指して現はれたものと言ふことが出來る。然るに一般均衡の理論にあつては、この古き傳統がまつたく顧みられやうとはしてゐない。このことは私をして理念史的には限界效用學說よりも以前へと戻らしむるにいたつたのである。これは私の一種の懷古趣味にもとづけるものであることかもしれない。併しながら一般均衡の理論をその經濟學體系のうちに出來うるかぎりとり入れて、これを包攝せんとしておられる高田博士にして、なほ、この經濟學の古き傳統との調和ないしは融合に強き關心の寄せておられることからしても、私の意圖が必ずしも獨善主義に墮せるものとはなすを得ないであらう。そのほか少したりとも古典學派以來の經濟學の傳統に眼を向けることを怠たらなかつた論者にあつては、そのとれるところの一般均衡の理論においてもなほ價値の靜態理論への關心の捨てられていないことが看取せられる。

しかし私の魂の安住の地も案外手近かなところにあるのかもしれない。求めてゐる「青い鳥」もあるひはすでに見すごして來たのかもわからない。所詮はこの「青い鳥」も、理論の世界におけるながき苦難行ののちにはじめて搜しあてらるべきものでもあれば、私の理論的放浪もこれまた學徒にとつてはやむを得ざる修錬の道程であらう！

この小篇を世に問ふに際して、私は、恩師高田保馬博士の深かき學恩をかへりみなければならない。あるひは口づから、あるひは親書により、またあるひは著作を通じて私の思想生活のうへに與へられたるその影響は、まことにはかりしれざるものがある。この書で私の到達し得たる結論も博士のこのたへざる御薫陶のたまものにほかならない。もちろん私の未熟は、博士と相去

る遠きにある自分を見出さねばならなかつた。いまこの書を公刊するにあたつて萬腔の感謝を捧げたい。なほつねに好意ある鞭撻と指導とを吝まれなかつた先輩、學友の諸兄に對してもこゝに厚く謝意を表す。最後に、出版について一方ならぬ御配慮を煩はした有斐閣の鈴木正次郎氏に對しても、こゝに記して御禮を申し上げる。

昭和十三年八月二十二日

和歌山にて

岡橋保

目次

序論……一
第一編　貨幣價値の諸問題
第一章　貨幣價値論の動態論的性格觀の批判……三
第一節　序說……三
第二節　貨幣價値論の動態論的性格觀とその批判……八
第三節　結論……四〇
第二章　貨幣價値の歷史的連續性の構想の性格について……四七
第一節　序說……四七
第二節　貨幣の價値の歷史的連續性……五七
第三節　貨幣の價値の變動に關する動機理論……六九
——ミーゼス批判　その一——

第四節　貨幣の價値の變動に關する動機理論……八一
——ミーゼス批判　その二——
第五節　一般均衡論的貨幣價値論……九九
——ミーゼス批判　その三——
第六節　結　論……一二一
第三章　貨幣心理學說の批判……一三七
第一節　序　說……一三七
第二節　最近の貨幣經驗と貨幣心理學說……一四一
第三節　貨幣心理學說……一五五
第四節　豫測效用の反映性……一六六
——貨幣心理學說の動態論的性格——
第五節　結　論……一七五
第四章　貨幣必然論の諸相……一八七
第二編　貨幣必然性の理論
第一章　序　說……一八七
第二節　貨幣の因果混淆的生成論……一九四
第三節　貨幣の自然的生成論……二〇九
第四節　貨幣の偶然的生成論……二一〇
第五節　結　論……二一七
第五章　貨幣必然性の論理……二二三
第一節　序　說……二二三
第二節　貨幣必然性の論理……二二九
第三節　結　論……二六五
第三編　貨幣問題餘論
第六章　貨幣の本質と價値……二七一
——中山教授の反批判に答へて——
第一節　序　說……二七一

目次

第二節　中山教授の反批判……二七六
第三節　中山教授の反批判への批判……二八五
第四節　栗村氏の論難について……二九六
第五節　結　語……三〇〇
第七章　貨幣本質論への一寄與……三〇五
——竹島教授「貨幣本質の研究」を讀みて
第一節　序　説……三〇五
第二節　貨幣本質觀……三〇九
第三節　貨幣機能觀……三一四
第四節　結　語……三二二
附　錄
I　引用文獻目錄……1
II　人名索引……8

第一編　貨幣價値の諸問題

第一章　貨幣價値論の動態論的性格觀の批判

第一節　序　說

貨幣の價値の問題は、貨幣の理論のうちにあつても、もつとも重要なそうしてもつとも困難な問題の一つであると言ふことが出來る。多くの貨幣の理論的著作において、貨幣のその他の規定に就いては、かなり正當なる理解が示されてゐるとはいへ、なほ貨幣の價値の規定にいたつては、みづからの理解の素朴さを曝露してゐるにすぎざるがごときものが少くない。人人のながき努力にも拘らず、貨幣の價値の問題は、依然として、貨幣の理論における「躓きの石」であつたかのごとくである。

こゝに問題とするところは、貨幣の價値そのものゝ究明に存するのではない。むしろその關心の中心となれるは、貨幣の價値の理論の性格規定についてなのである。すなはち、貨幣の價値の理論的內容としては、二つのものが區別されねばならない。一つは貨幣の價値に關する靜的・質的な問題であり、他は量的・動的なる問題これである。そうしてこの貨幣の價値の靜的な、質的な問題に對する一

定の立場は、一方においては、貨幣の本質的機能觀の如何によつて規定されてゐるとゝもに、他方にあつては、それはさらに第二の側面たる貨幣の價値の動的な、量的なる問題についての特定の立場を必然に要求し、制約してゐるものなのである。

しかるに、最近の一派の貨幣價値理論にあつては、貨幣の價値の問題についてのかゝる二つの側面の存することが、まつたく、看過されてゐるかのごとくである。そうして貨幣の價値の問題とは、その動的・量的の問題のみであつて、價値の質的規定の問題、ことに貨幣の本質的機能の問題からさへもひきはなして、貨幣の價値の理論の性格をば、もつぱら、動的・量的な理論たることに求めんとする一派の見解すらもが現はれるにいたつたのである。このやうな貨幣の價値の問題をばそれの動的・量的な問題にのみ限定せんとする謂はゆる貨幣價値理論における動態論的性格觀こそは、一體、いかなる理論的根據より出づるものであらうか？　これ本章の第二の關心問題なのである。

惟ふにこれらのことがらは、一見、まことに煩瑣なる純理論のことがらに屬するものゝごとくである。しかれども事態はまさに逆であつて、それの持つ理論的意義はきはめて重大である。蓋しその所以は、かかる貨幣の價値の理論に關する動態論的性格觀こそは、實に、論者の貨幣本質觀、ことに貨幣の基本的機能觀をもつてしてはその立場をあくまでも貫きとほすことの不可能なることに因由せるものであり、さらに、その據つて立てるところの經濟學方法論のうちに深く根ざせるがごとくであるからなのである。その誤謬のよつて來たるところは、まことに、遠くかつ深い。

いま貨幣生成の必然觀についてはこれを措いて問はない。しかれども、元來、貨幣の價値に關する見解は、すでに、貨幣の基本的機能觀によつて制約されてゐる。すなはち、貨幣の唯一根本の機能をば交換の手段のうちに求める貨幣本質觀における謂はゆる「交換手段學說」（註一）なるものにあつては、貨幣の價値の性格は、必然に、反映的なものとして規定されざるを得ないのである。この貨幣の價値の反映性、あるひは受動性を主張する見解は、もとより、貨幣の價値の本質的なる問題に解決を與へんとするものではなく、從つて商品價値の本質的なる問題に答へんとする限界效用學說などのごとき、商品價値決定原理の貨幣の價値の問題への適用を拒否せんとすることは、これ、けだし、かゝる見解にとつては、まさに、當然の歸結なりと言はねばならない。ただ自己の見解に徹せざる論者にあつては、價値原理を、それのほんらい關心せざるところの問題にまでも適用せんとされしことが、しばしばであつたといふにすぎない。この事情は、一見、あたかも、貨幣の價値に關して、從來、おほくの異見の存在し得たるかのごとき觀を與へたのであつた。

註一　拙著「貨幣本質の諸問題」二〇—二一頁參照。

かくして貨幣の本質に關する謂はゆる「交換手段學說」にあつては、貨幣の價値についてその關心するところは、「貨幣の價値とは何ぞや？」ではなくして、「貨幣の價値は如何にして變動するか？」といふことになければならない。かゝる見解にとつては、もはや、貨幣の價値の基礎づけが問題なのではなくして、貨幣の價値の量的變動の問題のみが肝要なのである。これ交換手段學說と貨幣數量說あるひは數量說的見解との結びつきの內的な論理的な必然性の强調され得る所以であらう。ところで貨幣數量說あるひは數量說的見解の理論上支持し難きことは、一般均衡論的な價格理論の最近の擡頭と相俟ちて、貨幣價値の理論、ことに貨幣價値變動理論の分野への、一般均衡理論の擴充を許すにいたつた。こゝに一般均衡論的貨幣價値理論は貨幣數量說にかはつて現はれ、それの彗星的なる出現は貨幣の價値の理論のうへにまことに多幸なる將來を約束するがごとくに思はれた。それは、一般均衡論的價格理論も、商品價値が如何に變動するかを究明することをもつて自己の唯一根本の課題となせる、一種の動態理論であつたからなのである。從つてそれは、貨幣の價値の變動の理論として、貨幣數量說にかはつて、その優位性、支配性を獲得し得ることゝなつたものゝやうである。

併しながら、貨幣の價値の問題は、もとより、それの質的・靜的なる問題の解決をまちてはじめて、それの量的・動的なる問題も、そのまことの意味における解明が得られるといふがごときていのものなのである。從つて、貨幣の價値の問題をば、量的・動的なる問題にのみ限定せんとするところの、貨幣價値理論における動態論的性格觀なるものは、それが推論において如何に克明であり、それの理論的構成の緻密なることを誇らうとも、畢竟するに、現實に對しては極めて無力なる理論的體系とならざるを得ない所以である。この貨幣價値理論の動態論的性格觀なるものが、もともと、貨幣の價値性の問題から遊離化されしものであり、恣意的に切りはなされし理論的體系たるに過ぎないにも拘らず、かゝる遊離性、孤立化的性格にして看過されるときは、この理論は學界においてイニシアティーフをもち、支配性を獲得し得るがごとくである。それゆゑに、このやうな貨幣價値理論の性格觀のよつて來たるところの理論的根據をば剔抉し、それが貨幣價値の靜態理論、あるひは本質論よりの遊離性を闡明することは、極めて重要なる理論的意義を有するにいたるものなるなることが、强調されねばならない。かくしてこれらの問題は、貨幣の價値の理論的基礎づけの問題、すなはち貨幣の價値の靜態理論と緊密なる聯繫の有することが理解されねばならないであらう。

第二節　貨幣價値論の動態論的性格觀とその批判

貨幣に關する純理論的な問題をば、質的な問題と量的・動的なる問題とにわかち論ずることは、アルトマン以來のならはしである（註一）。そうして貨幣の質的な問題とは、貨幣の概念および機能の問題であり、貨幣の價値の基礎づけの問題もまたこれに屬する。貨幣の量的・動的なる問題とは、貨幣の價値の大いさ如何の問題であり、それが決定の法則、あるひは變動の法則の問題これである。

註一　元來、アルトマンは、貨幣の學說をば、大體、三つの見地からこれをわかちて論じて居る。すなはち、一つは貨幣の質的な問題であり、二は量的・動的なる問題であり、三は本位の問題これである（S. P. Altmann, Zur deutschen Geldlehre des 19. Jahrhunderts. Gustav Schmollers Festschrift. 1908. I. Teil, Abh. VI, S. 4）。而して第一の質的な問題と第二の量的・動的なる問題とは、貨幣の內容に關するものであり、第三の本位問題は貨幣の形式に關するものであると言ふことが出來る。換言すれば、はじめの二つのものは貨幣の理論的な問題であり、第三のものはその實踐の問題である。もとよりこれら二つの問題の間には密接なる關聯の存することは言ふをまたざるところである。しかれども、貨幣の問題、ことに貨幣の內容の問題、それの純粹に理論的なる問題を、質的ならびに量的の二つの問題に分つことがアルトマンに溯らしめられる所以のものは、實に、こゝに出づるがごとくである。

しかるに論者は、この貨幣の靜的・質的なる問題をもつて「貨幣本質論」であるとなし、そこにおいて取扱はるべきものは、「貨幣の發生、貨幣の機能、貨幣の概念などであり、すなはち此處に於いては……貨幣の本質を明らかにすることにある」と述べて、第二の貨幣の量的・動的なる問題とは「貨幣價値論」であると主張する。そうして、「貨幣價値論に於いては先づ貨幣價値の發生、成立と貨幣價値の變動理論を研究することが主たる內容をなす。從つてその觀察は量的であり、かつ、貨幣價値の量的變動を明らかにするが故に、貨幣に對する動態的研究たる點に特徵がある」と（註二）。このやうに貨幣の理論的な問題が、いまや、貨幣本質論と貨幣價値論、ことに貨幣の價値の變動の理論との二つに分類されるにいたり、こゝに貨幣の價値の問題は、すべて、貨幣の量的・動的な問題なりとされることゝなつたのである。そうして貨幣の價値性の問題は、無視いな看過されさへもした。しかもこのやうな見解が、今日の貨幣の理論の世界では、支配的なものとなつて居るがごとくである（註三）。

註二　荒木光太郎教授「貨幣概論」序三頁參照。

註三　例へば、田中金司教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」（「國民經濟雜誌」第四十九卷　昭和五年）七〇一頁、――竹島富三郎教授「貨幣本質の研究」一八四頁および一八―一九頁、――栗村雄吉氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（九州帝大「經濟學研究」第六卷　第四號）一八八頁、――正井敬次教授「貨幣價値の研究」一一二頁、一三六―一三七頁、一七四頁および一七七頁參照。

もちろん竹島教授は、「貨幣の價値に就いては、貨幣の價値の特質（價値一般との異同）、種類、成立、變動ならびに安定が問題

となる。……貨幣の價値の特質は貨幣の本質で規定される。……そうして貨幣の本質はこれを靜態的に研究し得るが、貨幣の價値はこれを動態的に研究してはじめて全きを得るのである」と述べて、貨幣の價値の問題には嚴密に言つて、質的・靜的な側面と動態的な側面なる二つの側面のあることを認めて居られるがごとくである（前掲書、七頁參照）。それにも拘らずそこには、貨幣の價値の量的・動態的側面を强調し、昂揚して、貨幣の價値の問題は「量的・動的の問題」がそのすべてゞあるかのごとき敍述すらもが見出されるのである。そうして「貨幣本質の研究」においては、貨幣の價値の問題は、それ自體としては、なにら論ぜられては居ないのである（拙稿「貨幣本質論への一寄與――竹島教授著『貨幣本質の研究』を讀みて」「銀行研究」第三十二卷　第二號　昭和十二年　一七九頁以下參照）。なほ本書、第三編、第七章參照。

ところで、貨幣の價値の「發生、成立」、したがつて貨幣の價値そのものゝ基礎づけが、貨幣の價値の變動の理論とともに量的なる問題として、「貨幣に對する動態的研究たる點に特徴」を看取することが出來るであらうか。すべて存在するものはあるなにらかの量において、特定の大いさをもつて存在するを常とする。このことは貨幣の價値についても同樣に言ひ得るところである。すなはち、貨幣の價値も、常に、一定の量において、ある特定の價値量として存在する。從つて量の規定をはなれて貨幣の價値そのものは存在しない。この意味において、貨幣の價値の問題は、また、數量的な問題であるとも言ふことが出來る。ことに貨幣の價値の變動は、まつたく量的變動の姿においてのみ現はれ、貨幣價値變動の理論は、「その觀察は量的であり、……動態的研究なる點に特徴がある」と言ふことの出來る所以なのである。他方、存在は大いさにおいてのみならず、一定の質をもつた大いさとして現はるべく、貨幣の價値も、いな一般には價値も、純粹に量としてのみ現はれるものではなく、それはなにらかの質をそなへたる大いさとして、一定の質によつて規定されたる一定の量として實在するのである。それゆゑに、貨幣の價値の問題は、貨幣の價値そのものゝ基礎づけの問題を含み、それの大いさの問題とともに、質的な問題をも含んで居るのである。貨幣の價値の「發生、成立」の理論は、貨幣の「價値性」の問題であり、從つてそれは量的觀察たるの點に特徴があるのではない。むしろそれは價値の性質に關する問題であり、價値そのものゝ基礎づけの問題である。そうして貨幣の價値の變動の理論のみが量的・動的なる問題なりといふべきものなのである。

もともと貨幣の本質の問題とは、貨幣の本質的機能の問題とゝもに貨幣の價値性の問題をも含み、それらはすべて貨幣の質的なる問題の研究內容に屬するものなのである（註四）。そうして質的ならびに量的なるこれらの二つの貨幣の問題の領域のあひだには、緊密不可離なる聯關が存して居るといふべきである。貨幣の價値性に關する理論は、同時に、價値の變動の理論を規定し、貨幣の價値の靜態理論（成立論）における一定の立場は、それが動態理論における特定の立場と必然の聯關を有するところよりして、兩者は混然として述べられ、貨幣の價値の理論といへば、往々それの變動の理論とし

て、それの動態理論に重點をおかれるにいたつたものゝごとくである。しかしながら、これらの二つの理論は嚴密に區別せられるを要するとゝもに、その間の必然の聯關も明らかにされねばならないのである。けだし、貨幣の價値の動態理論は、しばしば、その據つて立てるところの貨幣の本質觀より遊離し、あるひはそれら二者の間に矛盾の存することも意識せざるにいたらしむべき誘因のはぐくまれるおそれが多分にあり得るからである。さうしてこのことは、貨幣價値理論の動態論的性格觀のすべてに共通するところの根本的な缺陷であるものゝごとくである。

註四　拙著「貨幣本質の諸問題」一六頁以下、ことに二〇頁參照。

柴田敬氏に從へば、貨幣の本質の問題とは、貨幣の本質的機能如何の問題にすぎずとなし、貨幣の價値の基礎づけの問題をば、貨幣の本質に關するものではないとして居られるものゝごとくである。そうして貨幣の價値の問題をば、貨幣本質觀からひきはなして、もつぱら、量的な規定の問題であるとなし、「貨幣の固有の主觀價値」の「基礎は、貨幣の過去の購買力である」として居られる。すなはち、柴田氏に從へば、「需給函數は、歴史的に規定されたる個々人の態度に因つて決定される、といふことを指摘することは、需給函數による價格の理論的說明を、非理論的たらしめるものではない」。「需給函數は歴史的に、例へば、過去の交換價値等々によつて、規定されたる個人の態度によつて決定されるものであることが明らかなる場合にも、當該需給函數を以つて、來るべき價格を說明することが、一應の理論的說明である。」すなはち、需給函數を通じて一時點から他の時點への價格の變動、したがつてそれの量的變動の過程が說明せられるがごとく、貨幣の固有の主觀的價値も過去の購買力によつて、それの量的動的なる說明は得られる。併しながら、「一應の理論的說明」のこの理論階段にあつては、貨幣の價値そのものゝ基礎づけは、まつたく、與へられては居らない。この貨幣の價値の質的な問題は、後の理論段階において、はじめて、取扱はるべきものなるがごとくである。すなはち、「以前の貨幣の價値、以前の貨幣の價値へと溯つて行」き、「遂には、きつと、貨幣の主觀價値の基礎たるものゝうちに、一般的間接交換手段としての貨幣の職能に由來する何ものも含まれてゐない時點、すなはち、貨幣の主觀價値の基礎が、貨幣以外のものとしての價値に過ぎない時點」に達する時にはじめて、論ぜられてゐる。そうしてそこではミーゼスと同じく、貨幣の機能價値學說とは無關係に、その本質觀とは矛盾して、貨幣の價値をばそれの素材商品の主觀的價値をもつて基礎づけんとして居られるものゝごとくである（柴田氏「理論經濟學」上卷　第三章　第二節　註四、八八―九〇頁參照）。なほ前揭拙著、一一四頁註二參照。

かくのごとく、貨幣の本質の問題のうちに貨幣の價値の基礎づけの問題を含ましめざる立場は、結局、貨幣價値理論の動態論的性格觀と相通ずるものゝごとくである。

もとよりアルトマン流の分類規定に對する前揭のごとき變改は、それ自體としてはなにら重大なる意義を有するものとも考へられない。しかれども、貨幣の價値の質的側面の抹殺、それの量的・動的側面の昂揚こそは、その由つて來たるところが遠くかつ深い。一見このさゝいなる變改も、論者の貨幣の本質觀の理論的缺陷のうちに根ざせるものであつて、論者の貨幣價値理論の動態論的性格觀もそれによつて制約され、かつそこにこそその理論的根據は看取さるべきものなのである。

すなはち、一般的に言つて、交換手段學說なるものは、貨幣の固有なる主觀的價値の基礎づけにおいて成功したるものと言ふことは出來ない。いな、交換手段學說にあつては、もともと、貨幣の商品性とともに、それの價値の固有性は拒否されてゐるのである。貨幣の主觀的交換價値がそれの客觀的交換價値の反映であることゝ、貨幣の客觀的交換價値そのものゝ反映性、それの受動性とは、交換手段學說が、ついに、それの貨幣の價値の變動の理論として、數量說的見解と結合することを必然的たらしめたのである。

ところで、貨幣の價値の反映的な受動的な性格の主張は、いまだ貨幣の價値の本質的な問題に答へたるものとは言ふことが出來ない。換言すれば、貨幣の價値の基礎づけの問題には、實は、少しも答へてゐないのである。そうして、單に、貨幣の價値の變動の問題をのみ究明せんとしてゐるにすぎない。といふのは、貨幣の主觀的交換價値を基礎づけんとしてそれの客觀的交換價値をもつてし、それの反映なりとなすことは、貨幣の主觀的交換價値の問題をばそれの客觀的交換價値の問題へと推し移したゞけであつて、そこには、いまだ、なにらの解決も與へられてはゐないからである。さらに、貨幣の客觀的交換價値の反映的性格の論證は、これまた問題のまことの解決とは言ふことが出來ない。數量說的見解をもつてする貨幣の客觀的交換價値の解明は、客觀的交換價値そのものゝ基礎づけではなくして、それが量的變動の問題に關するものたるに過ぎない。かくして交換手段學說にあつては、貨幣の價値の問題をば、ただ、それの量的變動の問題へと推移せしめたるにすぎずして、そこには、ついに、價値の問題の解決は看取さるべくもない。このやうな貨幣本質觀における不生產性は、やがて、貨幣の價値の問題を動態論的な性格のるのたらしむるにいたれるがごとくである。

ところで數量說的見解、ことに貨幣數量說に對しては、從來、おほくの反對論があり、今日もはやそれの理論的正當性は否認せられんとしてゐる。これ貨幣數量說の修正的見解として、多くの數量說的見解の出現をみたる所以でもある。しかしながら、それらのうちにあつてもつとも優れたるものとせられてゐるところの所得數量說に就いて見るも、ミーゼスの批判をまつまでもなく（註五）、問題の解決にはなほ前途遼遠なるの憾みなしとはしない。ことに、これら論者における商品價値原理と貨幣價値原理との二元論的主張が、兩價値原理の一貫性を主張する交換論的貨幣理論の影響のもとにあつては、商品價値理論における動態論的性格觀とも言ふべき一般均衡理論の發展と相俟ちて、動態的價値原理による貨幣と商品とに關する兩價値理論の一元的主張によつて代られるにいたつたことは、まことに、見やすきことわりであらう。すなはち、交換論的貨幣理論のいふところの商品ならびに貨幣の價値性に關する一元的原理、換言すれば兩者の靜態的價値原理についての一元論にかはつて、いま

や、動態的な價値原理の一元論が提唱せられるにいたつたのである。このやうな商品價値論に關する動態論的な性格觀は、中山教授の主張におけるがごとくに、限界效用學説の「不生産性」によるものであつて（註六）、この動態的價値學説は、やがて、貨幣の價値の理論へも適用されるにいたり、こゝにミーゼスの意圖とは異なれる、動態的價値原理の一貫性による交換論的貨幣理論なるものが學界を風靡せんとするにいたつたのである。

註五　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. 2. Aufl., 1924, S. 95.

註六　中山伊知郎教授「數理經濟學方法論」（改造社版經濟學全集　第五卷「經濟學の基礎理論」）一一七頁參照。

かくして吾々は、貨幣の價値の問題をば貨幣の價値性の問題からはなれて、いなそれをばまつたく捨象して、もつぱら、純粹に量的な問題として論じ、貨幣の價値の變動の理論をもつてそのすべてなりと主張するところの、謂はゆる貨幣價値理論における動態論的性格觀なるものゝもつとも發達せる形態であり、それのもつとも典型的なるものとして、いまや、一般均衡論的貨幣價値理論、すなはち數理經濟學の貨幣の價値の理論を擧げることが出來る。そうして貨幣の本質に關する交換手段學説と一般均衡の理論との必然的なる聯關性は、そこに、看取せられるがごとくである。

いま、たとへば、栗村氏に從へば、「惟ふに一般財の價格理論と雖も、財の可能なる價格が如何にして現實の價格となるかの説明をなすこと以外には、課題を持つものではない。貨幣價値の理論は一種の價格理論である。嚴密に云へば、貨幣の價格理論である。貨幣が一般財とその本質を異にすることから、當然に、貨幣の價格の決定に參與するところの條件は、一般財の價格理論に於いてその價格の決定條件としてあげられるものとは異なる筈である。しかれども、價格の理論であるといふ點において共通のものを持つ。共通のものとは、すなはち、可能なる價格の中より如何なるものが現實の價格として決定せられるかの機構を明らかにすることである」と（註七）。こゝでは、貨幣の價値の理論が、可能なる價格から現實の價格、從つて貨幣の可能なる客觀的交換價値から現實の客觀的交換價値、の生ずる過程をば量的なる變化として究明する、といふことのうちにのみ看取されて居るのである。そうして可能なる價格であれ、現實の價格であれ、價格そのものゝ質的なる側面、したがつて貨幣の客觀的交換價値の基礎づけの問題は、まつたく、看過されて居ると言はねばならない。栗村氏にとつては、貨幣の價値性の問題は、まつたく、生ずべき餘地なきがごとくである。

註七　栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（「經濟學研究」第六卷　第四號）一八八頁參照。

いま、このやうな見解が、貨幣の理論をば價格の理論たらしめ、したがつて貨幣の理論そのものゝ固有の存在理由を抹殺するの結果にいたるであらうといふ非難のあり得ることは（註八）、これを措い

て問はずとするも、しかもなほ問題は殘る。このやうな質的側面の抹殺、量的側面の昂揚は、すでに論者の價格理論に於ける方法論のうちにその根據が求められる。

註八　高田保馬博士「經濟學新講」第三卷　三頁參照。

高田博士に從へば、「若し、徹底的に金屬說の立場をとるならば、而して貨幣の價値をその素材の價値によりて定まるとのみ見るならば、從ひて貨幣を一つの商品として見るならば、財の財に對する交換能力（社會的、すなはち客觀的）なる價格の理論の外に貨幣の理論と云ふものはあり得ない。從ひて、交換の理論は價格の理論、從ひて交換價値の理論を以つて盡きるはずである。」このやうな立場からは、栗村氏の貨幣の價値の理論に就いても同じやうな批判がなされ得るであらう。私は、もちろん、栗村氏の見解をもつて、金屬主義學說なりとなすものではない。しかれども、貨幣の價値の理論をば、財貨の價格の理論とその理論的性格においてなにら變るところなしとする意味において、栗村氏は、高田博士の謂はゆる貨幣の理論の價格の理論化を主張するものであり、したがつて固有なる意味における貨幣の理論の存在理由を抹殺するものとなるからである。

栗村氏の强調するところに從へば、――古來、諸種の價値理論または價格理論がとなへられた。而してそのうちのあるものは、需要の側の事情を與へられたるもの、あるひは恒常なるものと考へ、あるひはそれを無視して、供給の側に價格決定の要因を求める。これ謂はゆる客觀的價値理論または客觀的價格理論である。しかるに他のものは、供給の關係を與へられたるもの、恒常なるものと考へ、あるひはそれを無視して、價格の決定要因を需要の側に求める。而して需要を決定する要因としては、結局、消費者の側における效用と購入餘力が擧げられてゐるのではあるが、後者を與へられたるものとすれば、需要の決定要因としては效用のみとなる。從つて、このやうに消費者の認める效用に價格決定の要因を求める見解は、主觀的價値理論または主觀的價格理論と言はれる。「これら二つの見解にありては、それぞれ、一方において與へられたと考へられるもの又は無視されるものが、他方において變化するものまたは決定するものと考へられてゐる。しかるに、價格の決定において、一方、需要の側の事情なかんづく需要量が問題の所與條件でないとともに、他方、供給の側の事情なかんづく供給量もまた所與條件ではない。それらはともに問題の未知の條件である。それ故に、需要の側の事情を與へられたるものとして供給の側の事情に價格の決定要因を求めるところの客觀的價値論が十全であり得ないとともに、供給の側の事情を與へられたるものとして需要の側の事情に價格の決定要因を求めるところの主觀的價値論もまた十全ではあり得ない。茲において需要および供給兩側の事情を共に而して同樣の重さにおいて考慮に入れて、價格現象を說明せんとする價格理論が成立せねばならぬ。而して、それのみが十全たるものといはるべきであらう。而してかゝる見解の最も有力なるものは一般均衡價格理論である」と（註九）。

註九　栗村氏「需要函數論」（九州帝大法文學部十周年記念經濟學論文集）五七―五九頁參照。

論者の見解に從へば、價格決定の說明において、主觀的價格理論も客觀的價格理論もともに一面的なる因果論に終始せることのゆゑに不充分なりと主張されて居るものゝごとくである。そうしてこゝに、これらの一面性を止揚せる價格理論として、一般均衡論的價格理論の存在する所以があると。すなはち、一般的均衡の理論にあつては、經濟現象または經濟的諸量の一般的な相關々係をば純粹に取扱ひて、「近視眼的な因果關係論の誤謬」に陷ることを、極力、排斥せんとするものゝやうである（註一〇）。換言すれば、一般均衡の理論の意義は、「經濟現象の一般的相關々係をば理論の基礎とするところにその第一の特質を有するものである。」「均衡理論の問題は、かくして、常に、相互依賴の關係に立つ一つの體系を形成する經濟的諸量に於いて、ある種の量が變動すれば他の量は如何に動くか、或ひはこの體系に於いてなにらかの變動への傾向が全然存在せざるがためには、これらの殘りの量の相互關係は相互に如何なる關係に立たねばならないか、を研究し叙述することにある。主たる目的とせられるところは函數關係の叙述、ないしはその變動過程の叙述にある。故に函數關係、相關々係にあるところの經濟的諸量それ自身は始めから完全に與へられて居らねばならない」（傍點筆者）（註一一）。そこでは、もはや、經濟現象の質的側面は捨象されて、もつぱら量的なるものとして、それらの函數關係が取り上げられるにすぎない。このやうな方法論的な立場に顧みてこそ、こゝに、はじめて、貨幣の價値の問題にあつても、それの變動の問題のみがその中心的なテーマーとされる所以が理解し得られるのである。

註一〇　中山教授「數理經濟學方法論」九二―九三頁參照。

註一一　中山教授、前掲論文、八九―九〇頁參照。

ところで經濟學、ことに價格理論における主觀主義と客觀主義との綜合、「近視眼的因果論」の克服なるアンビシアスな試みが、一般均衡の理論または純粹經濟學において、果して、成し遂げられたるものと見うるであらうか！　謂はゆる主觀主義的價値理論にしろ、客觀主義的價値理論にしろ、いづれも、價値に關する一面的なる因果論的動態理論たるの點に、それらの理論的性格が看取さるべきであらうか。問題は發展して經濟學方法論一般にまで進められなければならない。併しながらそれは、ここには、その場所を得たるものではない。たゞ當面の問題にとつて必要なる範圍においてのみ、私の立場を明らかにしておかう。

價値または價格の理論における謂はゆる主觀主義と客觀主義なるものは、價格の決定要因として、一つは主觀的な要因を、他は客觀的な要因をとつて、それらの數量のみからして、價格變動の過程におけるそれらの、因果的關係を主張するにすぎざるものであらうか。それらは、主觀的あるひは客觀

的の別はあれ、いづれも、特定の一經濟量を原因として他の經濟諸量の變動の過程を、すなはち價格形成の過程を論ずるにすぎざるものなのであらうか。惟ふに、決して、かくのごとく斷定することは、にはかに許さるべくもない。それらは經濟的諸量間の、單に、一面的なる因果的說明に終始するものではなくして、むしろ、經濟的諸量の質的な側面の强調、これが闡明にこそ、その中心的なる課題をもつて居るものであると思はれる。元來、單なる量的規定には主觀的あるひは客觀的の別はあり得ない。たゞ、質的規定においてこそ、主觀的または客觀的の別がはじめて問題となり得るのである。從つて、數理經濟學に謂はゆる經濟量についていふところの主觀的ないしは客觀的の別なるものは、もともと、それらに本質的なる區別であるとは言ひ得ない。むしろ、それらは單に外的な區別の標徵にすぎざるものと考へられる。一般均衡の理論にあつては、經濟現象はすべてその質の捨象されし量の一規定に還元され、それらの量と量との間の函數關係が問題とされるより外なきがごとくである。そこでは、もはや、現象の質は問はれず、それらは與件として前提されて居るにすぎない。これ、論者にあつては、「均衡理論に入り來る一切の大いさは、一應、はじめから、與へられて居なければならない。これが與へられたうへで、ある變動に對する他の全體の變動が問題とせられるのである」と主張せられてゐる所以である（註一二）。

註一二　中山教授「數理經濟學方法論」九一頁參照。

しかれども、價値理論または價格理論における謂はゆる主觀主義ならびに客觀主義にあつては、經濟量そのものに固有の質的側面が問題とされて居るのである。主觀主義的價値理論にあつては、商品の價値または價格の性質をば、主觀的に、限界效用をもつて基礎づけ、そうして客觀主義的價値理論はそれを客觀的な生產費をもつて基礎づけんとするものなのである。この點は中山教授も、すでに、感知せるところであつて、教授のつぎの言葉よりして、容易に、これを推測し得るとともに、一般均衡の理論の限界もまた、その敍述のうちに露呈されて居ると言ふことが出來る。すなはち「謂はゆる基礎づけの試みをもつて代表せられるところの從來の經濟學に對して、一般均衡理論の特質とするところは、それが問題の所與とするところのものを必要以上に追及せざることに存する」（註一三）。かくして經濟量の質的側面はこれを與へられたるものとなし、たゞ量そのものとして、それらの間の函數關係、變動の過程を敍述することのみにあるものゝごとくである。從つて、主觀的ならびに客觀的な價値または價格の理論と一般均衡論的價格理論とは、すでに、その出發點において異なれるものと言はねばならない。

註一三　中山教授「數理經濟學方法論」九三頁以下、ことに九五頁、および柴田氏「理論經濟學」上卷　八九―九〇頁參照。

言ふまでもなく、「相關々係にある經濟的要素の一方をもつて他方の原因たる地位におかんとする一切の基礎づけの試みは、經濟現象の相關性についての充分の認識を伴はざるかぎり、その出發點において、すでに、成功への途に遠ざかるものであると評さざるを得ないのである。」有機的なる全體をなす經濟的諸量を單純に量としてみるかぎり、それらの聯關をば單に一面的なる因果の關係をもつて律しさることは、たゞに「近視眼」的であるばかりではなく、「成功への途に遠ざかるもの」でもあらう。さればこそ、一切の要素を相關關係において見んとする一般均衡の理論における綜合的な試みの意味も、また、認めらるべきである。主觀的價値理論も客觀的價値理論も、實は、經濟的諸量をば、單に、量としてのみ考察し、そのかぎりにおいて兩者はいづれも異なるところはないのである。たゞ兩者が、その要因としてとるところの量に異同あるが故に、それぞれ異なれる見解として、相對立する見解として理解し得られるかぎりは、從つてそこになにらの本質的な對立の看取せられるかぎりにおいては、それら二つの價値理論の綜合は、一般均衡の理論の意圖せるがごとく、容易なるものであり、また、一般均衡理論はそれに成功せるものと言ふことが出來やう。しかるに、兩者の差異が本質的なものであり、まつたく次元を異にせる主張であるかぎりは、具體的に言へば、經濟量の質的な基礎づけの仕方における差異であるかぎりにおいては、元來、質的な側面を捨象し、これを問題としない一般均衡の理論にあつては、それらの綜合なる問題は、はじめから、生じ得べくもない。

もともと主觀的あるひは客觀的なる對立といふことは、あくまでも、質的規定におけるものであつて、それは決して量的なる規定におけるそれではあり得ない。かくして、主觀的または客觀的價値理論における對立にして本質的なるものと見るかぎりは、それらの綜合への道は、最初から、一般的均衡の理論のうちには見出さるべくもない。たゞこれが對立をば、外的な、非本質的なものと見るかぎりにおいてのみ、すなはち、經濟量そのものにとつてなにら本質的でない、單に二次的な標徴としてのみ見るかぎり、一般均衡の理論にとつてもまた謂はゆる綜合なるものが問題となし得るのである。從つてこゝに謂ふところの綜合なるものは、言葉のまことの意味における綜合ではなくして、單に諸種の量的要因を合計し得たといふにすぎず、それは機械論的なる總括でしかない。さればこそ中山教授も一般均衡の理論の本來の活動分野をばかく規定される所以であらう。

すなはち「一般均衡理論が先づ限界利用學説とともに發達し來つたことは、かくてそれが需要函數の一定の性質を前提として成立するものであること、及びこの需要函數の分析から一般的均衡理論の成立に必要なりし限界利用を中心とする諸概念に到達したるものは、實に、心理的なる限界利用學派にほかならなかつたと言ふことに依つて、充分に説明せられ得るであらう。」かくのごとく、需要函

數の一定の性質を知ることが理論のためには必要であるとはいへ、このことのゆゑに限界利用學説のごとく、需要函數について知られたる一定の性質を以つて、あらゆる經濟現象を因果的に説明せんとすることは行き過ぎである。いな、「限界利用の觀念をば原因としてそのうへに因果的構造を有する一貫せる理論體系を構成すること」は非常なる困難に當面すべく、「この困難こそ、一般均衡理論としてその本來の面目に歸らしめたる契機であるといふことは出來る」(傍點筆者)。すなはち、質の問題をば放棄して、具體的差別を量的差別に還元し、比較數の同一性の假定のうへに立ちて、もつぱら、數量間の函數關係をのみ問題とするにいたらしめたのである。かくして一般均衡の理論に固有の分野はこの量の世界であつて、もとより質の世界では決してなかつたのである(註一四)。

註一四　中山教授「數理經濟學方法論」一一五―一二一頁參照。

もとより質をはなれて量なるものはあり得ない。ある大いさなるものは、常に、一定の質をもつた大いさでなければならないのである。しかるに質を捨象せる量にのみ固執して、量の問題をば質の問題から恣意的に引きはなしておくかぎりにおいてのみ、商品の價値の問題をもつてそれの變動の問題であるとなし、商品價値變動の問題のみが商品價値理論の課題のすべてゞあるともなし得られるのである。このやうな一般均衡の理論における商品價値についての動態論的な性格觀の完成は、もとより、論者によつては、一般均衡の理論本來の面目にかへりたるものとして賞揚せらるべくも、限界效用學説そのものゝ「不生產性、それの理論體系構成上の困難」、に結びついてゐることは、これまた明らかなるところである。しかれども、限界效用學説の理論的不成立をもつてしても、經濟學ことにそれの中心的部分たる商品價値の理論におけるながき傳統である商品價値そのものの基礎づけの問題、いはゆる商品價値についての靜態理論、の無視あるひはこれが放棄を、理由づけるにたるべき正當なる根據は與へらるべくもない。これ最近の學界における一般均衡論的な研究成果の續出するの壯觀をもつて、限界效用學説の不毛の地上に咲きいでたるあだ花の競艶にも譬へられし所以であらう。

このやうな一般均衡論的な商品價格の理論が貨幣の理論の分野にうつされる場合には、貨幣の價値の問題をもつてそれの變動の問題であるとなし、貨幣の價値の變動の問題のみが貨幣價値理論の內容の全部であるともなし得られるわけである。しかしながら、ひとたび、なにらかの意味において、それが貨幣の本質、ことにその基本的機能との聯關において反省されざるを得ざるにいたるとき、一般均衡の理論にあつても、主觀的價値理論かあるひは客觀的價値理論かのいづれかに、みづからの立場の根據を求めて、貨幣の價値性についてその根本的なる態度を決定すべきことを迫られる。これ商品價格の理論においては、一般均衡の理論にあつても、心理的なる限界效用學説にその出發點を求めて、

商品價格の基礎づけに、從つて商品の價値の質的規定に關して一定の前提をおいてゐる所以である。同じことは貨幣の價値の問題においても言ひ得るのであつて、例へば前掲のごとく、柴田氏が貨幣の固有の主觀的價値の説明根據を貨幣の過去の購買力のうちに求め、さらに、貨幣の價値の歴史的連續性の構想をもつてそれを基礎づけんとされし所以でもある。換言すれば、柴田氏は、貨幣の固有の主觀的價値をば、究極において、貨幣商品の使用價値をもつて基礎づけて居られるものゝごとくである（註一五）。

註一五　柴田氏「理論經濟學」上卷　八八頁以下參照。なほ前掲の一二頁註四參照。

しかるに栗村氏は、貨幣の價値の問題を、それの量的な變動の機構を究明することをもつてそのすべてであるとなし、貨幣の價値性の問題をば、まつたく、捨象して顧みやうとはしておられないやうに思はれる。そうしてミーゼスの意圖に反して、彼の貨幣の價値の歴史的連續性の問題をも、もつぱら、量的な性格の問題となして、前掲のごとく、貨幣の可能なる價値から現實の價値の生ずる過程を究明することをもつて貨幣價値理論の本來の使命となすべしとの結論に、到達せられしものゝごとくである（註一六）。すなはち、ミーゼスのごとく、貨幣の過去に實在せし價値から現實の價値を説きて、貨幣の價値性の主觀主義的なる基礎づけを果さんとする方法をとらずして、可能なる價値から現實の價値を誘導してもつて貨幣の價値の量的變動の機構のみを明らかにせんとされるに過ぎないのである。しかれども、高田博士も述べて居られるがごとくに、「今日の貨幣の貨幣たり得るのは一つに連續性のゆゑである。かくて、貨幣が價値をもつのは貨幣の連續性のゆゑであるが、この價値の大いさの決定については、この連續性がなにらの作用を有し得ない、と思ふ。詳言すれば、連續性の作用は貨幣の價値をもつといふ質の上に及べども、その價値の量の上に及ばないのである」（註一七）。すなはち、ミーゼスの貨幣の價値の歴史的連續性の構想の理論的性格は、貨幣の價値の量的變動の問題を明らかにすることに求めらるべきではなくして、むしろ貨幣の價値の質的なる基礎づけを問題とせるものなるの點に存するものと言ふべきである。

註一六　栗村氏がミーゼスの貨幣の價値の連續性の理論の存在理由を如何に量的な視角から論じて居られるか、それの變解の點は、次の敍述からして明らかに看取せられる。

すなはち「貨幣價値は歴史的に連續するか。私の考ふるところに依れば、貨幣の客觀的價値は、二つの側の要因によりて定まる。第一、貨幣側の要因、就中、費消にあてらるべき貨幣量。それは單に消費者の手許にある費消貨幣量すなはち購入餘力のみではなく、企業者の手許にある購入餘力をも含む。……第二、財の側の事情、就中、需要を決定する諸要因及び供給を決定する諸要因。これらの要因が與へられるならば、それによりて、財の價格の相對的値が決定せられるのみならず、絶對的値も亦決定せられる。從つて、貨幣の客觀的價値が決定せられる。それらの諸要素のすべて或ひは一つでも變化するならば、諸財の絶對

的價格は變動し、從つて貨幣の客觀的價値も亦變動する。貨幣側の要素と財側の要素との一々の組合せに相應して、貨幣の客觀的價値の一々の値がある。それ故に、それらの要素の組合せの間に大なる差異があるならば、貨幣の客觀的價値の間にも大なる差異が生ずるであらう。或ひは又、要素の組合せの間に變動がないならば、貨幣の客觀的價値の間にも何等の差異もない。而して、現實の社會に於いては、それら要素の組合せの一つは他と相互聯關の關係にあるであらう。それ故に客觀的價値は次から次に變動して行くであらう。併しながらそれはあくまで、事象の歷史的發展の局面のみを見た見方である。少くとも、理論的に考ふる時、貨幣の客觀的價値の一つの値は、それの關係する固有の要素の組合せに依つて決定せられたのであつて、歷史的時間的に繫るところの過去の貨幣の客觀的價値によりて決定せられるのではない。この二つの間には論理的になにらの必然關係の存在は認められぬ。貨幣の客觀的價値の一々の値は歷史的連續的に決定せられる必要はない。他の値に獨立に而して固有的に決定されるに必要にして十分なる條件を持つからである」と（栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（前揭雜誌　第六卷　第四號）一九〇―一九一頁參照）。

貨幣の客觀的交換價値の歷史的連續性をば、かくのごとく、その最的な聯繫としてのみ解するときは、ミーゼスの理論構成におけるそれの存在の理由はまつたく沒却されざるを得ないであらう。この點に就いては次章において詳論されるであらう。

註一七　高田博士「經濟學新講」第三卷　二四四―二四五頁參照。

とまれ貨幣の價値の問題は、必然に、貨幣の本質觀の問題と相關聯し、內的な論理的な聯關を有するものなのである。いな、貨幣の本質に關する問題、したがつてその靜的・質的な問題は、アルトマンも言へるがごとく、貨幣の概念や諸機能とゝもに、金屬主義や名目主義におけるがごとき貨幣の價値の基礎づけの問題をも、また、そのうちに含んで居るものなのである。そうしてこの貨幣の本質觀、すなはち靜的な問題に對する立場の相異は、やがて、貨幣の量的・動的な問題に對する見解の相異をも決定する。貨幣の靜的問題は必然に量的・動的問題を制約し、その間に內的な、論理的な、必然の聯關を有するものである。このことは高田博士も强調して居られるところである。すなはち「貨幣は如何にして、又は何故に價値（購買力）を有するか」といふ、すなはち「貨幣の本質如何と云ふ、貨幣の靜的性質問題」に關して、金屬說（ないしは商品說）をとるか指圖權說をとるかに應じて、人は「貨幣の價値は如何にして決定せらるゝか。すなはちこれを決定する事情、したがひてこれが變動を左右する事情は何であるか」といふ「動的數量的問題」に關しては、生產費學說か「數量的見解」をその必然的な結論として持たねばならないと（註一八）。

註一八　高田保馬博士「經濟學新講」第三卷　二四三頁、二四八頁および二九七頁以下、――拙著「貨幣本質の諸問題」第二章參照。

私は、もちろん、貨幣の質的問題における一つの態度と貨幣の量的動的問題における特定の態度との間に、必然的な聯關を認むる點においては、高田博士の所說にまつたく追隨するものであるとはいへ、生產費學說と「數量的見解」との對立はこれを認めない。それは、元來、生產費學說と「數量的見解」とは同一平面上における研究內容についての異見である、とは言ひ得ないからである。兩者はその理論的性格をそれぞれ異にしてゐるものなのである。この點に關しては、舊著「貨幣本質の諸問題」に

おける私見の展開には誤解の生じ得る表明がすくなくないと思ふ。他日稿をあらためて詳論したいと思つてゐる。

このやうに貨幣の靜的問題における一定の立場をとれば、動的問題については、必ず、特定の見解をとるにいたらざるを得ざらしむべく、二者の間には、必然的な聯關が存するのである。しかるに「貨幣は何故に價値を有するや」といふ貨幣の價値の基礎づけの問題、したがつて貨幣の價値の靜的・質的な問題を、看過あるひは無視して、貨幣の價値の問題とは、もつぱら、「貨幣の價値の大いさが如何にして決定せらるゝやの事情」の究明のみなりとなし、その動的・量的な問題にのみ限定することは、前述のごときこれら二つの問題の間の必然的なる聯關の存在を認識せざるものと言はねばならない。かゝる貨幣の價値の問題をば量的・動態的な性格のものと見る立場は、貨幣の本質觀、したがつてその靜的・質的な問題よりの遊離のうちに、その理論的な根據をもつて居る。いな、むしろ、貨幣本質觀そのものゝ不生產性は、貨幣の價値の問題をば、もつぱら、動的・量的な問題において展開することを必然ならしめたるものと言ひ得るであらう。一般的に言つて、謂はゆる交換手段學說、または廣義における名目主義的貨幣本質觀における、貨幣の價値の基礎づけの不成功は、貨幣價値學說の理論的性格をばまつたく變動の理論たらしめて居ると言ふことが出來る。例へば、ミーゼスやヘルフェリッヒにおける貨幣の價値の基礎づけの不成功と需要供給學說的解決への移行などはその一例である（註一九）。

註一九　拙著「貨幣本質の諸問題」第一章　第五節、ことに一三〇頁參照。

さらに商品價値の靜態理論たる限界效用學說の行きづまりに基礎をもつ動態論的商品價値理論たる一般均衡の理論が、貨幣の價値の理論として現はれる場合に、その動態論的性格觀を依然として保持しつゞけることは、これまた當然のことがらである。柴田氏の謂はゆる「一應の理論的說明」の段階にのみ終始して、「その後の理論段階」への道をば遮斷せる、したがつて貨幣の價値性の問題を採りあげて居らない栗村氏にあつては、貨幣の可能なる客觀的交換價値から現實の客觀的交換價値を導き出すことをもつて貨幣の價値の理論の使命が果たされたりとなせしことは、當然の歸結であらう。貨幣の固有の主觀的價値をば過去の購買力をもつて基礎づけんとする柴田氏の主張も、可能なる客觀的交換價値から現實の客觀的交換價値を導出せんとする栗村氏の見解も、本質的には、いづれも、異なるものではなく、ともに貨幣の價値の問題をば量的な問題に限定するものである。そうして貨幣の本質觀から遊離してはじめて、それら二つの見解はともに「一應の理論的說明」であり得べく、またそのかぎりにおいてのみ「正當」なるかのごとくである。從つてそれより「後の理論的段階」に顧みるときには、すなはち、貨幣の價値の問題をば貨幣の本質的機能觀との聯關において考察せんとする場合

には、かやうな貨幣價値理論の動態論的性格觀は、直ちに、みづからの理論的な不充分さを曝露し、矛盾に當面せざるを得ないであらう。

すでに述べたがごとく、質を捨象せる純粹量なるものはあり得ない。從つて一般的均衡の理論にあつても經濟的數量間の函數關係のみを當面の問題とはすれ、すでに經濟的數量の質的規定はこれを與件として前提されて居る。この前提のうへに立ちて、各經濟的數量間の函數關係を問題にして居るものゝごとくである。このことは、一般均衡の理論がすでにみづからのうちにオースタリー學派の經濟學說をば部分的均衡理論として包攝せしめて居ることからしても、容易に知り得るところである。すなはち「今日の一般的均衡理論が、如何に、限界利用、利用度、限界利用均等の法則などを內容として成立して居るかを考へるとき、吾々は現實學派の不毛を暗默のうちに指摘するところのワルラスの言葉も承認せざるを得ない。限界利用を中心とするこれらの諸概念は今日の一般的均衡理論の成立に於いて缺くべからざる要素をなすことに就いては疑ひを容れざるところであり、而してこれらの諸概念は明らかにクールノーが所與として出發したりし需要函數の個人心理的なる分析から生れたものに外ならないからである。かくて一般均衡理論の構成に當つて知ることを必要とする需要函數の性質は少くともクールノーを代表とするところの現實學派によつて與へられず、反つてその反對の心理學派に依つて與へられて居ると言はねばならない。この意味において一般均衡が長いあひだ限界利用說と結合して發達し來たつた消息もまた理解せられるのである。」まことに、一般均衡の理論がその必然的前提としてゐるところの「需要函數の分析において固有の意味における限界利用學說の業蹟も充分にとり入れて居る」のである(註二〇)。またそのことは當然であり、必然のことゝ言はねばならない。この點おなじく一般均衡の理論にその立場をとりながらも、柴田氏は、貨幣の價値の問題においては栗村氏と異なり、「一應の理論的說明」の段階より「その後の理論段階」、すなはち貨幣の價値の基礎づけの段階へと進んで居られる所以ではなからうか。そうしてこの後の理論段階においては、貨幣の本質觀ことに貨幣の價値の基礎づけに對する立場が、はじめて、問題として議事日程にのぼされるにいたるのである。

註二〇　中山教授「數理經濟學方法論」一一四—一二一頁參照。

しかしながら栗村氏にあつては、實は、いまだ、この「後の理論段階」を問題として居られないといふにすぎない。たゞしやがて論理の步みは、必然に、その段階にまで押し進められねばならないであらう。この時こそ栗村氏はみづからの立てる貨幣の本質觀を明らかにすべき時機に達せられる。いな貨幣の價値そのものを如何に基礎づけるべきかを明らかにされねばならない。もちろん、栗村氏は、

他の論點からではあるが、貨幣の本質に關する自己の見解の一端を「交換における貨幣存在の論理的必然性」の形態において展開して居られる(註二一)。この論據そのものに就いては必ずしも私は異論をさしはさむものではない。しかれども、いまだ貨幣價値決定の理論との聯關に就いてはなにら指示されるところがない。たゞそのかり來たりし思想の源流に就いて、ことにシュムペーターに就いては、嘗て私の論じたるところなるをもつて、こゝには栗村氏の主張されるところの論理的歸結に對し、一つの推論だけはこれをなし得るのである。

註二一　栗村氏「交換に於ける貨幣存在の論理的必然性」(九州帝大「經濟學研究」)　第七卷　第一號。

しからば、栗村氏は貨幣をば如何なるものとして解して居られるか、その本質は如何？　すなはち栗村氏は、大體において、レオン・ワルラスの影響のもとに、ウィクゼルならびにシュムペーターと同樣、貨幣の生成を價格機構における間接交換の必然性から說かんとして居られるのである。そうして貨幣の本質的な機能を「價格の一般的表現手段」のうちに看取して居られる。しかもこの「價格の一般的表現手段」なる貨幣の機能は、「普通に價値表彰手段・價値測定手段ないし計算單位としての手段と云はれてゐるものとは、決して同一ではない」とされる(註二二)。その如何なる意味において異同あるやは、いまだ、明らかにされてはゐない。然れども、シュムペーターと等しくワルラスにその構想をとつて居られる以上、シュムペーター的な意味に解して大過はなからう！　もしもこのことにして許されるならば、シュムペーターの貨幣理論の體系において彼の「價値の尺度」としての貨幣が含めると同じ矛盾に、したがつてシュムペーターの解決し得なかつた困難に、栗村氏も當面されるにいたらざるか？

註二二　栗村氏「交換に於ける貨幣存在の論理的必然性」(前掲雜誌　第七卷　第一號)　八九頁參照。

シュムペーターの貨幣理論における難點に就いてはすでに論じておいた。そうしてその際に、中山教授のシュムペーター解釋にも言及して指摘せしところである。中山教授も初期のシュムペーターの見地をさらに生かさんとされ、この點、栗村氏の貨幣の必然觀と大體において同じものゝごとくである。その想源がレオン・ワルラスに發してるとしても、いまの私には彼の見解を吟味するその由もない。しかれどもシュムペーターに就いてみるに、彼は「理論經濟學の本質とその主要內容」(一九〇八年)においては、貨幣の價値の尺度と交換手段なるこれらの兩機能をもつて貨幣の理論における二つの礎石として論じて居つたが、「經濟的發展の理論」(初版一九一一年)では、大體、交換手段機能が前面に現はれ、「社會的生產物と計算片」(一九一八年)においてはまつたく交換手段としてのみ論じ、もつて彼の指圖證券學說を完成して居るのである。

このやうに「價値の尺度」、「價格の一般的表現手段」または「計算貨幣」としての貨幣にかわつて、交換手段としての貨幣が前面に現はれるにいたつたといふ事情は、同じくレオン・ワルラスにその思想をかり來たれるウィクゼルにおいても現はれて居るものゝごとくである。すなはち、„Über Wert, Kapital und Rente“ (1893) においては貨幣または價値の尺度 (Wertmesser) が說かれては居るが、„Geldzins und Güterpreise“ (1898) では交換の手段となり、„Vorlesungen über Nationalökonomie. Theoretische Teil. II. Bd. (1906) においては價値の尺度および交換の手段なる貨幣機能は說かれてゐるとはいへ、交換の手段こそ貨幣の特質をなす根本の機能なりとして居るものゝごとくである。シュムペーターならびにウィクゼルにおける同じやうな傾向、貨幣の價値尺度機能より交換手段機能への重點の推移こそは、一般均衡の理論における貨幣本質觀と貨幣價値決定理論との間に、ある重大なる問題の潛在せることを指示せるものではなからうか(註二三)。

註二三　拙著「貨幣本質の諸問題」第二章ことに第三節、第四節參照。

Vgl. Knut Wicksell, Über Wert, Kapital und Rente nach den neueren nationalökonomischen Theorien. (Series of reprints of scarce tracts in economic and political science. No. 15.) SS. 51 ff., insbes. S. 54; ditto, Geldzins und Güterpreise. Eine Studie über die den Tauschwert des Geldes bestimmenden Ursachen. 1898, (English ed. 1936, pp. 20 et seq., 29.); ditto, Vorlesungen über Nationalökonomie. Auf Grundlage des Marginalprinzipes. Theoretische Teil. II. Bd. Geld und Kredit. (I. schwedische Aufl., 1906.) 1922, SS. 6ff., 15ff.

もちろんウィクゼルにおけるかゝる重點の推移が、他の一般經濟理論ことに彼の貨幣本質觀ないしは貨幣價値理論と如何なる關係にあるかに就いては、他日の研究にまちたいと考へて居る。

第三節　結　論

貨幣の價値に就いては、もともと、二つの問題のあること、すなはちそれの質的な問題と量的・動態的な問題との二つのあることが、明らかとなつた。これら貨幣の價値に關する質的なる問題とは、貨幣の價値性に關する問題であり、それの基礎づけの問題これである。そうしてそれはまた貨幣の本質の問題の一部分でもある。この貨幣の本質の問題、ことに貨幣の價値の基礎づけの問題における一つの立場は、必然に、貨幣の量的・動的の問題、すなはち貨幣の價値の變動の理論における特定の立場と結びつき、その間に緊密なる內的聯關の存するものなのである。しかるにこの必然的なる聯關を無視し、もしくは看過するときには、貨幣の價値に關して、前掲のごとき二つの問題が識別されず、貨幣の價値性の問題はついに見うしなはれてしまふ。そうして貨幣の價値の問題がもつぱら量的・動的な問題として措定されるにいたるのである。かくのごとき傾向は、一般に、貨幣本質觀における交換手段學說、すなはち、廣義の名目主義學說のうちに往々にして見うくるところであつて、それらの貨幣價値論の理論的性格が動態的理論たるにあることは、實に、かゝる聯關の無視せるところに根ざして居るものなのである。而してこれら貨幣の價値の靜態理論と動態理論との存在と、ならびにそれら兩理論間の必然的聯關の、無視ないしは看過を容易ならしめたる所以のものは、まことに論者の貨幣本質觀、ことにその貨幣の基本的機能觀そのものの內包せる理論的困難のうちに胚胎してゐるのである。

由來、交換手段學說にあつてはその貨幣の本質觀そのものの本性からして、貨幣の主觀的交換價値ならびに客觀的交換價値の反映性を主張する。この見解にあつては、したがつて、貨幣の價値の問題はたゞ他の問題へと推し移されてゐるだけであつて、言葉のまことの意味における解決は與へられてはゐない。もちろんこの交換手段學說をその貨幣の本質觀としてとれるものゝうちにあつても、ミーゼスやヘルフェリッヒのごときは貨幣の固有價値の存在を主張し、貨幣の價値性の問題に答へんとしたるものであつた、併しながら、ミーゼスの貨幣の價値の歷史的連續性の構想ばかへつて自己の貨幣本質觀と矛盾するの結果となり、ヘルフェリッヒの機能價値學說はついに經濟外的なる要因へと逃避せざるを得ざるにいたつたのである。このやうに交換手段學說にあつては、その貨幣本質觀の「不毛」のゆゑに、貨幣の價値性の問題はついに回避せられ、貨幣の價値の問題がもつぱら價値の數量的變動の理論として展開されざるを得ざるにいたつたのである。かくして貨幣の價値の靜態理論にかはつて動態理論が貨幣の價値の理論の全部であるかのごとき外觀を呈するにいたつた。貨幣の價値性に關す

る解決の困難は、いまや、「貨幣の價値とは何ぞや？」といふ問題措定の仕方にかふるに、「貨幣の價値はいかにして變動するか？」といふ問題措定をもつてするにいたらしめたのである。

貨幣本質觀における交換手段學說は、かくして、貨幣の價値の理論に關しては動態論的なる性格觀を持するがゆゑに、その價値原理としてはもはや、商品價値を基礎づけるべき原理としての限界效用學說はこれを採り得べくもなかつた。この商品價値原理と貨幣價値原理との異質性あるひは二元論こそは、かへつて貨幣價値理論の商品價値理論よりの獨自性、貨幣理論そのものゝ特異性の强調の論據ともなつたのである。しかれども數量說的見解の理論的な脆弱性は、一般均衡論的貨幣價値理論と交換手段學說との結合を招來するの結果となつた。いなより嚴密に言ふならば、貨幣本質觀としての交換手段學說はその理論的性格からして、貨幣の價値に關しては、當然に、一般均衡論的貨幣價値理論と結びつくべき必然性をみづからのうちに持つてゐたものなのである。

一般均衡論的貨幣價値理論と交換手段學說とが、現實的には、それぞれ別個に展開されるにいたりしことについては、もとよりこれを否定すべくもない。元來、商品價値理論としての限界效用學說の理論的貫徹の困難は、それがつひに動態論的商品價値理論として一般均衡の理論へと展開して行かねばならない論理的な必然性となつて現はれたわけである。この商品價値理論における動態論的性格觀たる一般均衡の理論は、やがてまた貨幣の價値の理論へも適用されるにいたり、動態論的貨幣價値理論として展開されたわけなのである。そうして貨幣の價値の理論においては動態論的性格觀をとらざるを得ない交換手段學說は、いまや、數量說的見解にかはつて少なくともその理論的構成において遙かに精巧なる一般均衡論的貨幣價値理論を得て、一應その理論的體系の整備を完了し、貨幣理論としての完足性を得たるかのごとくである。かくしてミーゼスに從へば、元來貨幣本質觀としての指圖證券學說は非交換論的な性格のものであつたのではあるが、シュムペーターの企圖せる交換論的指圖證券學說が、いまや、一般均衡理論の擴充と發展とによつて、完成を見るにいたつたのである。そうして交換手段學說における貨幣價値理論の獨自性、したがつて交換手段學說そのものゝ非交換論的なる性格は、こゝに消失せざるを得なくなつた。それゆゑに、交換手段學說における貨幣價値理論の獨自性は、たゞ不完全なる動態論的貨幣價値理論を固執するかぎりにおけるものたるに過ぎず、交換手段學說と一般均衡理論との結合によつて、こゝに交換論的貨幣理論が成立し得ることゝなつた。

そのはじめ限界效用學說による貨幣價値の基礎づけの困難は、貨幣本質觀においてはオースタリー學派を交換手段學說と結合せしむることゝなり、限界效用學說の貨幣理論への適用を拒否する、したがつて非交換論的貨幣理論としての交換手段學說は、その貨幣價値理論において數量說的見解をとる

ことゝなつたのである。しかるに、いまや、限界效用學說は、それが動態的な商品價値理論たる理論的性格の確立するにおよんで、一般均衡の理論として展開され、その貨幣價値變動理論としての有用性は、こゝに交換手段學說との結合が可能となつた。そうしていまや主觀的價値學說のうへに立ちても交換論的貨幣理論が完成されるにいたつたのである。それはミーゼスの意圖せるがごとき交換論的貨幣理論とはおよそかけ離れたる性格のものであるとはいへ、むしろそれこそは主觀的價値學說そのものゝ理論的性格にふさはしき當然の歸結なりといふべきであらう。

かくしてすべての貨幣理論は交換論的なるものであつて、もともと非交換論的貨幣理論なるものはあり得ざるがごとくである。たゞその見地の不徹底は時に非交換論的貨幣理論の存在を許容するがごときも、ひとたびその貨幣理論にして價値の問題へと論理の歩みを進めてゆくかぎりは、なにらかの商品價値原理に依據せざるを得ざるにいたるべく、やがては動態的價値原理をもつて一貫せる交換論的貨幣理論か靜態的價値原理に依據せるのそれかの、いづれかに歸屬せざるを得ないであらう。こゝにおいて交換手段學說は動態的貨幣價値理論、ことに一般均衡論的貨幣價値理論との結合が必然である。そうして一般均衡論的貨幣價値理論の動態論的な性格がすでに一般均衡理論そのものゝ理論的性格のうちに胚胎せるものであるかぎり、商品價値に關する一般均衡の理論は、貨幣の本質に關しては、當然に、交換手段學說をとり、かくして貨幣の價値の理論においてその動態論的なる性格を貫徹し得るものといふべきである。これ貨幣が價値形式の發展せるものである以上は、商品價値理論における一定の立場が、貨幣の本質的機能觀を、かくしてまた貨幣の價値の問題における特定の立場を、必然的に豫定するものなることは、當然のことがらである。

ところで動態的價値理論は、言はゞ價値の問題の一半には、答へ得たるがごとくである。そうしてそれの論構の雄大さとそれの精緻さとは、絶大の信服をなげかけられるに充分である。しかれども、そこにあつては、いまだ、價値の問題の他の一半、すなはち價値の靜態論的解明は、少しも與へられてはゐない。そうしてこの價値の靜態理論を無視ないしは看過しては、いなそれと論理的なる聯繫を缺いては、價値の問題は、實は、少しも解決されるを得ないのである。商品價値理論についてはこれを措くとするも、貨幣價値理論の動態論的性格觀がその據つてたてるところの貨幣の本質觀によつて必然に制約されるところのものであるとはいへ、貨幣價値の靜態理論を排除することは許容せらるべくもない。やがて問題は貨幣の價値の靜態理論へと導びかれるであらう。このことは、一般均衡理論の分野にあつても、貨幣の固有價値を問題にしたり、あるひは貨幣の基本的機能として交換手段を棄てゝ、計算貨幣または價値の一般的表現手段をとり入れやうとする努力のなされてゐることからして

も、容易に看取し得るところである。

とまれ貨幣の價値の理論に關する動態論的性格觀は、その理論的構成においては、確かに、誇るにたるべき多くのものを持つてゐる。しかしながら、その理論的體系の輪奐の美は、基礎構造たる貨幣の本質觀、ことに貨幣價値の靜態理論より遊離してはじめて顯現し得たる華麗さであり、一種の空中樓閣的な絢爛の美でしかない。この輪奐の美を破壞することなく、堅固なる礎石のうへに据へらるべき仕事は、實に、今後に殘されし課題であらう。

第二章　貨幣價値の歴史的連續性の構想の性格について

第一節　序　說

商品の價値に關する主觀主義學說、ことに限界效用學說は、同時に貨幣の價値の決定の原理としてもまた、これを適用し得るものなのであらうか？

この問題に對しては、從來、これを肯定し、商品ならびに貨幣の價値原理としての一元性を强調せるものと、これを否定して商品價値決定の原理と貨幣の價値の決定原理との二元論を主張するものとの二つの學派があつた（註一）。そうしてそれら二つの陣營のうちのいづれに屬するとを問はず、それぞれの主張の根據にいたつては、まことに多岐多端なるものあるをまぬがれなかつた。このやうな事態のわが國における反映としては、かの一聯のはなやかなりし貨幣價値論爭が想起されるのである。すなはち、限界效用學說の貨幣價値理論への適用に否定的な態度を表示せる左右田喜一郎博士の見解

は、それが發表とゝもに多くの異論を生んだのである。坂西由藏博士の批判はその一つであり、高垣寅次郎博士の反對論はその二である。而して最近にいたつて、田中金司教授の貨幣の固有價値としての主觀的價値、したがつて貨幣の固有なる限界效用の否定論あらはれるに及んでは、これが批判として柴田敬氏の貨幣の主觀的固有價値の肯定論と、ならびにそれより少しくおくれて栗村雄吉氏の一般均衡論的貨幣價値理論よりする反對的見解の提唱を、みるにいたつたのである。また他方においては議論はさらに分れて、貨幣の價値の固有性と反映性といふ問題提起の形において、高田保馬博士と柴田氏とのあひだに、商品價値決定原理としての主觀主義的價値學説の貨幣の價値の理論への適用可能の能否について、まことに貴重なる論爭がかはされたのであつた。また、正井敬次教授の近著における貨幣の價値の變動の限界效用學説的なる基礎づけをもつて、問題の論點は、ひとまづ、論じつくされたるがごとき觀がある(註二)。

註一　ドエーリングに從へば、商品の主觀主義的價値學説を貨幣の價値の理論に適用することは、比較的近代の學説史においてはじめて看取することの出來ることがらにすぎない。從來のすべての貨幣價値學説なるものは、客觀主義的なるまたは折衷的なる商品價値學説のうへに樹立されておつたのであつた。そうして限界效用原理そのものゝ貨幣の價値の理論への適用の可能性については、最近にいたるまで、商品の主觀主義的價値學説の信奉者たちによつてさへも、否認されしところであつたと (H. Döring, Die Geldtheorien seit Knapp. 2. Aufl., 1922, SS. 209—210.)。

もちろん、例へば、クニース (K. Knies, Geld und Kredit. I. Abt. Das Geld. 1. Aufl., 1873. u. 2. Aufl., 1885.) のごときにあつては、すでに特異の使用價値理論のうへに立ちて、貨幣の價値が説かれてゐる。併しながらそれとても飽くまで金屬主義的なるものであつたに過ぎない。從つて近代的なる意味においては、すなはち非金屬主義的なる主觀的貨幣價値理論としては、ドエーリングの言へるがごとく、ウィーザー (F. F. v. Wieser, Der Geldwert und seine geschichtlichen Veränderungen Zeitschrift f. Volkswirt., Sozialpol. u. Verwaltung. XIII. Bd., 1904; ditto, Der Geldwert und seine Veränderungen. Schriften des Vereins für Sozialpolitik. 132. Bd., 1909.) 及びツヴィーディネック (O. v. Zwiedineck, Die Einkommensgestaltung als Geldwertbestimmungsgrund. Schmollers Jahrbuch f. Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirt. im Deutschen Reich. N. F. Jahrg. 33. 1909.) などにはじまるものとなすことが出來やう (H. Döring, a. a. O., SS. 210 ff.)。

なほ、限界效用學説の貨幣の價値への適用に反對せる人々としては、例へばウィクゼル (K. Wicksell, Godzins und Güterpeise. 1898.) ヘルフェリッヒ (K. Helfferich, Das Geld. 5. Aufl., 1921.) 及びシュムペーター (J. Schumpeter, Das Sozialprodukt und die Rechenpf nnige. Archiv f. Sozialwis. u. Sozialpol. Bd. 44, 1917—18.) などの商品の價値に關する主觀主義者を擧げることが出來るばかりではない。さらに客觀主義的價値論者にあつてはこれまた言ふまでもなきところである。

註二　左右田喜一郎博士「貨幣論上の限界效用學説」および「坂西教授の批評に答ふ」(同博士全集　卷第二　所輯)——坂西由藏博士「貨幣價値と限界利用説」(同博士「經濟生活の歴史的考察」所輯)。——高垣寅次郎博士「貨幣價値に關しての私論二題」(「商學研究」第三卷　第三號　大正十三年所輯)。——田中金司教授「限界利用説と貨幣の客觀的價値」(「國民經濟雜誌」第四十九卷　第五號および第五十卷　第三號　昭和五・六年所輯)。——柴田敬氏「主觀價値説と貨幣價値論」(「經濟論叢」第三十二卷　第六號　昭和六年所輯) および同著「理論經濟學」上卷　第三章　第二節　註四「貨幣固有主觀價値説に就いて」ならびに

「ヒルシュの貨幣固有主觀價値說批判の吟味」。――高田保馬博士「貨幣價値の受動性」（同博士「利子論研究」所輯）。――正井敬次教授「貨幣價値の研究」。――栗村雄吉氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（九州帝大「經濟學研究」第六卷　第四號　昭和十一年所輯）。

もちろんこれら論者はそれぞれその立てるところの見地を異にし、主張の重點にいたつても相違するところがある。すなはち左右田博士にあつては、貨幣の非目的性、それの手段性を高揚することによつて、貨幣の直接的なる效用の否定すべきことを强調する。これに反し、坂西博士ならびに高垣博士の批判の骨子とするところは、貨幣の效用の反映性、それの間接的性格に就いての主張に盡きてゐるものと見るべきであらう。しかるに、田中教授にいたつては問題はさらに明確に限定されて、貨幣の間接的效用はこれを認むべきも、それの直接的な、すなはち貨幣そのものに固有の效用の否定すべきことを、もつぱら貨幣の客觀的交換價値の主觀的交換價値に對する概念的先行性の主張を通じて表明して居られるのである。玆において問題は、貨幣の價値の本質をめぐる見解の相違となり、貨幣の主觀的交換價値の固有性の主張とそれの反映性の主張との對立となつた。そうして柴田氏は、貨幣の主觀的交換價値の固有性をばミーゼス流に基礎づけて、田中教授の否定的なる見解を反駁されたのであつた。

他方この柴田氏の貨幣の主觀的交換價値の固有性に關する見解は、高田博士の批判されるところとなつた。そうして高田博士はみづからの指圖權說的本質觀に基づきて貨幣の價値の反映性を强調されて、こゝに博士と柴田氏との間に最近の學界にまれなる大論爭の展開を見たのであつた。而して栗村氏の參戰はさらに多くの問題を學界に提供するところがあつた。また、正井教授にあつては、ミーゼス流の貨幣の固有な主觀的交換價値の基礎づけに飽きたらず、獨自の主觀主義的貨幣價値變動理論の展開となつた。そうして最近、栗村氏は、さらに、一般均衡理論の立場よりミーゼスの主觀主義的貨幣價値理論を批判して、こゝに貨幣の價値に關する動態論的性格觀を樹立されるにいたつたのである。

言ふまでもなく貨幣そのものは、なにら直接的に人間の欲望を充足するものではない。この意味において貨幣はそれ自體においてはなにら效用を持たない。從つて貨幣は主觀的價値を持ち得ざるものであると言はねばならない。このかぎりに於いては、商品價値に關する限界效用學說は貨幣の價値には妥當せず、と言はれ得るがごとくである。ところで一方、このやうに貨幣そのものには、なにら直接的なる效用したがつて固有の主觀的價値はなくとも、他方、貨幣が交換の手段として、それの客觀的交換價値のゆゑに、貨幣は、これが所有者にその欲求するところの消費對象物を獲得することを得

させることによつて、間接的に效用を持ち、從つて主觀的價値を持つと言ふことが出來るのである。併しそれは、飽くまでも、貨幣に固有の、直接的なる效用であるのではない。それは、間接的な效用であつて、貨幣でもつて得られたる消費對象物の持てる效用からの反映的なる主觀的價値であるにすぎない。この意味において、かつこのかぎりに於いてのみ、貨幣は效用を持ち、主觀的價値を有すといふべく、かくしてまた商品價値決定原理としての限界效用學說の貨幣の價値への適用に就いても、その可能性が語られ得るものと言ふことが出來る。そうして貨幣價値理論への限界效用學說の適用に反對し、これを否定する論者にあつても、この點に就いては、なにら異論のなきところである。問題は、むしろ貨幣それ自體に固有の主觀的價値なるものありや、換言すれば、貨幣の客觀的交換價値の基礎であり、原因であり、從つてこれを規定し、制約するところのかゝる要因としての效用、すなはち主觀的價値なるものが、貨幣に認められるべきかといふ點に存するものといふべきである。さらに一般的なる問題措定の形において提示するならば次のごとくに言ふことも出來る。すなはち、貨幣の價値、あるひはそれの客觀的交換價値の決定原理として、限界效用學說は、自からの妥當性を主張し得るであらうか？

このやうな問題に關しては、坂西博士にあつても高垣博士にあつても、なにら觸れられるところがなかつた。かゝる嚴密なる意味において問題を提起し、貨幣の固有な主觀的交換價値を否定せる田中教授の見解に對しては、柴田氏まづ立ちて反對をとなへ、貨幣の價値の固有性、それに固有なる主觀的價値の存在を說き、商品價値決定の原理と貨幣の價値の決定原理との一元化を主張されたのである。すなはち、「主觀價値說を採る以上、貨幣の價値を說明するためには、當然、貨幣の主觀價値が前提されねばならないのであり、貨幣の主觀價値から貨幣の價値の說明をすることを否定しながら主觀價値學說を採るといふことは、論理上不可能である。從つて若し貨幣の主觀價値から貨幣の價値を說明する方法が不可能であるならば、この點に於いて主觀價値說はすでに行きつまるのである」と（註三）。しかるに高田博士はこれとは反對に、商品價値決定原理と貨幣價値決定の原理との二元論を持して（註四）、指圖權說的本質觀から貨幣の客觀的交換價値の反映性を强調されたのである。

註三　柴田敬氏「主觀價値說と貨幣價値論」（「經濟論叢」第三十二卷　第六號　七〇頁）參照。

註四　高田保馬博士「經濟學新講」第三卷　三頁參照。

すなはち、「若し、徹底的に金屬說の立場をとるならば、而して貨幣の價値をその素材の價値によりて定まるとのみ見るならば、從ひて貨幣を一つの商品として見るならば、財の財に對する交換能力（社會的、すなはち客觀的）なる價格の理論の外に貨幣の理論と云ふものはあり得ない。從ひて、交換の理論、從ひて交換價値の理論をもつて盡きるはずである」としておられる。そうして貨幣の價値決定の原理の特異性を强調して、それと商品の價値決定の原理との同一化、一元化に反對して居られるものゝごと

とくである。

ところでこの場合、柴田氏の商品および貨幣の價値の決定原理についての斯かる一元論的なる主張の根據としてとられてゐるところのものは、謂はゆる貨幣の價値の歷史的連續性の構想なのであつて、問題はまつたくこれをめぐつて展開されてゐるかのごとくに思はれるのである。すなはち、柴田氏は「正確なる心理的分析は、……貨幣價値の評價のこの受動性を、貨幣の評價と所得の最後の單位で買はれる商品の評價との同視を、貨幣自身の側における質的要因の缺除を、否定しないであらうか？吾々は實際商品を通じてゞなければ貨幣を評價しないのであらうか？　あるひは寧ろ、……所得の最後の單位で買はれる商品の評價から獨立し得る貨幣の價値を、吾々は個人に於いて見出さないだらうか？　この二つの評價は何とか區別されないだらうか？」（註五）といふアフタリオンの言葉を引用して、「これから買はれる財の價値から獨立せる貨幣自身の主觀價値の存在を主張し」、これが理由の說明として、貨幣の價値の「歷史的連續性の主張が基礎理論上必要」なる所以を强調して居られるのである（註六）。そうして、田中教授が、一方において、「しかしながら私は貨幣が財を離れてそれ自身主觀的評價の對象となることは考へ得ないと思ふ。吾々が一定の價格の下にある財を買ふか否かを決す場合、その財のみならず貨幣に對しても主觀的評價が行はるゝことは認めざるを得ないが、そは……

……同一價格を以つて購買し得べき他の財に照應しての評價である」（註七）と說かれることは、他方において貨幣の價値の歷史的連續性を强調されることとそのことゝは相撞着すると、柴田氏は結論されるのである（註八）。また、栗村氏は、かゝる田中教授の貨幣の價値の「歷史的連續性」に就いての解釋が、ミーゼスを曲解するものなりと非難し、栗村氏みづからは、むしろ、かゝる曲解を釀成せる貨幣の價値の「歷史的連續性」の構想そのものを排除して、貨幣の價値に關する一般的均衡の理論を樹立せんとされたのである（註九）。

註五　A. Aftalion, Monnaie, Prix et Change. 1935, p. 205-206.〔松岡孝兒譯「アフタリヨン・貨幣・物價・爲替論」二〇六—二〇七頁參照。〕

註六　柴田氏「主觀價値說と貨幣價値論」（前揭雜誌　第三十二卷　第六號）七一頁および七三頁註三參照。

註七　田中金司教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」（「國民經濟雜誌」第四十九卷　第五號）一八頁參照。

註八　柴田氏　前揭論文　七三頁註三參照。

註九　栗村雄吉氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（「經濟學研究」第六卷　第四號）參照。

このやうに、貨幣の價値の惰性、歷史的連續性、あるひは歷史的被制約性なる構想こそは、貨幣の固有なる主觀的價値を根據づけるべき重大なる契機であるものゝごとくである。從つてこの「歷史的連續性」の構想の理論的性格を正常に把握するやいなやは、根本的に重要なる事柄であつて、こゝに

こそそれら論者の今後の理論展開を規定し、制約するところのものゝ根柢が看取さるべきである。從つて本章の目標とするところは、かゝる構想そのものゝ理論的性格を闡明し、あはせて限界效用學說の貨幣價値決定原理としての能否に就いても言及せんとするにある。

第二節　貨幣の價値の歷史的連續性

貨幣の主觀的使用價値または主觀的交換價値（註一）をもつてする貨幣の客觀的な交換價値の基礎づけについて、ミーゼスは次ぎのごとくに說いてゐる。

註一　ミーゼスに從へば、「商品にあつては二つの異なれる概念であるところの主觀的使用價値と主觀的交換價値とは、貨幣においては一致してゐる。兩者はともに貨幣の客觀的交換價値に溯及する。蓋し貨幣使用の效用なるものは、貨幣との交換に他の經濟財を獲得し得る可能性に盡きるからである」と（Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. 2. Aufl., 1924, SS. 73-74.）。

吾々は貨幣におけるこれら二種の價値概念の合致または同一視のうちに、ミーゼスの愼重なる理論的用意の意味についてふかく反省するところがなければならないであらう。そうしてミーゼスのこの深き意圖に顧みることなくしては、貨幣の價値の理論への限界效用學說の適用の主張もまつたく無意味のものと化するであらう。後に言及せんとするところの貨幣の價値の變動に關する謂はゆる「動機理論」なるものは、實にミーゼスの斯かる理論的な準備工作の持てるところの意味をなにら顧みることなく、それの看過せるところに發足せるものゝごとくである。

近代的な價値の理論ならびに價格の理論の主張するところに從へば、價格なるものは商品と價格財とについての、市場に相逢會するところの主觀的なる價値評價の成果として現はれる。それは、徹頭徹尾、主觀的なる價値評價の所產にほかならない。財貨は、これを交換せんとする個人によつて、そ

れの主觀的な使用價値に準じて評價され、そうして交換割合の高さは、需要と供給とがまさに數量的に均衡を保つところのその範圍において確定される。この價格法則なるものは、直接交換ならびに間接交換のいづれにも通用する。貨幣價格の形成もまた、結局は、販賣者と購買者との主觀的なる價値評價に依存して居るのである。ところで併し、それの主觀的交換價値に相等しき貨幣の主觀的使用價値なるものは、貨幣で得らるべきものゝ豫想されし使用價値以外のなにでもない。それの大いさは貨幣と交換に得らるべき財貨の限界效用で測定さるべきである（註二）。このことは、貨幣の主觀的使用價値あるひは主觀的交換價値が、すでに、貨幣の客觀的交換價値を前提して居ることを意味する。かくして、主觀的な貨幣の價値の評價は、貨幣の一定の客觀的交換價値の假定のもとにおいてのみ可能となるのである。評價は欲望充足と「效用なき」貨幣との間に橋を架するがために、かゝる貨幣の客觀的交換價値なる支持點を必要とする。貨幣そのものには、人間の欲望と直接的なる關係をなにら持つところなきが故に、人は一定の購買力から出發するよりほかには、貨幣の效用に就いて、從つて貨幣の價値に就いてなにらの表章をも形成し得ないのである（註三）。

註二　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. S. 85.

註三　Vgl. L. v. Mises, a. a. O., SS. 85-86.

このやうにミーゼスに從へば、貨幣の主觀的交換價値なるものは貨幣の一定の客觀的交換價値に依つて規定されては居るのである。併しながらこの前提となつてゐるところの一定の貨幣の客觀的交換價値なるものも、すでに、主觀的なる價値評價の產物にほかならないのである（註四）。ところで、貨幣の主觀的交換價値が貨幣の客觀的交換價値から生じ、貨幣の客觀的交換價値がまた貨幣の主觀的交換價値に依存するといふことは、一つをもつて他を說明し他をもつて一つを說明せんとすることである。それはまつたく宿命的なる循環論と言はねばならないであらう。これ、從來、おほくの反對論のみたる所以なのである。ことにヘルフェリッヒのごときはそれの有力なる反對論者の一人であつた。いまヘルフェリッヒの批判についてこれを見るに、大體つぎのごとくである。——

註四　Vgl. L. v. Mises., Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. S. 93.

限界效用學說なるものは、諸財貨の交易價値（Verkehrswert）をば個別經濟內部におけるそれら諸財貨の有用性の程度からして決定せんとするのなのである。ところで併し、貨幣の有用性の程度は個別經濟にとつては、財幣におけるとはまつたく逆に、周知のごとく貨幣の交易價値に依つて與へられて居るものなのである。吾々は、こゝに、貨幣の機能價値についての說明において當面せると同じ現象に逢會する。すなはちそこでは、貨幣は、たゞ、價値性を持つといふ前提のもとにおいてのみ利用

効果を實現し得ることを見たのではあるが、こゝでは、貨幣の有用性の程度も、また、貨幣と商品との間の交換割合といふ量的なる契機に依つて、從つて交換において實現さるべき貨幣の交易價値の大いさに依つて、決定されるのを見る。個別經濟における貨幣の評價は、人が貨幣で獲得し得るところの消費消耗財の如何にしたがひ、支拂に必要とする貨幣の調達のために讓渡しなければならない他の財貨の如何に準ずる。與へられたるある個別經濟における貨幣の限界效用は、それゆゑに、その經濟の支配下にある貨幣でもつて調達することの出來る財貨、あるひは所要の貨幣をうるために讓渡しなければならないところの財貨、をもつてなほ獲得すべき最少の效用なのである。そうしてこの限界效用は、すでに、貨幣の一定の交易價値を前提にもつて居るのであつて、從つて貨幣の交易價値なるものは限界效用からは誘導されるを得ざるものなのである（註五）。

註五　Vgl. K. Helfferich. Das Geld. 5. Aufl., 1921, SS. 544-545.

なほ、このやうな反對論をとれる人々の主なるものを擧ぐれば次ぎのごときものがある。

Z. B., K. Wicksell, Geldzins und Güterpreise. 1898. (Eng ish ed., 1936, pp. 18, 29); R. Hilferding, Literarische Rundschau. „Ludwig v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. 1912." Die Neue Zeit. 30. Jahrg. 2. Bd., 1912, S. 1025.; J. Schumpeter, Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige. Archiv f. Sozialwiss. u. Sozialpol. Bd. 44, 1917-1918, S. 646.; L. v. Bortkiewicz, Der subjektive Geldwert. Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirtschaft im Deutschen Reiche. 44 Jahrg. 1920, SS. 178, 178-179 Anm. 高田博士「經濟學新講」第三卷二四八—二四九頁參照。

以上の外に、貨幣の價値の理論としての限界效用學說の不當なる所以を、種々なる問題に關聯して、詳細に論じたる獨立の著作としては、W. Hirsch, Grenznutzentheorie und Geldwerttheorie. Jena 1928. を擧ぐべきである。

しかるにミーゼスは、かくのごとき批判に對しては次ぎのごとくに反駁して居る。

歴史的に繼承されたる貨幣の價値が貨幣の客觀的交換價値の形成にとつて持つてゐるところの意味を認識するならば、この表面上の循環から逃がれることがわけなく出來る。個人が貨幣單位を評價し得るのは、すでに市場には貨幣と爾餘の經濟財との交換割合が存在しておる場合にのみ可能となるにすぎないと主張することは正當である。それにも拘らず、限界效用學說が貨幣の客觀的交換價値の決定根據を完全に解明するを得ずと論斷することは、誤まつておるのである。この學說が、貨幣の客觀的交換價値をもつぱら貨幣の機能から說明することには成功せずして、かへつてそれの說明に當つては、貨幣的な充用にではなく非貨幣的なる充用のうちに基礎をもつて居るところの貨幣商品の最初の交換價値へと遡及しなければならないといふことは、もつてこの學說の缺陷なりとは決して言ふを得ないのである。むしろこのことこそ、貨幣の客觀的交換價値の本質にも並びにそれの形成にもふさは

しき說明の仕方なのである。貨幣の主觀的價値評價が、すでに、一定の交易價値を前提してゐるといふことは、一應、もつともなことではある。しかれども、こゝに前提されし交易價値は、吾々がこれから說明しなければならない交易價値とは決して同じものではない。前提されたる交易價値は昨日のそれであつて、これから說明せんとするのは今日の交易價値なのである。今日の市場に現存してゐる貨幣の客觀的交換價値なるものは、諸々の市場主體の主觀的なる價値評價の影響のもとにあつて、昨日の客觀的交換價値から形成されるのである。そうしてそれは恰かも昨日の客觀的交換價値は、またもや、主觀的な價値評價の作用を通じて一昨日の客觀的交換價値から生成せるがごとくにである（註六）。

註六　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. SS. 99-100.

このやうに、ミーゼスに從へば、一度び成立せる貨幣の客觀的交換價値は、さらに貨幣の今後の主觀的評價にとつての出發點を與へ、それの根柢を與へる（註七）。そうしてその主觀的交換價値はさらに他の客觀的交換價値を規定し、決定するものなのである。かくしてある與へられたる時點における貨幣の主觀的交換價値に依つて制約され、規定される貨幣の客觀的交換價値と、かゝる原因としての主觀的價値の前提となつてゐるところの客觀的交換價値とは異なるをもつて、こゝには論者の主張するがごとき循環論は認めらるべくもないといふのである。

註七　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. S. 86.

併しながら、こゝにはいまだ問題の根本的なる解決は存してゐない。それはなにら問題の解決と言ひ得るがごときものではなくして、たゞ問題を過去へと推し移したるに過ぎない。これ多くの反對論が、この點に問題の解決の存することを認めざる所以であつて、田中教授も「今日の價値を問へば昨日の價値をもつて答へ、昨日の價値を問へば一昨日の價値をもつて答へることかくのごとくなれば、循環論法は眞の意味において斷ち切られたと云ひ得ない。問題は依然として空中に彷徨し、歸着するところを知らぬではないか」との論難のあり得ることを指摘して居られるのである（註八）。このことは、もとより、ミーゼスみづからも、論者の批判をまつまでもなく、認めて居るところである。そうしてこのゆゑにこそ、ミーゼスは、貨幣の價値の歷史的連續性を强調せしところありし所以なのである。從つて私も、こゝに、ミーゼスに從つて、彼の謂はゆる貨幣の價値の歷史的連續性の主張に就いてその語るところを聞くことゝしやう。

註八　田中金司教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」（前掲雜誌　第四十九卷　第五號）一四頁參照。
Vgl. z. B., L. v. Bortkiewicz, Der subjektive Geldwert. Schmollers Jahrbuch. 44. Jahrg., 1920, SS. 178-179 Anm.;

W. Hirsch, Grenznutzentheorie und Geldwerttheorie. 1928, SS. 124-125.

ミーゼスは、すなはち豫めかゝる批判に備へてか、今日の貨幣の價値を昨日の貨幣の價値でもつて說明し、昨日のそれをば、さらに、一昨日のそれをもつて說明することだけでは、歷史的に繼承されし貨幣の價値の完全なる說明ではない、最後には最初の貨幣價値は然らば如何にして決定されしかを問はねばならないとなしてゐる。そうして「この問題の解答へと吾々を導びいて行くものは、貨幣の使用の發生と貨幣としての機能に依據せる・貨幣の價値の・特殊なる構成部分の發生とについての考慮である」と說いて居るのである。すなはち、貨幣の價値としての最初のものは、貨幣商品が持つて居るところの商品價値に依據してゐる。併し、ひとたび貨幣の使用の行はれるにいたるや、貨幣の價値は、貨幣商品の商品價値のほかに、それの貨幣使用から生ずるところの價値にもまた制約され、規定されるにいたる。かくして、金が貨幣商品となつてよりこのかた、金の價値を制約し、規定するところのものは、一方では、工業的目的のための金の需給のみならず、他方においては、貨幣目的のための金の需給もまた金そのものゝ價値の形成に關與するのである。貨幣の客觀的交換價値は、つねに、既存の客觀的交換價値を前提し、これに結びつかなければならないのである。ところが、このことはまた、一方、貨幣たりうるものはすでに他の有用性に基づける一定の客觀的交換價値を持つておつた財貨のみであるといふことを意味するのである（註九）。かくして、「貨幣の客觀的交換價値の決定原因を追求することは、つねに、貨幣の價値がもつぱら他の使用職能に依つて規定されて、交換の手段としての役目に依つては少しも規定されて居ないところの一點に溯つてゆく、といふ事實の確證は、――主觀的價値學說ならびにこの學說固有の限界效用の理論のうへに樹立されし完全なる貨幣價値理論展開への道程を開拓するものなのである」（註一〇）。

註九　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geld s und der Umlaufsmittel. SS. 86-87, 88, u. 82 ff.

註一〇　Vgl. L. v. Miss, a. a. O., SS. 93-94.

換言すれば、貨幣の客觀的交換價値を過去へ過去へと溯ぼつてゆくならば、貨幣の客觀的交換價値の構成部分としては、もはや、一般的交換手段としての貨幣の機能に基づく價値評價から由來せるがごときものゝなにら見出され得ざる點に、すなはち貨幣の價値が商品としての有用性に依存せる價値でしかないといふ點に到達する。もとよりこのやうな點は、間接交換の發生せし瞬間には、事實、經濟史上において見られしところのものである。消費目的のためといふよりは、單にその欲するところのものとの再び交換せんとするの目的のために物財を得んとする慣習のいまだ確立せざりし時代にあつては、各物財の得たる價値なるものは、たゞ、それの直接的なる有用性に基づける主觀的な評價の

所産たる價値だけであつた。しかるに間接交換において、個々の物財を交換媒介者としてしか獲得しないといふ慣習の發達するに及んでは、こゝにはじめて、人々はこれらの物財をば、それの直接的な有用性のうへに、さらにまた、間接交換への使用可能性のためにも、評價するにいたつたのである。すなはち各主體の物財の評價は、第一にそれの直接的なる有用性と、第二にはそれの交換手段としての有用性に依據してゐる。これら兩方の評價は、ともに限界效用の法則の支配を受けてゐる。貨幣の價値のかの濫觴が主觀的なる價値評價の成果にほかならないがごとくに、そのやうに今日の貨幣の價値もまた主觀的價値評價の所産でしかないのである（註一一）。

註一一　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. SS. 100–101.

このやうにして一度び成立せる貨幣の客觀的交換價値は、「貨幣の將來の主觀的評價に根柢を與へ、出發點を與へる。過去の客觀的交換價値は現在及び將來の貨幣の評價に對して一定の意義を得てくる。今日の貨幣價格は、昨日の及び一昨日の貨幣價格へと紐帶によつて結びついて居り、そうして明日および明後日の貨幣價格へと結びついて居るのである」（註一二）。いまやこのことからして、貨幣の客觀的交換價値には歴史的に繼承され し構成部分が含まれて居ることが看取される。過去の貨幣の價値は現在に傳へられ、そうして現在によつて形成されなほされる。現在の貨幣の價値は、さらに修正を加へられて、將來へと移つて行く。この貨幣の價値が歴史的に繼承されてゆくこと、貨幣の價値の惰性こそは、商品の價値の形成にあつては見られざるところの特徴的なる要因であると（註一三）。

註一二　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. S. 86.

註一三　Vgl. L. v. Mises, a. a. O., SS. 88 ff.

以上がウィーザーやツウィーディネックなどによつて唱へ出され、ミーゼスへとうけ繼がれたる謂はゆる貨幣の價値の歴史的連續性の主張なのである（註一四）。而してミーゼスはこの貨幣の價値の歴史的連續性の構想の理論的な性格をばそれの充分なる意味において把握し、これを展開して、もつて貨幣の價値性の主觀主義的なる基礎づけを企圖せしものゝごとくである。

註一四　Vgl. F. F. v. Wieser, Der Geldwert und seine geschichtlichen Veränderungen. Zeitschrift f. Volkswirt., Sozialpol. u. Verwaltung. XIII. Band, 1904. (Gesammelte Abhandlungen. 1929. SS. 175 ff.); ditto, Der Geldwert und seine Veränderungen. Schriften d. Vereins f. Sozialpol., 132. Band, 1909. (Gesammelte Abhandlungen. S. 211.)

Vgl. O. v. Zwiedineck, Die Einkommensgestaltung als Geldwertbestimmungsgrund. Schmollers Jahrbuch. N. F. Jahrg. 33. 1909. SS. 141 ff.

ツウィーディネックは、單に、貨幣の價値に就いて說いてゐるばかりではなくして、ひろく「物價の歴史的被制約性（die historische Bedingtheit der Preise）」と言ひ、これがまた貨幣の價値の說明にも利用さるべきことを主張して居るのである。そ

うしてこの「物價の歴史的被制約性」に就いては、すでに、他の論文において、「物價の惰性（Beharrungsvermögen der Preise）」として詳說せるところありしがごとくである（Vgl. Kritisches und Positives zur Preislehre. Zeitschrift f. d. gesamte Staatswissenschaften. Jahrg. 65. 1909. SS. 83, 100.）

第三節　貨幣の價値の變動に關する動機理論

――ミーゼス批判　その一――

貨幣の價値の決定原理として限界效用學說が發言權を有し得るやといふことは、すでに述べたるがごとく、貨幣の客觀的交換價値に依つて制約される主觀的交換價値、したがつて貨幣の反映的な價値（あるひは間接效用）を規定する原理として、限界效用學說がその意義を持つことが出來るといふことを意味するものでは決してない。こゝにはむしろ、かゝる貨幣の客觀的交換價値を規制すべき、それの根據であるところの主觀的交換價値、すなはち貨幣に固有の主觀的價値なるものありや、したがつて貨幣の客觀的交換價値の決定原理として限界效用學說なるものが妥當するやいなやを、問題にせんとするものなのである。かくして、こゝに、貨幣の價値の主觀主義的なる基礎づけといふも、たゞかかる意味においてのみ語られ得るにすぎないのである。しからば、このやうな貨幣の價値の主觀主義的なる基礎づけの試みなるものが、前掲のごときミーゼス流の貨幣の價値の歴史的連續性の構想のよくなしうるところであらうか？

この問題に關しては、すでにヒルファーディングやヒルシュなどの反對論のあるところである。そ

うしてわが國におけるかゝる反對論としては、田中、正井兩教授一派の批判と栗村氏の批判との二つの類型を區別することが出來る。しかもこれら二つの批判類型は、理念史的に見て、一聯の發展段階をなせるものと考へることが出來るのである。吾々はこれらの批判の第一類型に屬する田中教授の反對的主張から考察をはじめることゝしやう。

田中教授は、まづ、貨幣の利用（效用）が財貨の效用とは異なつて、それの間接效用なることを說き、貨幣の客觀的交換價値が貨幣の效用、すなはち主觀的使用價値あるひは主觀的交換價値に觀念上先行することをもつて、後者に依る前者の基礎づけに反對しておられるのであるが（註一）、この點については前掲のごとく、ある時點における貨幣の主觀的交換價値が規定するところの貨幣の客觀的交換價値は、その主觀的交換價値みづからがすでに前提せる客觀的交換價値とは別個のものなることをもつてする抗辯がある。しかし田中教授は、さらに、このやうに今日の客觀的交換價値を昨日の客觀的交換價値に、昨日の客觀的交換價値を一昨日の客觀的交換價値に溯及せしめることだけでは、「循環論法は眞の意味において斷ち切られたと云ひ得ない」との反駁があるかもしれないとされるのである（註二）。こゝにおいて前掲のごときミーゼス一派の、謂はゆる貨幣の價値の歷史的連續性の主張のある所以なのである。しかれども田中教授は、むしろ、かかる貨幣の價値の歷史的連續性の構想が、却つて、貨幣の價値を基礎づけ得るものにはあらざるの事情をば次ぎのごとくに主張される。

註一　田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」（「國民經濟雜誌」第四十九卷　第五號）一一頁參照。

註二　田中教授　前掲論文　一四頁參照。

すなはち「彼等に從へば、右の推理も次第に過去に向つて追ひつめてゆけば、結局、貨幣成立の當初、金屬素材が貨幣以外の用途において使用價値を保有せし時點に到達すべく、このとき金屬に對して認められたる限界利用こそ貨幣の客觀的價値の基礎をなすものとするのである。貨幣の限界利用は、こゝに確乎たる基礎のうへに据えられ、循環論法は完全に切斷されたとされる。……しかしながら、かくのごときは窮餘の遁辭にすぎず、かゝる辯解をもつて右の非難に答ふるの必要ありやいなやは、私の大いに疑はざるを得ざるところである。貨幣成立當初における貨幣素材の限界利用が、そのときに於ける貨幣の客觀的價値の基礎をなしたこと、及びかくして成立せる最初の客觀的價値が主觀的評價によつて影響されつゝ而かも連綿として今日まで持續し來たりしことは否定し得ざる事實にして、……たゞ問題は貨幣成立の當初の價値が現在の吾々の經濟生活に如何ほどの意義を持ち得るかといふ點である。貨幣がその成立の當初その金屬素材の限界利用によつて與へられた客觀的價値は、そのの ち幾千年間において無數の人々の主觀的評價によつて修飾しつくされ、現在の貨幣の價値構成に對し

ては殆んど無意義である。……吾々の現存の貨幣の客觀的價値を單純に與へられたるものと見做し、そのうへに主觀的評價を行ふものにして、あえて既往を問ふ必要はない。貨幣の價値に歴史的連續性を認めるならば、すでに成立せる貨幣の客觀的價値のうへに確定される限界利用（主觀的評價）とまさに成立せんとする貨幣の客觀的價値のみを以つてそれ自からに完結せる一聯の因果關係を論定しうべく、前述の非難に對してはこの理由をもつて答へれば十分である」と(註三)。

註三　田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」（前掲雜誌　第四十九卷　第五號）一四―一六頁參照。

田中教授の主張されるところに從へば、教授は、貨幣の價値の謂はゆる歴史的連續性のことに就いては、これを毫も否定する意思をもつては居られざるがごとくである。「たゞ問題は貨幣成立の當初の價値が現在の吾々の經濟生活に如何ほどの意義を持ち得るかといふ點である」。しからば、このやうな貨幣がその成立の當初にもつて居つたところの實體的價値が、詳言すればこの實體的價値に依據せる貨幣の客觀的交換價値が、現在の貨幣の價値の構成に對してなほその意義を持つことが出來るかといふに、名目主義的貨幣本質觀に立たれる田中教授は、斷乎としてこれに反對されるのである。もちろん、かゝる貨幣の實體價値が、「そののち幾千年間において無數の人々の主觀的評價によつて修飾しつくされ、現在の貨幣の價値構成に對しては殆んど無意義である」ことは、貨幣の機能價値論者とも言はるべきミーゼスのすでに認めて居る點である(註四)。したがつて田中教授のかゝる批判は、この點に關するかぎりは妥當ならざるものゝごとくである。この意味において、田中教授に對する柴田氏ならびに栗村氏の非難は、一應、もつとものやうに思はれる。

註四　Vgl L. v. Mises. Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. SS. 92-93.

こゝではミーゼスは、ツウィーディネックの謂はゆる物價の惰性を反駁して、財貨相互の交換割合に就いてはそれの歴史的連續性は認められずとなして居るのであるが、田中教授もこの言葉を引用してかく述べて居られる。すなはち、「彼（ミーゼス――筆者註）は貨幣の覆ひをのぞき財相互の價値關係のみを考察するかぎりに於いては、過去の價格と現在の價格との間にはなにらの因果關係存せずとして、その歴史的連續性を否定するがゆゑにこの言（ミーゼスのツウィーディネックへの反駁の言葉――筆者註）をなすのであるが、然らば彼が歴史的連續性なくしては考へ得ずとするところの諸財の貨幣價格換言すれば貨幣の財に對す價値は殆んど吾々の意識にのぼし得ざる遠き過去の價値と因果關係を持つて居ると眞面目に信じ得るのであるか。この場合、論理的に然りと辨解することが現實の事實の上に如何ほどの權威を揮ひ得るであらうか」と（「限界利用說と貨幣の客觀的價値」前掲雜誌　第四十九卷　第五號　一六―一七頁參照）。

ミーゼスが經濟財相互の交換割合に關してそれの歴史的連續性を否定したのは、現在の交換割合の形成に對し、過去の交換割合が直接にその前提ともなつて居らないばかりか、間接的にもその間に因果の聯關を看取し得ざることを主張してゐるのである。そうして貨幣の價値に關し、その歴史的連續性を主張する場合にあつても、太古の商品價値が直接に現在の貨幣の價値の構成のうへに前提されて居るといふのではない。たゞそれらの因果の絲を辿つてゆくならば、遂に、太古の商品價値に到達すべく、この商品價値によらずしては、貨幣の價値性を基礎づけることが出來ないと言ふにすぎないのである。このことは、商品と異なれ

る貨幣の客觀的交換價値の本質ならびにそれの形成についての敍述からしても明らかである（Vgl. Mises, a. a. O., SS. 99-100）。

ミーゼスの言へるがごとく、「貨幣の價値の理論そのものは、貨幣の客觀的交換價値をば、たゞ、それが貨幣としての價値たることをやめていまだ商品としての價値に過ぎないところのかの時點にまで、溯らしめることが出來るだけである。そこでは貨幣の價値の理論は、それ以上の仕事をば、價値の一般的理論に委ねなければならないのである」（Vgl. Mises, a. a. O., S. 100.）。貨幣の價値量の變動の問題ばかりではなく、貨幣の價値性の問題を解決せざるを得ざるかぎりは、貨幣の價値の歷史的連續性の構想をもつて、貨幣の價値の理論は、商品價値の理論へと聯關づけられなければならない。こゝにこそミーゼスの貨幣の理論のカタルアクティッシュな性格が要求され得るのではなからうか！

もちろん、ミーゼスの貨幣理論のカタルアクティークなる性格が、機能價値理論を徹底せしめ得るやに就いては問題がある。こゝに田中教授の名目主義者としての立場が意味をもつてくる。このゆゑに、田中教授の前掲のごときミーゼス批判を、單に言葉の表面的な意味において、「誤解」または「曲解」として斷じ去るを得ざる所以なのである。吾々は教授の貨幣價値論の動態論的性格觀との關係においてのみ、はじめてそれの理解さるべきものなることを强調するわけである（第一編　第一章「貨幣價値論の動態論的性格觀の批判」參照）。

併しながらこのやうな田中教授のミーゼスに對する「誤解」あるひは「曲解」は、まことに意味深遠である。吾々はこの田中教授の「誤解」あるひは「曲解」の深遠なる意味の謎をば、教授みづからの名目主義的貨幣本質觀のうちに看取することが出來ると思ふ。そうしてミーゼスみづからも彼の機能價値學說に徹底せんとするかぎりは、田中教授のこのやうなミーゼス批判そのものには、栗村氏の非難しておられるがごとき問題はなにら存してゐないのである（註五）。この點に就いては次節において詳論する。

註五　柴田氏「理論經濟學」上卷　第三章　第二節　註四、八八—九〇頁參照。栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（「經濟學研究」第六卷　第四號）一七九頁以下參照。

しからば問題は如何なる點に存するのであらうか？　おもふにそれは、貨幣の價値の謂はゆる歷史的連續性の構想の理論的性格に關する田中教授の解釋のうちにこそ看取さるべきものなのである。すなはち田中教授は、貨幣の價値を限界效用學說をもつて、主觀主義的に基礎づけんがためには、貨幣の價値の謂はゆる歷史的連續性の要請を導入しても、なほ、不可能であるとされるのである。換言すれば、貨幣の價値の歷史的連續性の構想も、貨幣の價値性の基礎づけの問題に對しなほ無能なることこれである。貨幣の價値性に對するこの構想の無能のゆゑに、田中教授は、むしろ、その構想をもつて、貨幣の價値量の問題に關するものであると主張されるにいたつたのである。

かくしてこそこゝにはじめて田中教授が前掲のごとくに「現存の貨幣の客觀的價値を單純に與へられたるものと見做し、そのうへに主觀的評價を行うものにして、あへて既往を問ふ必要はない。貨幣の價値の歷史的連續性を認めるならば、すでに成立せる貨幣の客觀的價値のうへに確定される限界利

用とまさに成立せんとする貨幣の客觀的價値のみをもつてそれ自からに完結せる一聯の因果關係を論定しうべく」、そこにはもはや循環論なるものは存しないとされる所以が理解し得られるのである。そうして田中教授は、ミーゼス一派の謂はゆる貨幣の價値の歷史的連續性の構想の理論的性格をば、貨幣の價値性に關するものたらしめることの不當なるを說き、むしろ貨幣の價値量に關するものたらしめて、この構想の理論的性格に對する量的性格觀を次ぎのごとくに說かれるのである。

すなはち、「こゝに考ふべきは貨幣の主觀的價値は、觀念上客觀的價値に後行するが、事實のうへに現はるゝ場合に於いては兩者は互に他に決定されつゝ更らに他を決定する關係に立つといふことである。貨幣の限界利用がその客觀的價値を前提せずしては成立し得ざることは、前者をもつて後者を說明せんと欲する學者と雖もことごとくこれをみとめて居る。しかも彼等が敢へて前者をもつて後者を說明せんとする所以は、貨幣の限界利用の前提をなす貨幣の客觀的價値が、貨幣の限界利用をもつて說明さるべき貨幣の客觀的價値と同一にあらざるがゆゑである。昨日の貨幣の客觀的價値は、今日の貨幣の限界利用の基礎をなすが、この限界利用こそ次ぎに成立すべき貨幣の客觀的價値の形成を說明するものである。この意味において、貨幣の主觀的價値をもつてその客觀的價値を說明することは毫も差支へない。若したゞ貨幣の客觀的價値が貨幣の限界利用の前提となすといふのみでとゞまるならば、貨幣の客觀的價値が昨日より今日へ、今日より明日へと變動して行くことを如何にして說明し得るか。貨幣の客觀的價値はこれを基礎とする主觀的評價の作用なくしては、それ自からに推進力を缺くものである。貨幣の主觀的評價は、すでに成立せる貨幣の客觀的價値を前提とすると同時に、まさに成立せんとする貨幣の客觀的價値の前提をなすものである。この兩者が交互にあざなはれて發展しゆくところに、貨幣の價値の變動がはじめて可能なのである。この交互關係はいづれの方向より眺めることも出來るのであつて、主觀的價値をもつて客觀的價値を說明することは、必ずしも順序逆轉ないし循環論法と言ひ得ない」と(註六)。

註六　田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」(前揭雜誌　第四十九卷　第五號)一三―一四頁參照。

かくして貨幣の價値の變動の要因としての主觀的評價の强調は、次節において明らかとなるがごとく、貨幣の價値の變動をば結局、經濟主體の心的動機のうちに求むることゝならざるを得ないであらう。そうして、ミーゼスが、貨幣の價値の歷史的連續性の構想をもつて、貨幣の價値の究極の決定原因を貨幣成立當初の商品價値に歸して基礎づけんとすることは、「空疎なる論理を弄んで言葉のうへの滿足を貪るに過ぎない」ことゝなる。貨幣の價値の理論の使命とするところは、歷史的な過程を追跡して、貨幣の價値性を基礎づけることにあるのではない。「所與の貨幣の客觀的價値が如何なる過程

を通じて次ぎの價値を喚び起して行くかを説明するにある。……價格は如何にして決定せらるゝやの問題は、結局、價格は如何にして變動するやの問題にほかならない」のであると(註七)。こゝに田中教授の貨幣價値論に就いての動態論的性格觀が明白に顯はれて居る。そうしてミーゼスの貨幣の價値性の主觀主義的基礎づけの不成功は、貨幣の價値の歷史的連續性の構想の理論的性格をもつて、貨幣の價値量に關するものたらしめ、遂にミーゼスの貨幣の價値の理論をも、動態論的な性格のものたらしむるにいたりしものゝごとくである。

註七　田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」(前掲雜誌　第四十九卷　第五號)一七頁參照。

田中教授のこの論文は、實は、二回にわたつて發表されたまゝ、未完結のものとなつて居る。併しながら、すでに發表されし部分からして、貨幣の價値の變動をば、限界效用學說をもつて動機づけんとするにあることが、推知し得られるであらう。このことは、ウィーザーが晚年にいたつて、價格の理論と貨幣價値理論との差異性を强調して、限界效用學說の前者への適用のみを認めて、貨幣の價値の理論においては、シュムペーターによつて完成せられしがごとき所得數量說へと轉向するにいたれることを非難して、貨幣の價値の理論への限界效用學說の適用可能を强調されたる田中教授のウィーザー批判のうちによく現はれて居ると考へられる(「限界利用說と貨幣の客觀的價値」(其二)前掲雜誌　第五十卷　第三號參照)。

すなはち田中教授は、ウィーザーが價格理論と貨幣價値理論とは別箇の法則を有すとなせることに反對して、「個々の價格を說明すると同一の法則を以つてしては個々の價格の綜合たる一般物價を說明することは出來ぬ」といふことに就いて「多大の疑問」を抱いて居られるがごとくである(前掲論文　其二、四五頁以下參照)。しかれども、「貨幣價値理論」のもとに理解さるべきものが、ウィーザーと田中教授とにあつては、それぞれその內容を異にせるところあるがごときをもつて、田中教授のこのウィーザー批判の言葉は、そのまゝ、たゞちに是認せられ難いのである。

ミーゼスは商品價値決定の原理たる限界效用學說をもつて貨幣の價値性を基礎づけんとしたるウィーザーの思想を發展させて、貨幣の價値の變動の理論にも限界效用學說を適用せんとして、貨幣數量說の主觀主義化を意圖したのであつた。そうして、田中教授は、ミーゼスのこの前者、すなはち貨幣の價値性の主觀主義的な基礎づけの問題を放棄し、もつぱら貨幣數量說の主觀主義的な基礎づけの問題だけを取りあげて、教授獨自の貨幣價値變動の理論を提唱せんとされしものゝごとくである。然からばウィーザーは如何?

ウィーザーは、ミーゼスも言へるがごとく(Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. S. 97)、貨幣の主觀的價値の基礎づけをもつて貨幣價値理論の使命となせるものであり、この意味において「限界利用說を貨幣價値理論に結びつけた代表的の學者と稱せられる」のである。併しながら財貨の價格をそれの主觀的使用價値でもつて基礎づけ得るがごとくには、貨幣の價格、すなはちそれの客觀的交換價値を、それの主觀的交換價値でもつて基礎づけることは、容易なわざではない。これウィーザーが、貨幣の價値の歷史的連續性の構想をもつてこれが解決への糸口を提供し、ミーゼスによつて充分に展開さるべき機緣を與へたとはいへ、なほこの方面からして、貨幣の客觀的交換價値の決定、ならびに變動の理論を樹立することを斷念して、所得數量說的なる別個の道から貨幣價値變動の要因の究明を意圖せしがごとくなのである。そうしてその道は、また、シュムペーターの貨幣價値變動理論の動向でもあつた。從つて、嘗ては「限界利用說を貨幣價値理論に結びつけた代表的の學者と稱せられる」ウィーザーが、晚年にいたつて、「限界利用說を貨幣價値理論」に適用し得ずとなしたとしても、なにら矛盾ではなからう。蓋し前者における「貨幣價値理論」とは貨幣の主觀的價値の基礎づけの理論を意味し、後者にあつては、貨幣の價値の變動の理

論に外ならないからである。ただ、兩者における「貨幣價値理論」の意味を區別せざるかぎりは、そこになにらか「注意に値ひするところ」のものが看取されやう（田中教授　前掲論文　其二、四三―四四頁參照）。

かくしてウィーザーが、田中教授の問題にして居られるコンラード國家學辭典、第四版所輯の「貨幣の理論」なる論文において言はんとするところは、財貨の價格理論におけると同樣に、貨幣の客觀的交換價値の基礎づけをば限界效用學說に據つてなさんとせしも、商品の價格理論における困難にもまして、貨幣の主觀的交換價値の固有性の論證の不可能、それが反映性の確認は、ついに貨幣の客觀的交換價値の理論をば、所得數量說の形における貨幣價値變動の理論として展開せざるを得ざるにいたりしことを述べたるものと見るべきであらう（F. F. v Wieser. Geld. I. Theorie des Geldes (Allgemeine Lehre vom Gelde). Handwörterbuch d. Staatswissenschaften. 4. Aufl., 1927, Bd. IV, S. 698.）。

それはともあれ、ウィーザーは、ミーゼスの非難にも拘らず（Vgl. L. v. Mises, a. a. O. S. 97.）、貨幣の價値の歷史的連續性の構想を生かさずして、貨幣の價値性の問題を放棄し、シュムペーターの所得數量說の先驅者として現はれしことの先見の明（！）こそ、吾々は「注意に値する」ものと見るのである。蓋しミーゼスの貨幣機能價値學說なる貨幣本質觀こそは、それが徹底せる型においては、シュムペーター流の指圖證券學說に合流すべきものであつたからである（拙著「貨幣本質の諸問題」第一章ことにその第六節參照）。しかるに田中教授は全的にミーゼスを肯定されることなく、たゞミーゼスの貨幣價値變動の理論のみを是認されて、主觀主義的なる貨幣價値變動理論を展開せんとされるのである。併しながら、ミーゼスにあつては貨幣價値變動の要因の究明が、貨幣の價値性の理論をその前提に要請して居るがゆゑに、それは、一應、主觀主義的なる貨幣價値變動の理論としての理論的體系をそなへることが出來たとはいへ、田中教授にあつては、かかる基礎理論を缺くがゆゑに、それは貨幣價値變動の理論としては、なほ一層の展開が要望される。

第四節　貨幣の價値の變動に關する動機理論

――ミーゼス批判　その二――

前節において吾々の問題としたるがごとき田中教授の見解とその軌を一つにし、これをば貨幣の價値の變動の理論として一層發展せしめたるものとしては、最近の正井敬次教授の著作「貨幣價値の研究」を擧げることが出來る（註一）。

註一　正井敬次教授「貨幣價値の研究」昭和十一年。

正井教授は、使用價値たる概念規定が先貨幣經濟的なる範疇たることを强調してこれを排擊し、貨幣經濟的な價値規定としてはむしろ利用價値なる概念の用ふべきことを提唱された。そうして貨幣の主觀的なる利用價値決定の原理としての限界效用學說を說く。同學說の貨幣理論への適用論として教授の主張は、學界において特異の存在である。それは、貨幣の價値性の基礎づけの理論ではないが、貨幣の價値量を問題として、貨幣の價値の變動に關する動機理論（Motivationstheorie）とも稱せらるべきものを提唱されし點にその特色が見られる。すなはち教授は、「余の貨幣價値說に於いては、內部交換價値としての主觀的價値が問題であつて、絕對的價値（主觀的使用價値――筆者註）としての主觀的交換價

値は問題外である」としておられる(註二)。詳言すれば、ミーゼスが貨幣自體の側における原因から生ずる貨幣の客觀的交換價値の變動をば主觀主義的價値理論をもつて動機づけて居ると同樣に、貨幣價値の主觀主義的な變動の理論を、正井教授は問題として居られるのである。そうして、貨幣の客觀的交換價値の主觀主義的基礎づけ、從つて貨幣の主觀的交換價値の根據の問題たる貨幣の價値性の主觀主義的說明のごとき、ミーゼスの貨幣の價値の理論における「特色」は、むしろ教授の問題とするところではないと云はれるのである。このやうに、「ミーゼスにおける貨幣の內部客觀的交換價値の決定に關する理論」こそ、正井教授の當面の關心とせる「貨幣の利用價値、換言すれば一般に貨幣の主觀的價値と言はるゝものに關する決定の理論に他ならぬのであつた。」從つて教授の著作「貨幣價値の研究」一篇は、貨幣の價値性を限界效用理論に據つて基礎づけんとされるのではなくして、貨幣の價値の變動を問題とせる、主觀主義的な貨幣價値變動の理論なのである(註三)。

註二　正井教授「貨幣價値の研究」一七四頁參照。

註三　正井教授　前揭著書　一七三―一七七頁參照。

正井教授に從へば、ミーゼスは貨幣の主觀的交換價値をば「貨幣における絕對的の價値または使用價値の意味のものとし」、この「云はゞ自然經濟的なる價値」の決定の原理として限界效用學說を主張してゐるのである。ところがそれは結局、「貨物價値を論ずるもの」であつて、「決して貨幣價値に關する限界效用理論の適用であり得ない」と斷じて居られる。そうして、田中教授と同樣に、ミーゼスにおける貨幣の價値の歷史的連續性の構想が、貨幣の價値性の基礎づけには無能なることを說いて、この構想の理論的性格をもつて、貨幣の價値の變動に關するものとして居られる(註四)。かくして正井教授は、限界效用學說をもつて、ミーゼスの意圖とは、異なつて、貨幣の價値性を基礎づける理論とはなさず、貨幣の價値の量的變動の動機づけの理論となして居られるのである。

註四　正井教授「貨幣價値の研究」一七七、一七四、一七八―一七九頁および一八〇頁參照。

すなはち、ミーゼスが貨幣の客觀的交換價値を過去のそれへと溯及せしめて、最後に商品價値に歸せしめて居るところの貨幣の價値の歷史的連續性の主張に對して、正井教授は斯く批評して居られるのである。「蓋し、ミーゼスのこの答へは、見方によりては或ひは正しくもあり、或ひは不充分でもある。すなはち、貨幣價値論の任務が、一つの價格と他の價格との間に於いて存在するところの後の價格の原因となるべき貨幣價値の研究に在るとするならば、貨幣價値の決定に關して前の價格を原因と見ることは、決して循環論ではない。而してかのごときは、余における貨幣價値說の立場ならびにミーゼスが貨幣の內部客觀的交換價値を說く場合の立場にともに該當する」と。同樣の見解は前揭の田中教授の敍述のうちにも見出される(田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」「國民經濟雜誌」第四十九卷　第五號　一三―一四頁參照)。

しかしながら、この貨幣の價値の歷史的連續性の構想なるものは、もともと、貨幣の價値の變動を說かんがためのものではない。それはむしろ貨幣の價値性の問題を解決せんがために導入されたものなのである。そうしてかゝる理論的性格を看過するか

ぎりにおいては、それの存在理由はまつたく沒却されざるを得ない。すなはち正井教授が主張しておられるがごとく、「併しながらミーゼスが、貨幣の價値は購買貨物の使用價値に依存する、との前提に於いて、貨幣の主觀的交換價値（使用價値）を說く場合については、右のごときミーゼスの答へは必ずしも有效であり且つ充分であるとは言ひ得ない」（前掲書、一八〇頁）。とはいへ、貨幣の價値性を主觀主義的に基礎づけんとするかぎりは、かゝる貨幣の價値の歷史的連續性の構想は不可缺のものと言はねばならない。この點まつたく柴田氏の主張されるがごとくである（柴田氏「理論經濟學」上卷　九〇頁參照）。たゞ貨幣の價値の歷史的連續性の構想の理論的性格を貨幣の價値性に關するものと解せざるかぎりは、正井教授のごとく、不當にも、ミーゼスの貨幣の主觀的交換價値の基礎づけの主張をもつて「ミーゼスに於いて特色と看做さるべき說で」はないと言はねばならないのである（正井教授　前掲書　一七三頁參照）。

しからば正井教授の提唱せんとされるところの貨幣の價値の變動に關する動機理論とは如何なるものであらうか？

いま教授に從へば、貨幣の價値とは貨幣の利用價値をいふのである。この利用價値なるものは、自然經濟的な絕對的な使用價値とはまつたく異なれる概念規定なのである（註五）。一般財より貨幣財を區別する特異性をば、貨幣財が交換價値しか持つてゐないといふ點に求めることは、貨幣經濟にあつては誤まりである。貨幣交換的社會經濟にあつては、使用價値なるものは存せず、存在するものはたんに利用價値だけである。「利用價値とは價格を前提として生れるところの、一つの價格と次ぎの價格との間に存在する主觀的なる價値である。それは使用價値のごとくに、物質的に直接に人の欲望充足に役立つ消費財において存するのみではなく、交換せられ得る如何なる財にも存する價値である。換言すれば客觀的なる交換價値を有するものたるかぎり、如何なる財にてもが主觀的價値たる利用價値の所持者である。この點においては貨幣と雖も、他の財に異なるところはない」（註六）。從つて教授にあつては、貨幣の價値の法則は一般財の價値法則と全然同一なのである（註七）。

註五　正井教授「貨幣價値の研究」一二四頁および一七四頁參照。

註六　正井教授　前掲書　一一一―一一二頁參照。

貨幣の利用價値の反映性は、一方において、それが斯く價格を前提しており、かつそれから誘導されしものであるとの意味においてのみならず、他方にあつては、それはまた「作用價値」なるの意味においても說かれて居るのである。

すなはち、「交換經濟または貨幣經濟に於いては、經濟價値は云はゞ第二次的價値である。而して斯くのごときが卽ち利用價値である。換言すれば經濟價値は固有價値（Eigenwert）ではなくして、作用價値（Wirkungswert）である。すなはち、交換經濟に於ける總べての財の評價は、基本的評價（ある財が吾人の厚生に役立つ點に關する根本的評價）の反射たるに過ぎない。すなはち經濟價値に於いては、經濟に於ける欲望發生の原因たる欲望價値（Bedarfswert）たるものが、すでに經濟客體たる財の概念のなかに含まれてをるものと見られてをる。換言すれば、欲望價値とは財の有用性のことであるが、それは經濟財に於いてはそれの存在が前提せられてをる。然らば要するに利用價値とは何であるかといふに、右のごとき性質の經濟財について、交換經濟に於いて人がそれの必要を如何なる程度において感ずるか、或は貨幣經濟については人がそれの必要を如何なる程度の購買の

量に於いて現はすかの、必要または入用の度合を支配するところの、財の社會的效用の大さが、すなはち利用價値である。而して吾人によれば、斯くのごとき利用價値が貨幣經濟における經濟價値である」と（前掲書　五〇頁參照）。

註七　正井教授　前掲書　一二四頁參照。

このごとく、「貨幣それ自體の價値……は價格と關係なしには成立し得ない、併しそれは明らかに價格と相表裏するものではない、かくしてこの意味における貨幣の價値は價格に對して獨立的のものであると云ひ得る」（註八）。「こゝに謂ふ貨幣の價値の獨立性とは、貨幣價値が物價（または貨幣の客觀的交換價値――筆者註）と相表裏すると云ふがごときものではない、と云ふ意味であつて、貨幣價値が物價（貨幣の客觀的交換價値――筆者註）と相互的の因果關係をもたぬ絶對的のものである、との意ではない」（註九）。

貨幣の價値は價格を前提するかぎりでは、それは一種の反映價値である。この點ではオースタリー學派の「謂はゆる購買貨物に對する豫想的の使用價値としての貨幣價値（貨幣の主觀的交換價値――筆者註）」が價格の反映としての意味しか持ち得ないと異曲同巧である。併し教授の貨幣の利用價値は、反映價値たるの點ではかれと少しも異なるところがなくとも、價格とまつたく相表裏するていのものではなくして、それが價格變動の要因ともなり得るといふその「因素性」において、オースタリー學派の謂ゆる主觀的交換價値とは異なるものであるといふのである。從つて貨幣の利用價値は貨幣それ自體の價値であるとはいへ、なほそれが反映價値たることはこれを否定しない。たゞそれは價格要因としての獨自性を持つと言へるにすぎないのである。

註八　正井教授「貨幣價値の研究」一三八頁參照。

註九　正井教授　前掲書　一二九頁參照。

然かれども正井教授のごとく、貨幣の利用價値の反映性を認めて、果して價格要因としての獨自的な貨幣價値、したがつて利用價値の獨自性を主張し得るであらうか？

ミーゼスにあつては、貨幣の主觀的交換價値の反映性を認むればこそ、それを貨物價値に溯及せしめて、貨幣の價値の非反映性、固有性を主張し、もつて價格に對する貨幣の價値の獨自性を論證せんとしたのであつた。貨幣の「獨自の因素に基づく價値」をば「貨物價値」のうちに見んとしたのであつて、このゆゑにこそ貨幣の價値の歷史的連續性の構想の必要があつたのである。そうしてこれに依つて貨幣の價値性を限界效用學說でもつて基礎づけ、かくしてさらに貨幣の客觀的交換價値の變動、すなはち價格の變動をも限界效用學說によつて基礎づけんとしたのである。從つてミーゼスにおいては、「貨幣には獨自の因素に基づく價値がなくして貨物價値の反射としての價値があるのみである」といふことは、貨幣の價値が商品價値で說明されて、貨幣としての價値が說明されて居ない、すなはち

貨幣の價値が貨幣ゆゑの價値としてゞはなくして、商品ゆゑの價値をもつて說明されて居るといふ意味において、貨幣の價値を「貨物價値の反射」と言ひ得られるとしても、このことをもつて「かくのごとくんば要するに貨幣價値は價格（貨幣の客觀的交換價値――筆者註）に對してなにらの原因力をも有し得ざるのみならず、反對にそれは價格の反映としての意味しか持ち得ない」（註一〇）とは言ふことが出來ないのである。

註一〇　正井教授「貨幣價値の研究」一三八頁參照。

しからば正井教授にあつては如何といふに、貨幣の限界效用、したがつて貨幣の價値は、價格とその他の社會情勢とに基づきて個人が貨幣を貨幣そのものとして所有すること（すなはち貯蓄）の如何に重要であるかを判斷することによつて生ずるところの貨幣に對する欲望とその個人の所得との關係に依つて決定されるものなのである（註一一）。そうして、貨幣の存在量としての所得は、「當面に問題とせらるゝ即ち將に構成せられんとする價格に對しては獨立せる一つの絕對量である。これに反し貨幣欲望は當面の價格と函數關係にある相對量」（傍點筆者）ではあるが、當面の價格と貨幣欲望との關係によつて貯蓄量が決定される。かくしてこの相對的なる貯蓄量が絕對的なる所得量に制限せられるところに一つの獨立的な貨幣の利用價値が成立する（註一二）。この貨幣の「獨自の因素に基づく價値」の低減は、個人の貯蓄の減退、支出の增大となつて現はれる。これは、すなはち、特定商品に對する需要の增大となり、または需要價格の上昇を結果する。この個人的な貨幣の利用價値の低落の傾向が一般的なものとなるときは、やがて一般市場價格または物價の騰貴が招來されるのである。逆の場合にはまた反對の結果が齎らされる。このやうに、正井教授に從へば、貨幣そのものの限界效用（すなはち貨幣の利用價値）は當面の價格とは離れて獨自に決定される。かくして、貨幣の利用價値は貨幣の客觀的交換價値を規定し、從つて當面の價格または物價の變動を決定すべき獨自の要因である。こゝにおいて、かゝる能動的要因としての貨幣の利用價値決定の原理として、限界效用學說の貨幣の理論への適用の可能性が强調されるにいたれるもののごとくである（註一三）。

註一一　正井教授「貨幣價値の研究」一二四頁および一五七頁參照。

註一二　正井教授　前揭書　一四六―一四七頁參照。

註一三　正井教授　前揭書　一三八頁、一五七頁以下および二二六頁以下、とくに二四二―二四三頁參照。

もちろん、正井教授の謂はゆる「貨幣の效用」なるものは、論者の言へるがごとく、「購買商品の使用價値」ではない。從つて「貨幣の評價は、商品評價の反射ではなくして、貨幣自體に關する獨立の評價である」（傍點筆者）（註一四）。とはいへ、このことはなにら兩者の本質的なる相異を意味するもので

はない。それはたんに表現上のニュアンスの濃淡をいろどれる意味しか持つものではない。蓋し、貨幣自體に關する評價の「獨立」性なるものも、價格、したがつて貨幣の客觀的交換價値からのまつたき「獨立」性の意味ではないからである。それは、たゞ「當面の價格」、「將さに構成さるべき貨幣の客觀的交換價値」に對する原因として、それからはなれて形成されるべきものであるといふに過ぎない。それは「過去の價格」を前提して、その下にはじめて確定されしものである。そうして「過去の價格」から「獨立」に、獨自の因素に基づきて形成されたるものでは決してない(註一五)。このことは教授の貨幣の利用價値の反映性からして當然のことゝ言はねばならない。

註一四　正井教授「貨幣價値の研究」一五〇頁參照。

註一五　正井教授　前掲書　一四六―一四七頁、一〇八頁、一一二頁および一八六頁參照。

正井教授は、貨幣の主觀的評價（利用價値）の低下は貯蓄の減少、支出の增大となつて現はる。それは特定商品に對する需要の增大となり、從つてまたその商品價格の騰貴、貨幣の客觀的交換價値の低落を招來する、――といふこのやうな一聯の因果の連鎖をもつて、貨幣の「當面」の客觀的交換價値の主觀的價値に依る被規定性を論證し、限界效用學說をば貨幣の客觀的交換價値變動の決定原理たらしめんとするにありしもののごとくである。しかれどもこの一聯の因果の連鎖は、たゞ、貨幣需要の增減は、商品需要の反比例的なる增減となり、かくして商品價格の變動となつて現はれるといふことの表明、したがつてそれは貨幣の價値性に觸れざる貨幣數量說と同じく、單に貨幣の價値の變動を說けるものたるにすぎない(註一六)。もちろん、それは從來のごとき機械論的な數量說とは異なつて、貨幣の價値の變動をば、經濟主體の意思のうちに求め、それを動機づけて居る。ことに教授の利用價値は、ウィーザーの貨幣の主觀的價値のごとく、つねにそれの客觀的交換價値によつて制約を受けてゐるのとは異なり、まさに形成さるべき客觀的交換價値への能動性を有する點において、特異なることを認むべきである。この點アフタリオンの貨幣の豫測效用、したがつてそれにもとづく貨幣の主觀的價値とその軌を一つにしてゐる(註一七)。從つてこゝにこそ正井教授の貨幣價値變動理論の性格的特異性が看取さるべきであらう。

註一六　正井教授「貨幣價値の研究」一八五頁參照。

正井教授は、こゝで、ミーゼスと同樣に、「所得說」に反對して居られるが、教授みづからも同じく、ミーゼスによつて非難さるべきではなからうか(Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. SS. 95-97.)。

註一七　本書　第一編　第三章「貨幣心理學說の批判」參照。

正井教授は、ミーゼスと同樣に、商品價値決定原理と貨幣價値決定原理とを同一化し、問題を一元

論的に説かんとされたのである。而して教授は、商品價値をも反映價値、作用價値にまで引き上げて、貨幣の價値と同段階におかんとするの道程をとられた。これに反して、ミーゼスは、むしろ貨幣の價値を財貨の價値のごとく固有の使用價値にまで引き下げて、兩者を同一階段におかんとするの道を擇んだのである。かくして貨幣の主觀的交換價値を客觀的交換價値に對する決定原因たらしめ、價格に對する獨立性および「因素性」を主張せんとしたのであつた。しかるに正井教授は、貨幣自體の價値を強調するも、貨幣の價値の固有性を認めない。むしろそれの反映性を認めたからして、貨幣の利用價値を「將に構成さるべき」客觀的交換價値の決定原因たらしめ、もつて「當面」の價格に對する獨立性を主張せんとされたにすぎないのである(註一八)。

註一八　正井教授は、貨幣の利用價値も商品の利用價値もともにそれらの社會的效用より、すなはち價格または客觀的交換價値より誘導される。併し商品の價格從つて客觀的交換價値は、商品そのものゝ物質的效用、すなはち使用價値にも基づけるがごとくである(「貨幣價値の研究」五〇頁參照)。このやうに貨幣の利用價値は商品の利用價値と同樣、いづれも反映價値であり、第二次的價値である。とはいへ商品の利用價値にあつては、商品そのものに固有の使用價値から誘導されたるものである。しかるにこれに反して、貨幣の利用價値のごときは、貨幣そのものに固有の效用からではなくして、それに固有でない「社會的效用」、すなはち貨幣の客觀的交換價値から誘導されしものに過ぎないのである。

いま商品の價格がそれの使用價値に依つて決定し得るやは姑くこれを措いて問はないことゝすれば、商品の利用價値は、商品の使用價値の反射であり、それより誘導されたるものとはいへ、なほ商品そのものに固有の價値たることを妨げず、且つ價格に對して獨自の決定要因たり得るがごとくである。これミーゼスの貨幣の主觀的交換價値が、一面においては反映價値であるといへ、他面、貨幣の主觀的使用價値と同じであるといふ意味において、貨幣の固有價値であるとなにら異ならない。この意味において貨幣の主觀的交換價値は、それの客觀的交換價値、したがつて價格の獨自の決定要因であり得たのである。

然るに正井教授にあつては、「貨幣の效用とは靜的なる貨幣または貨幣自體の效用のこと」であるとはいへ、商品自體の效用と同じ意味において、貨幣の效用の固有性は主張され得ない。從つて貨幣の利用價値は、文字通りの反映價値であり、教授の見地からは、ミーゼスにおけるごとく貨幣の主觀的交換價値と主觀的使用價値との同一性はこれを肯定し得ず、かくては、貨幣の利用價値は貨幣の客觀的交換價値、從つて價格に對し獨立の決定要因たることを得ない。たゞそれは「當面」の價格に對してのみ、一見、獨自の要因たり得るがごとくであるにすぎない。それ故に、貨幣「自體」の價値、あるひは價格に對して「獨立の要因」としての貨幣の價値といふことは、「一定の所與」の貨幣の價値が、「當面」の價格から獨立に形成され、その「當面」の價格に對して恰かも「前提」であり、それの變動の「動機」とも考へられ得るといふことを意味せる表現上のあやにすぎざるがごとくである。

とまれミーゼスにあつては、貨幣の主觀的交換價値と主觀的使用價値とが同一視されてゐるが故にこそ、商品の使用價値原理たる限界效用學説によつて貨幣の價値性は基礎づけられた。かくしてまたそれは貨幣の價値の決定原理、價格變動の原理ともなり得たのである。しかるに正井教授にあつては、商品の利用價値と貨幣の利用價値との異質性が重視されざるが故に、貨幣の利用價値の固有性は否定され、したがつて價値性の問題も排除された。そうしてたゞ「當面」の價格の變動をば貨幣の利用價値をもつて限界效用學説的に説かれて居るに過ぎない。そこでは限界效用學説は、貨幣の價値の決定原理たり得ずして、貨幣の價値

の變動に就いての動機づけの原理となつて居るにすぎない。（それが、むしろ、限界效用學說の本然の姿ではあらうが！）

吾々は、正井教授が使用價値なる規定の自然經濟的なる範疇に屬するの故をもつて、これを排擊せんとされし意圖には滿腔の贊意を表するも、それに依つて貨幣の價値の固有性、したがつて貨幣の價値性の基礎づけの問題をも放棄されるにいたりしことを遺憾に思ふものである。併しながら、正井教授の貨幣價値論に關する動態論的性格觀は、すでに、前揭のごとき商品價値と貨幣の價値との同一視、從つてカタルアクティッシュな「職能價値說」のうちに、すなはち交換手段學說的なる教授の貨幣本質觀のうちに胚胎せるものゝごとくである。

かくのごとき相違こそはミーゼスの貨幣價値理論と正井教授の貨幣價値理論との性格的なる差異を惹きおこすにいたれる所以なのである。而してミーゼスにあつては貨幣の價値性をもなほ問題としてとりあげられてあるに反し、教授にあつてはそのやうな問題はまつたく顧られてはゐないのである。こゝに正井教授の貨幣價値論における動態論的性格觀の理論的な根據が看取されるであらう。

貨幣の機能價値論者たるヘルフェリッヒもまた、ある意味においては、正井教授の斯かる見解の先驅者と見ることが出來やう。すなはちヘルフェリッヒはかく述べてゐる。

「價値はなにら物自體に固着せる特質ではない。それはむしろもつぱら人間たる主體が外界に對して有する關係に基づいてゐるのである。事物はそれゆゑに、その單なる存在によつて、すなはちその單なる實體によつて、價値を持つのではなくして、それが一定の機能を果すことによつて、直接にか間接にか、人類の欲望を充足するといふことのゆゑに、價値を持つのである。それゆゑに、經濟價値はいづれも機能價値であつて、實體價値（固有價値、使用價値）なるものは、一般には、存在しないといふべきである。かく、實體價値と機能價値との關係の論理的な考察の結果は、これら二種の價値は、經濟價値のいづれもがそれに基づけるところの、同じ一般的な前提のうちに、その根柢を有し、しかも機能價値と實體價値との間の外見上のアンチノミーは、まつたく、解消されることが明らかとなる。從つて、貨幣の價値も、他のすべての經濟財の價値と同じく、ともにその成立は、經濟價値一般の前提條件に基づけるものなりと云ふべきである」と。而して經濟價値成立の二大根本條件とは、欲望の對象たることゝ、獲得の困難とである。そうして貨幣は、一方において間接的に欲望を充足する手段財であるとともに、他方では、それが獲得は自然的にも社會的にも制約されて居るが故に、機能價値を有するのである（註一九）。

註一九　拙著「貨幣本質の諸問題」一二一—一二五頁參照。Vgl. K. Helfferich, Das Geld. SS. 536-538.

このやうにヘルフェリッヒも經濟財の價値をば貨幣の價値と同一段階に引き上げて、ともに機能價値で論證せんとしたのである。しかも彼は正井教授よりもさらに問題を進めて、貨幣の價値性の究明

に突き入つて居る。

すなはち、「ヘルフェリッヒの斯かる歸結に對して、つぎのごとき異論が豫想せられ得る。すなはち、なにら他の目的には用いられ得ない素材一般が、貨幣としての機能を營み得るといふのは、一つの petitio principii である。およそ貨幣と一切の他の經濟財との間には、次ぎのごとき相違が存する。經濟財にあつては、欲望充足の手段たり得る性能が、もつぱら、價値の一前提である。しかしながら、反對に、調達の困難のゆゑにそれらは現實に價値を獲るといふ事實は、その效用性の前提ではない。すなはち、例へば、水はそれが稀少性及び調達の困難のゆゑに價値を表示するやいなやにまつたく關係なく、渴を醫するに役立つ。貨幣にあつては、しかれども、事情は異なる。貨幣が明らかに、價値移轉の手段としてその諸機能を果し得るのは、貨幣が價値あるものであるといふ前提のもとに於いてのみ、然るのである。價値なき貨幣は、交換の手段並びに價値の尺度としても、資本移轉の手段としても、役立ち得ない。……しかれども、それが價値性を有するかぎりに於いてのみ、なにらかの種類の利用效果を與へ得るものであるならば、その價値性をば排他的に、貨幣そのものとしてのその利用效果からしては、導き出すを得るものではない。むしろ、他の利用效果のゆゑに、すでに、價値あるものゝみが、貨幣として機能し得るのではなからうか？」(註二〇)。

註二〇　拙著「貨幣本質の諸問題」一二五—一二六頁參照。Vgl. K. Helfferich, Das Geld. SS. 538-539.

こゝにおいて、同じく機能價値論者たるミーゼスは、貨幣の價値をば商品の價値に引き下げて貨幣の價値性を論證せんとしたのである。ところがヘルフェリッヒは貨幣の法定支拂手段たることにその解決を求めんとして、遂いに國家の權威に逃避したのであつた。しかし經濟財の機能價値が物質的效用に前提をおけると同樣に、貨幣の機能價値も法定支拂手段としての國庫通用力に基づかしめ、いづれもそれらに固有の價値を前提して、貨幣の價値性を論證せんとしたのである(註二一)。しかるに正井教授はヘルフェリッヒと同樣の道を擇ばれたのではあるが、しかも貨幣の價値性の問題はこれを拋棄することに依つて、貨幣價値論の動態論的な性格觀を表明されるにいたつたのである。

註二一　拙著「貨幣本質の諸問題」一二六—一二八頁參照。

貨幣の價値の變動の理論も、貨幣の價値性の問題が解決されざるかぎりは、いまだ問題が殘つてゐるやうに思はれる。ミーゼスの貨幣の客觀的交換價値の變動の限界效用學說による論證も、貨幣の價値性の限界效用理論的基礎づけを俟つて、はじめて、それは主觀主義的な貨幣價値變動の理論たり得たのである。しかるに貨幣の價値性の問題を放棄して、貨幣の價値の變動を論證せんとしても、それは不可能なるわざではなからうか。そこでは限界效用學說は、貨幣の價値の變動の說明原理たり得る

ことはかたく、それは、たゞ、貨幣の價値の變動に關する動機づけの原理たり得るのみであらう。田中教授ならびに正井教授の貨幣價値理論の動態論的性格觀にあつては、貨幣の價値の變動への動機づけがなされてゐるにすぎざるがごとくである。

しかるに、同じく貨幣價値論の動態論的性格觀を表明して居られる栗村雄吉氏にあつては、ミーゼスの貨幣の價値の歷史的連續性の構想に對し妥當なる解釋は與へられてゐないとはいへ、田中教授や正井教授の貨幣の價値の變動に關する動機理論に一歩をすゝめ、眞にこれが變動の機構をば明らかにし、一般均衡の理論に立ちて貨幣の價値の變動の要因を究明せんことが、意圖されて居るものと言ふことが出來る。私は、次節において栗村氏の所論を考察することゝしやう。

第五節　一般均衡論的貨幣價値論

――ミーゼス批判　その三――

ミーゼス批判の第二の類型たる栗村氏の主張は、前掲の田中教授のミーゼス批判の反批判の形において現はれた。これよりさき、田中教授のかゝる消極論に對しては、すでに、柴田氏の反批判があり、これに就いてはすでに、私は、他の機會に言及した(註一)。栗村氏もこの田中教授のミーゼス批判への反批判の形において、自己の貨幣價値理論の動態論的性格觀を展開して居られる。

註一　拙著「貨幣本質の諸問題」一一四―一一七頁參照。

栗村氏の反批判の第一は、田中教授のミーゼス批判に對するものであり、その第二は、田中教授の積極的主張、したがつて教授の貨幣價値理論の動態論的性格觀に關するものである。先づ第一の問題に就いては、田中教授のミーゼス解釋の妥當ならざることを、栗村氏はかく述べられる。

すなはち第一には、――ミーゼスの貨幣の價値の歷史的連續性の主張は正當といふわけではない。併しながら田中教授の言はれるがごとく、ミーゼスは太古の人々の主觀的價値が直接に現代人の意識に作用してゐるものと主張して居るのではない。むしろ、貨幣發生當時の貨幣商品の商品としての限

界效用が商品の客觀的交換價値を決定し、これがさらに貨幣の客觀的交換價値を決定する。貨幣のこの客觀的交換價値が次ぎの時代人の主觀的價値を決定し、これがこの時代の客觀的交換價値を決定し、後者はさらに次ぎの時代人の主觀的價値を決定する。かくして貨幣の價値は歷史的に連續するといふのである。從つて、古代人の主觀的價値が決定したのは、現代人の主觀的價値ではなくして、古代の客觀的交換價値だけである。客觀的交換價値は、個人の主觀的評價を紐帶として、歷史的に連續するといふことゝ、古代人の主觀的評價が現代人の主觀的評價を決定するといふことゝは、混同を許さない。ミーゼスの主張は前者であつて、田中教授の非難は不當であるといふのである(註二)。

註二　栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」(「經濟學研究」第六卷　第四號)一八一―一八二頁、および田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」(「國民經濟雜誌」第四十九卷　第五號)一五―一六頁參照。

このやうな反批判は、柴田氏にも見られしところであつて、これは、一應、尤ものやうに思はれる。併しながら、このやうな反批判は、いづれも、田中教授のミーゼス批判と關心するところをそれぞれ異にしては居ないであらうか。なる程、ミ！ゼス解釋としては論者の非難するがごとくに、田中教授はまさに當を得たるものとは言ふことを得ないであらう。しかしこの「曲解」こそは、論者の謂ふところの「田中教授の積極的主張」をもつて、ミーゼスの貨幣機能價値學說を生かさんがためのものであつたと言ふことは、許されないであらうか！　田中教授みづからも、「貨幣成立當初における貨幣素材の限界利用が、そのときに於ける貨幣の客觀的價値の基礎をなしたこと、及びかくして成立せる最初の客觀的價値が主觀的評價によつて影響されつゝ而かも連綿として今日まで持續し來たりしことは否定し得ざる事實」(傍點筆者)なりとして居られる。それにも拘らず田中教授は問題を謂はゆる「曲解」へと運んで行かれたのである。併しながら、この際肝要なことは、この「曲解」そのものゝうちにあるのではない。むしろそれは、この「曲解」へと問題を展開せざるを得ざらしめたる事情のうちにこそ看取さるべきである。

かくして問題は、田中教授の「積極的主張」に關聯してくるのである。すなはち教授は、歷史的一時點としての「現在」の貨幣の客觀的交換價値をば「否定し得ざる事實」として「單純に與へらたるものと見做し、これのうへに主觀的評價を行ふものにして、敢に既往を問ふ必要」なしとて、貨幣の價値の始源への溯及に反對される。そうして「貨幣の價値の歷史的連續性を認めるならば、すでに成立せる貨幣の客觀的價値のうへに確定せられる限界效用（主觀的價値）と將さに成立せんとする貨幣の客觀的價値のみをもつて、それ自ら完結せる一聯の因果關係を論定し得」ると主張して居らるるのである。このやうな「所與の貨幣の客觀的價値が如何なる過程を通じて次ぎの價値を呼び起してゆく

かを説明するにある」といふ、田中教授の貨幣價値理論の主要任務にこそ、問題は祕められて居るのである。そうして謂はゆる「曲解」なるものは、まつたく、それへの伏線であつたに過ぎないのである(註三)。

註三　田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」(前掲雜誌　第四十九卷　第五號)　一五―一六頁および一七頁參照。

ところで栗村氏は、さらに、このやうな田中教授の「積極的主張」に對してかく批判される。

すなはち第二に――田中教授は貨幣の價値の歷史的連續性の事實を認めて、この連續性の一環をとり、既成の貨幣の客觀的交換價値を所與のものと見做し、それに基づく限界效用と次ぎに成立すべき貨幣の客觀的交換價値の關係のみをもつて、「自から完結せる一聯の因果關係」と論定して、これでもつてミーゼスの主張の循環論的非難は免れ得るとして居られる。併し教授の主張の理由の奈邊にあるや、その理解に苦しむといふにある(註四)。そうして、田中教授にありては、この一聯の因果關係を「越へて、さらに、最初に與へられたりと見るところの客觀的價値の成立根據を明らかにすることを、何にらかの理由によりて困難であるが故に放棄すると言はれるのか」、それとも何にらか他の「理由のゆゑに放棄せねばならぬと言はれるのか」、が判然としない。第一の理由であれば、「學問的研究自體の放棄」を意味し、またもし第二の理由に據られるとすれば、その所以のものを明示されずしては、その主張はなにほどの「權威」をも持ち得ないと(註五)。

註四　栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」(前掲雜誌　第六卷　第四號)　一八二頁、および田中教授「限界利用說と貨幣の客觀的價値」(前掲雜誌　第四十九卷　第五號)　一五―一六頁參照。

註五　栗村氏　前掲論文　一八三頁參照。

田中教授が、一聯の因果關係を「越へて」貨幣の客觀的交換價値の始源に溯及しなかつたことは、確かに、問題を放棄したるものと言はねばならない。しかもこの貨幣の價値性の究明を「放棄」せる所以のものは、恐らくはミーゼスの貨幣本質觀が「名目主義」であつたからであらう(註六)。ミーゼスが「名目主義」的貨幣本質觀に立てるものとするかぎりは、貨幣の價値性をその歷史的始源に溯及して論じ、それの成立の根據を明らかにすることは「困難」である。この困難を知られる(?)がゆゑにこそ、田中教授は貨幣の價値の始源に溯及することをせずして、「學問的研究自體の放棄」の擧に出られたのであらう！　そうして栗村氏の謂はゆる「學問的研究自體の放棄」のうちに、却つて、田中教授はミーゼスの貨幣の價値の理論の活路を見出された(!)と見るべきではなからうか。そうしてまたこの「理由のゆゑに」、田中教授は貨幣の價値の始源への溯及を「放棄せねばならぬと言はれる」のである。まことに、ミーゼスこそ「名目主義」的貨幣本質觀を固執せんか、彼は、その非難にも拘らず、

「學問的研究自體の放棄」をなさざるを得ざるものであり、この譏りを免れんとすれば、みづからは「名目主義」的貨幣本質觀を放棄せざるを得ないのである(註七)。かくして田中教授にとつては、貨幣の價値の始源への溯及の放棄されしは、「名目主義」的貨幣本質觀よりしては困難であるがゆゑにであり、それと同時にまた、この本質觀に立たんがゆゑにこそ、その溯及が放棄されねばならなかつたのである。

註六　田中教授「金本位制と中央銀行政策」一七―一八頁參照。

註七　拙著「貨幣本質の諸問題」一一三―一一四頁參照。

もともと貨幣の價値の始源への溯及を必要とすること、從つて貨幣の價値の歴史的連續性の構想の必要なる所以は、「名目主義」的貨幣本質觀に立ちて貨幣の主觀的な固有價値を説明せんがためである(註八)。それは貨幣の價値性の基礎づけの問題を解決せんがためであつた。そうして貨幣の固有の、直接的なる主觀的價値ではなくして、貨幣の間接的なかつ反映的なる主觀的價値を説明するだけであるならば、貨幣の價値の歴史的連續性の構想なるものは、もちろん、これを必要としないのである。しかるに、前者のごとく貨幣の主觀的固有價値を基礎づけんとする場合にあつては、栗村氏の謂はゆる「學問的研究自體の放棄」の譏りを免れんとするかぎり、ミーゼス自體の「名目主義」的な立場は放棄されざるを得ざることゝなる。また後者の貨幣の反映價値の説明のためならば、かゝる譏りにも拘らず、貨幣の價値の歴史的連續性の構想は必要でない。このことは栗村氏自身も、すでに、認めて居られるがごとくである(註九)。

註八　柴田氏「理論經濟學」上卷　八八頁參照。

註九　栗村氏「貨幣價値の歴史的連續性の問題」(前掲雜誌　第六卷　第四號)一九〇―一九一頁參照。

かくして栗村氏の反批判は、田中教授の批判とその問題の焦點を異にせるもののごとくである。貨幣の主觀的價値の反映性を認め、從つて貨幣の主觀的な固有價値の否認、それの客觀的交換價値の基礎としての主觀的價値の否定、――これらの點に就いては、兩者はまつたく一致して居る(註一〇)。そうしてこのゆゑに、栗村氏も結局は、貨幣の價値の歴史的連續性の構想を放棄されるにいたりしもののごとくである。從つて、田中教授の非難さるべき點は、ミーゼスの貨幣の價値の歴史的連續性の構想を「曲解」したる點にあるのではない。それは、むしろ、それと、もに貨幣の價値性の問題をも「放棄」したといふことのうちにこそ求めらるべきではなからうか。

註一〇　栗村氏「貨幣價値の歴史的連續性の問題」(前掲雜誌　第六卷　第四號)一七一―一七二頁參照。

しからば栗村氏はミーゼスの貨幣の價値の歴史的連續性の構想をば、如何に取扱つて居られるか。

私は栗村氏の貨幣の價値に關する積極的主張のうちにおいて、この構想が如何に說れて居るかを考察しやう(註一一)。

註一一　栗村氏の貨幣價値論の動態論的性格觀の理論的根據に就いては、すでに、本書　第一編　第一章「貨幣價値論の動態論的性格觀の批判」において論じておいた。從つてこゝには、專ら、氏のかゝる視角からしてミーゼスの貨幣の價値の歷史的連續性の構想の理論的性格が如何に說かれて居るか、といふ點を明らかにしやう。

栗村氏は、ミーゼスのごとく、貨幣の價値の歷史的連續性の構想をもつてする貨幣の客觀的交換價値の主觀主義的な基礎づけに反對して、貨幣の客觀的交換價値の均衡理論的基礎づけを次のごとくに展開して居られる。

すなはち栗村氏に從へば、貨幣の客觀的交換價値の決定には、總べての經濟財の價格がすでに決定せられて居ることが前提されて居る(註一二)。第一に、貨幣の限界效用（主觀的價値）が測定され得るがためには、すべて經濟財の價格、したがつて貨幣の客觀的交換價値が與へられて居る。ところでこの所與の價格あるひは貨幣の客觀的交換價値なるものは、ミーゼスにあつては、過去に實在せしところのものであるが、栗村氏にあつては、「現實において決定せられることの可能なる價格であつて」、「現實において實際に決定されるであらうやうな價格、またはそれに近きものではない。」それは「まつたく、諸財がその本質上持つことの可能なる價格である。從つて、零ならざるすべての價格を含むところの無限の數列のうちから選ばれたる一つの値ひである。すべての財の價格の無限數列の一要素を形成するところの價格の組合せ、換言すれば、無限にあるところの價格組織のうちの一價格組織に就いて、それに相應するところの貨幣の限界效用が測定せられ、それに就いて各財の需要が決定せられ、その個人的需要數量が總計せられて社會的需要となる。この社會的需要が社會的供給數量に對應させられる。もし、需給不一致ならば、價格の組織は修正せられることを必要とする。而して、その修正は、すでに述べたところの可能なる無限の價格組織のうちの他のものが選出されることによつてなしとげられる。斯くして、すでに述べたる過程によつて社會的需給が一致すべき價格が現實の價格として決定せられる」のであると(註一三)。

註一二　栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」(前揭雜誌　第六卷　第四號)一八六頁參照。

註一三　栗村氏　前揭論文　一八六―一八七頁參照。

このやうにして、「すべての財の價格が決定されるならば、それによつて交換財たる貨幣の客觀的價値が決定せられる」のである。併しながら、「財の價格が決定される」といふことは、「貨幣の客觀的價値が決定される」といふことに外ならない。從つてそれは價格をもつて價格を說明することである。

そこにあつては貨幣の客觀的交換價値はいまだ少しも説明されては居ない。この循環論を逃れんがために、ミーゼスは貨幣の價値の歴史的連續性の構想を持つて來たのであるが、しかし栗村氏はこの道をとらない。そうして、「最初に假りに與へられたりと見る價格組織、而して、次ぎの調節作用によつて修正されつゝ選ばれる價格組織と、需給の關係から現實に決定さるべき價格組織とは、同質の價格組織ではない。前者は可能なる價格組織であり、後者は現實に於ける價格組織である。それ故に、私がなしたるがごとく、財の貨幣價値ひいては貨幣の客觀的價値を前提として、現實に成立すべき貨幣の客觀的價値を説明することは、決して循環論法にも、またミーゼスの主張におけるがごとく、謂はば螺線論法にも陷るものではない」として居られる(註一四)。

註一四　栗村氏「貨幣價値の歴史的連續性の問題」(前掲雜誌　第六卷　第四號)一八七―一八八頁參照。

栗村氏の主張せられるがごとくに、決定さるべき貨幣の客觀的交換價値は前提されし貨幣の客觀的交換價値とは異なる。「可能」なる價格、したがつて貨幣の「可能」なる客觀的交換價値から生ずるのは「現實」の價格、すなはち貨幣の「現實」の客觀的交換價値である。これら二つの價格、したがつて貨幣の客觀的交換價値の「異質性」は、謂はゆる循環論法を排除せるがごとくである。いまこの「可能」と「現實」なる二つの規定相互間の關係に就いて、從つて「可能」なる價格そのものに關して、なほ議論もあらう。しかしながら、これらの點に就いてはいまこれをしばらく措くとするも、なほ問題は殘る。すなはち、ミーゼスが過去に實在せし價格、すなはち貨幣の客觀的交換價値を前提し、從つて過去に溯及すべきことを主張せるは、貨幣の客觀的交換價値の決定原因として貨幣の主觀的固有價値を論證せんがためであつて、もつて貨幣の價値性の問題の解決を企圖せるものなのである。しかるに栗村氏は、貨幣の價値の始源への溯及を回避して實在せる價格の代りに、可能なる價格を前提してもつて問題を解決せんとしたのである。そうしてミーゼスの企圖せし貨幣の價値性の問題には觸れては居られない。かくて栗村氏の貨幣價値理論は動態論的なる性格のものとして展開されしがごとくである(註一五)。

註一五　もつとも栗村氏の貨幣價値論の動態論的性格觀が氏の一般均衡理論そのものゝうちに胚胎して居ることは、すでに本書の一八頁以下において指摘せるがごとくである。この動態論的性格觀は、貨幣價値理論の課題を次ぎのごとく措定して居られる言葉のうちに、最もよく現はれて居る。すなはち、

「惟ふに、一般財の價格理論と雖も、財の可能なる價格が如何にして現實の價格となるかの説明をなすこと以外には、課題を持つものではない。貨幣價値の理論は一種の價格理論である。嚴密に言へば、貨幣の價格理論である。貨幣が一般財とその本質を異にすることから、當然に、貨幣の價格(客觀的交換値値―筆者註)の決定に參與するところの條件は、一般財の價格理論に於いてその價格の決定條件としてあげられるものとは異なる筈である。然れども、價格の理論であるといふ點において共通のも

のを持つ。共通のものとは、卽ち、可能なる價格のうちより如何なるものが現實の價格として決定せられるかの機構を明らかにすることである」と（「貨幣價値の歷史的連續性の問題」前掲雜誌　第六卷　第四號　一八八頁參照）。

田中教授も價格論以外に貨幣價値論なきことを强調して、同じく、貨幣價値理論の動態論的性格觀を表明して居られるのである（「限界利用說と貨幣の客觀的價値」前掲雜誌　第四十九卷　第五號　一七頁參照）。しかしながら、栗村氏は貨幣の價値の歷史的連續性を認められざるがゆゑに、貨幣の「可能」なる客觀的交換價値を前提して、「現實」の客觀的交換價値を說き、田中教授は、歷史的連續性を認められるがゆゑに、貨幣の「旣存」の客觀的交換價値をもつて「將來」の客觀的交換價値を說明せんとされる。從つてこれらの點においては、兩者はそれぞれその說明の方法を異にして居られるがごとくである。しかれども、このことはなにら本質的なる相違を意味するものでは決してない。それにも拘はらず、ここに栗村氏に依つて、貨幣の價値の變動理論は、田中教授のそれに一步を進めて充分なる展開を得るにいたつたことは、看過されてはならない。

ところで併し、栗村氏は如何なる根據に立ちて、貨幣の價値の歷史的連續性を拒否されるか。栗村氏に從へば、「貨幣は貨幣として通用するかぎり、直接の人格的欲望の充足手段とはならない」（註一六）。從つて、「貨幣の主觀的價値（一般的限界效用）は、貨幣の本質よりして、固有價値によりて定まらぬ。それは、……貨幣が交換の用具として作用することに依りて齎らすところの財の限界效用によつて定まる」と（註一七）。かくして、栗村氏にあつては、貨幣とは交換の用具であり、固有價値を有せず、從つて貨幣の商品性は拒否さるべきもののごとくである。若しもこのことが許されるならば、その貨幣の本質觀においては、田中教授と少しも異なるところなきがごとくである。そうして栗村氏も、田中教授と同じ貨幣本質觀よりして、貨幣の價値の歷史的連續性を拒否されるとすれば、栗村氏の田中教授に對する反批判の意義は見うしなはれ易い。併し最近の論文にあつては、栗村氏は貨幣の本質的機能を「價格の一般的表現手段」のうちに看取して居られる（註一八）。そうして貨幣の本質的機能のこの概念規定は、大體において、初期のシュムペーターの「價値の尺度」機能の規定に相當するものゝごとくである。さすれば貨幣の商品性、從つて貨幣の固有價値は是認せられねばならなくなる（註一九）。それにも拘らず、貨幣の價値の歷史的連續性の構想を拒否せんとされるならば、その理由は何處に求めらるべきか。それは、さらに深きところにあるものゝごとくである。すなはち、吾々は栗村氏の一般均衡理論的な立場のうちにその根據のあることを看取し得るであらう。

註一六　栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（前掲雜誌　第六卷　第四號）一六八頁參照。

註一七　栗村氏「貨幣の限界效用と價格一般」（前掲雜誌　第四卷　第二號）九三頁參照。

註一八　栗村氏「交換における貨幣存在の論理的必然性」（前掲雜誌　第七卷　第一號）八九頁參照。

註一九　Vgl. J. Schumpeter, Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. 1908, SS. 202.（邦譯　二七八頁參照。）栗村氏「交換における貨幣存在の論理的必然性」八二頁以下參照。

しかるに栗村氏は、この同じ論文において、メンガーやミーゼスなどの貨幣の發生を財貨の市場流通性から論證せんとする

「利益說」を批判しながら、貨幣の商品性、それの固有價値を否定して居られるがごとくである。そうして「初期の貨幣が商品貨幣であつたのは、貨幣の本質上さうであつたのではない」（傍點筆者）のであつて、「貨幣の賣行性と財の賣行性とが同一であり、又は兩者が斷つことの出來ぬ關係を持つ」となすことは當を得ずとして居られる（前掲論文　六五―六六頁參照。なほ「貨幣の限界效用と價格一般」前掲雜誌　九三頁參照）。併しこの批判には私の理解し得ざる點がかなりある。財貨の賣行性と貨幣の賣行性との同一視は、貨幣の價値の問題における、それの歷史的連續性の構想と密接なる關係の存するところであつて、栗村氏のごとく、貨幣の賣行性、流動性を、「何人も將來これが引取りを拒ばまないであらうと云ふ社會的信任そのものから來るのである、貨幣性そのものからくるのである」とされても問題は殘るやうに思はれる（「交換における貨幣存在の論理的必然性」六五頁參照）。

それはともあれ栗村氏は、シュムペーターのごとく、「價値の尺度」とは言はずに「價格の一般的表現手段」なる言葉を使用して、この用語上のニュアンスの相異のうちに相當深遠なる意味を盛つて居られるやに見うけられるが、筆者の容易に窺知し得ざるところである。

栗村氏に從へば、貨幣の客觀的交換價値は、二つの側の要因によつて定まる。第一は、貨幣側の要因、ことに、消費さるべき貨幣量。第二に、財貨の側の事情、需給を決定する諸要因。それらの要因が與へられるならば、それによりて財貨の價格が決定され、從つて貨幣の客觀的交換價値が決定される。それら諸要素における變動はいづれも諸財貨の價格の變化を喚び、したがつて貨幣の客觀的交換價値もまた變動する。貨幣側の要素と財貨側の要素との組合せ方に相應して、貨幣の客觀的交換價値もそれぞれ異なる。而して、現實の社會においては、それらの要素の組合せの一つは他に相互聯關の關係にあり、それゆゑ、貨幣の客觀的交換價値は相關聯して變動してゆく。從つて、それらの間に一見歷史的なる連繫を認め得べきも、決してさうではない。「少なくとも、理論的に考ふるとき、貨幣の客觀的價値の一つの値は、それの關係する固有の要素の組合せに依つて決定せられたのであつて、歷史的時間的に繫るところの過去の貨幣の客觀的價値により決定せられるのではない。この二づの間には、理論的になにらの必然關係の存在は認められぬ」と（註二〇）。

註二〇　栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」（前掲雜誌　第六卷　第四號）一九〇―一九一頁參照。

栗村氏に從へば、貨幣價値の決定の理論とは貨幣の價値の歷史的生成の問題ではなくして、それの論理的構成の問題であると言はれるものゝごとくである。吾々はこゝにヒルシュのミーゼス批判が想起せられる（註二一）。併しながらミーゼスの謂はゆる貨幣の價値の歷史的連續性の構想は、一見、貨幣の價値の歷史的な生成の問題のごとくではあるが、むしろそれの本質的內容は貨幣の價値の理論的構成の問題である。それは貨幣の客觀的交換價値をば、主觀的使用價値によつて基礎づけることを意圖せるものである。貨幣の價値性を究明せんとする、飽くまでも理論的な問題なのである。ミーゼスにおける因果の連鎖の歷史的時間的なる表現に捉らはれて、その意圖するところを沒却することは許さ

れない。「現實」の貨幣の客觀的交換價値を「可能」なる貨幣の客觀的交換價値によつて說明せんとするも、因果の連鎖は溯及されねばならないであらう。それら二つをもつて論理的な因果の連鎖が斷絕され、自足完了的なものとなすにはいまだ充分ではない。といふのは、それだけでは「現實」の貨幣の客觀的交換價値が「可能」なる貨幣の客觀的交換價値によつて說明されたとしても、さらには貨幣の客觀的交換價値そのものの解明が要望されること丶なるからである。これを說明せんがためにこそ貨幣の價値の歷史的連續性の構想が必要なのである。そうしてそこにこそこの構想の理論的性格が存するのである。從つて一般均衡の理論に據つて貨幣の價値の問題をば、もつぱら量の視角からのみ說くところの貨幣價値理論の動態論的性格觀からしては、貨幣の價値の歷史的連續性の構想の排擊さるべき所以が、少しも論證されては居ないやうに思はれる(註二二)。

註二一　Vgl. W. Hirsch, Grenznutzentheorie und Geldwerttheorie. SS. 124-125.
私はかつてヒルシュのミーゼス批判に贊成して、ミーゼス並びに柴田氏における貨幣の價値の歷史的連續性の構想の擁護論に反對を表明した。併しこのことは、決して、この構想の理論的性格を否認せんとせるものでは決してない。それはむしろ、この構想をもつてしても、なほ、貨幣の價値性の主觀主義的な基礎づけが不可能であることを指摘したるに過ぎないのである（拙著「貨幣本質の諸問題」一一四―一一七頁參照）。

註二二　本書　第一編　第一章「貨幣價値論の動態論的性格觀の批判」一六頁以下、ことに二八―三〇頁參照。

かくしてこゝに、田中教授が、かつて、柴田氏に依つて、ミーゼスにおける貨幣の價値の歷史的連續性の構想の存在理由を理解せずとの非難を受けられしことが思ひあはされる(註二三)。同じく一般均衡の理論に據つて居られる柴田氏が、正當にも、ミーゼスのこの構想の理論的性格を洞察されて、貨幣の固有の主觀的價値をば論じて居られるのである(註二四)。しかるに栗村氏は、同じく一般均衡理論の立場からしてかく論じて居られるに過ぎない。すなはち、財貨の價格組織は財貨の需給函數を前提し、後者は貨幣の一般的限界效用を前提しなければならない。しかるにこの貨幣の一般的限界效用はまたは財貨の價格組織を前提に要請しなければならない。併しこれに對し循環論との非難がありそうに考へられるが、それは當らない。それは、函數關係に依る相互依存的決定の無理解に基づける非難である(註二五)。「可能」なる價格から「現實」の價格を說明することは、なにら循環論ではあり得ない。かくして貨幣の價値の理論の使命とするところは、貨幣の「可能」なる客觀的交換價値から「現實」の客觀的交換價値が如何にして決定せられるかの機構を明らかにすることである、と主張して居られる所以である。もちろん、一般均衡の理論にあつても、因果決定的要因の存在を認めて居る。この點では、一般均衡の理論も部分均衡の理論たる限界效用學說となにら異なるところはない。しかしながら一般均衡の理論にあつては各經濟量間の相互依存の關係をとくに强調し、而してこの相互依存の關

係の組織全體を支配し決定する要因をも認めんとするにある。しかるに部分均衡の理論では、かゝる相互依存の關係を認めないで、唯一の經濟量と他の唯一の經濟量との間の關係のみを見て、一方が他の原因であり、又は結果であるとされるにすぎないのである(註二六)。中山教授の謂はゆる「近視眼的な因果關係論の誤謬」に陷れるものであらう(註二七)。このゆゑに、栗村氏は貨幣の客觀的價値をミーゼスのごとく主觀的價値に歸因せしめんとせる貨幣の價値の歴史的連續性の構想に反對せるものゝごとくである。

註二三　柴田氏「理論經濟學」上卷　八八―八九頁參照。

註二四　柴田氏　前掲書　第三章　第二節ノ二「貨幣の價値決定の構造」六六頁以下參照。

註二五　栗村氏「貨幣の限界效用と價格一般」(前掲雜誌　第四卷　第二號)九二―九三頁參照。

註二六　栗村氏「貨幣價値の歴史的連續性の問題」(前掲雜誌　第六卷　第四號)一六六―一六七頁參照。

註二七　中山伊知郎教授「數理經濟學方法論」(改造社版　經濟學全集　第五卷「經濟學の基礎理論」)九二―九三頁參照。なほ本書　第一編　第一章「貨幣價値論の動態論的性格觀の批判」二〇頁以下參照。

併しながら限界效用が價格の決定原因であるといふことの、一般均衡理論における意味と部分均衡理論における意味との間には、著しき差異のあることはこれを認めても、貨幣の價値性の問題を放棄し得る理由は少しも明らかとはならない。これは、柴田氏が栗村氏と同樣に一般均衡の理論の立場から、なほ、ミーゼス流の貨幣の價値の歴史的連續性の構想の必要を主張して居られるからである。栗村氏の主張される一般均衡論的貨幣價値理論をもつて「一應の理論的說明」の段階であるとなし、「その後の理論段階」では、ミーゼス流の貨幣の價値性の主觀的な基礎づけをなして居られる。かくして栗村氏が一般均衡論的貨幣價値理論をもつて、貨幣の「可能」なる客觀的交換價値から「現實」の客觀的交換價値を說明することに限定せんとされることとは、一般均衡の理論の方法論そのものにとつては、なにら必然的なものではなきがごとくに見へる(註二八)。

註二八　柴田氏の大著「理論經濟學」上下二卷は學界近來の大收穫である。柴田氏の立場は、大體、一般均衡理論にあるがごとき、氏の理論體系總體を構成せる各「理論段階」のそれぞれには、從來の有ゆる思想體系が編制的に組み入れられ、一大輪奐の美を構成して居ると言ふことが出來る。そうして玆に問題となつて居る貨幣の價値に就いても、栗村氏の謂はゆる「一般均衡理論」的なる貨幣價値變動の理論を「一應の理論的說明」の段階となし、その上に、貨幣の價値性に關する「後の理論段階」としてミーゼス流の限界效用學說を採り入れて居られるのである。このやうな理論構成は他の分野においても見られるところであつて、經濟諸量間の函數關係を强調されるとゝもに、從來のごとき狹義の因果關係論的な說明をも採り入れて居られるがごとくである。この點こそ柴田氏の一般均衡理論と栗村氏の一般均衡理論との性格的なる差異をなせるものゝごとくである。

それにも拘らず、柴田氏のかゝる學界への寄與を充分に評價し得ざるのゆゑにか、貨幣の價値の問題に關するかぎり、私は遺憾ながら、柴田氏の主張にくみし得ざるものである。そうして貨幣の價値性の問題の放棄、從つて貨幣價値論の動態論的性格觀

をもつて、一般均衡理論そのものにとつての性格的な必然と見るのである（本書　第一編　第一章「貨幣價値論の動態論的性格觀の批判」參照）。このやうな私の結論に對し、中山教授も私信において反對を表明して居られる。一般均衡の理論が貨幣の價値性の問題を捨象したるかのごとくに進展することは遺憾であるが、その理論的性格が必然的に貨幣の價値性の問題の放棄を要請するものとは受取れないと言つて居られる。併しいまだその理論的根據の詳說には接して居ないが、他日に約して居られるから、刮目して期待して居る。

しかしながら吾々は、栗村氏の反批判、したがつて氏の論構の消極的なる部分にのみ視野を限定してその見解を過少評價することがあつてはならない。以上の吾々の批判は、栗村氏にとつては、その論旨の謂はば消極的なる一面に關するものたるにすぎない。むしろ氏の論構の積極的なる部分にまで吾々の視野を擴大すべきである。そうしてかの消極的なる部分に捉はれて、その積極的部分の大なる寄與を見落すことがあつてはならない。すなはち栗村氏は、田中教授や正井教授に一歩を進めて、貨幣の價値の變動に關し、前二者の謂はば動機論的なる段階を超へて、それを眞の決定の理論にまで發展擴充して、これを確立させたのである。吾々はこの一般均衡理論的な貨幣價値變動理論のうちにこそ栗村氏の本來の面目を見るべきである。

栗村氏は、貨幣の限界效用が貨幣の客觀的交換價値の變動の決定的な原因にあらざるの點をばかく論證される。いまその主張に從へば、貨幣の一般的限界效用は經濟財の需要量を決定することによつて、經濟財の價格組織決定に參與し、かくしてまた貨幣の客觀的交換價値の決定要因ともなり得るがごとくである。すなはち、個人の購入する經濟財の種類と數量とは、恣意的に決定せられるものでなくして、經濟財の加重せられたる限界效用（經濟財の限界效用をその價格をもつて除したる商）が貨幣の一般的限界效用に等しくなるやうに決定せられる。この經濟財の需要量（從つて支出貨幣量）が加重せられたる限界效用水準の法則に從つて決定せられるまでの間、換言すれば需要がその價格においてなほ決定的數量に達せず、なほ暫定的數量にある間だけ、貨幣の一般的限界效用は、經濟財の需要量の決定要素たり得るのである。そうしてすでに經濟財の需要量にして決定せられたる時においては、すなはち支出貨幣量が決定されて購入が實現したる場合には（蓋し經濟財に對する需要の確定後には、購入餘力は、もはや、殘存して居ないから）、貨幣の一般的限界效用なるものは獨立の存在でない。この貨幣の一般的限界效用は、既述のごとく、經濟財の需要量を決定せるかの貨幣の一般的限界效用ではない。この需要が供給に對應させられ、そこに需給が一致すべき價格が現實の價格として決定せられるのであるが、この價格組織に對應して測定せられし貨幣の限界效用は、經濟財の需要決定後に生ずる貨幣の一般的限界效用とは、兩者まつたく異なる。一定額の貨幣の一般的限界效用は、貨幣の購入する經濟財の限界效用によつて決定せられ、現實の價格組織を俟ちて與へられるものなので

ある。從つて貨幣の一般的限界效用は、貨幣の客觀的交換價値の決定要因、ないしは能動的要因たるを得ざるものであると(註二九)　而してそれぞれの現實の貨幣の客觀的交換價値は、多數要因の變動によつて種々なる價格組織を與へられ、それらの競合を通じて決定されるのである。こゝに一般均衡理論よりする現實の貨幣の客觀的交換價値變動の、動機理論ではなくして、決定の理論が與へられたといふべきである。

註二九　栗村氏「貨幣價値の歷史的連續性の問題」(前掲雜誌　第六卷　第四號)一八八―一九〇頁および一八五頁以下參照。

栗村氏の前掲のごとき結論は、商品の價値を規定すべき限界效用學說が貨幣の客觀的交換價値決定の原理たることに反對せるヘルフェリッヒの所說と、實質においてなにら異なるところなきがごとくである。しかるに栗村氏は、ヘルフェリッヒの否定的所說に對して、「ヘルフェリッヒに依れば、貨幣の限界效用は、貨幣の客觀的價値に依存するの故をもつて、限界效用學說を貨幣價値の理論のうへに應用することは許されないと主張せられてゐるが、この主張の如何に成立し難きは、今まで述べたところより明らかであると思はれる」と述べられ、「今まで述べたところ」として、ミーゼスの貨幣の客觀的交換價値の決定者が究極においては貨幣財の主觀的價値であることを說明しておられるだけである(前掲論文　一七八―一七九頁參照)。ところで栗村氏はこの歷史的連續性の構想を不可として、本文に述べたるがごとく、一般均衡理論的貨幣價値變動理論を展開され、現實の貨幣の客觀的交換價値決定の機構にあつては、限界效用がたゞ消極的なる意味しか持ち得ず、したがつて貨幣の客觀的交換價値の決定原因たり得ざることを論證されたばかりであるが、しからばヘルフェリッヒの主張と如何なる點において異なるのであらうか？吾々のはなはだ理解に苦しむところである。

第六節　結　論

吾々は、いまや再び、冒頭に掲げし設問へと戻つて來た。すなはち、貨幣の價値は主觀主義的價値學說をもつて基礎づけ得るか？　貨幣の客觀的交換價値の決定者としての貨幣の主觀的な固有價値なるものありや？

從來、このやうな設問に答へたるものとしては、クニースの金屬主義的な主觀的な貨幣價値學說をはじめとし、ヘルフェリッヒの貨幣機能價値學說およびミーゼス流の貨幣機能價値學說との三樣のものが擧げらるべきであらう。これら三樣の解決の仕方は、いづれも、主觀主義的な商品價値決定の原理が、同時に、貨幣價値決定の原理として妥當することを主張することにおいて、みなその軌を一つにせるものである。しかれども、クニースにあつては、貨幣の狹義の商品性、すなはち物的性格を主張することによつて、商品價値決定原理としての使用價値學說の貨幣への適用可能が說かれて居る。これに反し、ヘルフェリッヒにあつては、使用價値の概念規定を擴充して機能價値となし、物質的な直接的欲望充足の作用のほかに間接的な欲望充足の作用をも含ましめて、貨幣の機能價値をもつてこの後者、すなはち間接的欲望充足作用のゆゑの價値なりとなした。そうして商品價値決定原理として

の機能價値學說をば貨幣にも適用せんとしたのであつた。すなはち貨幣に廣義の商品性を認めて、商品と同樣、貨幣の固有價値をば機能價値學說をもつて一元的に基礎づけて居るのである。從つて限界效用學說そのものゝ適用はこれを否定してゐる。

最後にミーゼスにあつては、商品價値決定原理としての限界效用學說の貨幣への適用の可能性を主張するものである。しかも彼は、クニースのごとき貨幣の狹義の商品性に反對し、從つて貨幣本質觀としては金屬主義をとらないのである。すなはち始源貨幣の價値は貨幣商品の商品價値（使用價値）で決定されるが、この貨幣商品の貨幣用途そのものが一種の使用價値、むしろ機能價値（利用價値）を貨幣商品に與ふべく、かくては本來の使用價値なき貨幣も、この利用價値のゆゑに價値を持つと言ふにある。しかもこの貨幣の反映的な利用價値を、始源貨幣の固有價値に連繫せしむるために、謂はゆる貨幣の價値の歷史的連續性の構想をかり來たれるものなのである。そうしてこれこそ、貨幣の機能價値（利用價値）原理と、商品價値原理としての限界效用學說とを結びつけたるものと言ふべきである。かくして限界效用學說が貨幣の價値の決定原理として、すなはち貨幣の客觀的交換價値を基礎づける原理として、自己を主張し得るや、從つて、貨幣の價値性を基礎づけ得るやは、一つにこの貨幣の價値の歷史的連續性の構想の如何にかゝつて居るものと言はねばならない。吾々は、いま、クニースやヘルフェリッヒの主張に就いては、これを措いて問はない。從つて、貨幣の價値の主觀主義的基礎づけの可能なりやの問題は、結局、次ぎのごとく措定しても同じことゝなる。すなはち、

貨幣の價値決定原理として、限界效用學說は自己を貫徹し得るや？　あるひは、貨幣の價値の歷史的連續性の構想は支持し得られるや？

この問題に對して田中敎授は消極的な立場をとられたのである。そうして貨幣の客觀的交換價値の決定要因としての貨幣の主觀的使用價値を否定され、貨幣の主觀的固有價値を基礎づけるべき原理としては限界效用學說を否定された。そうして貨幣の價値の始源への溯及に反對されて、貨幣の價値の歷史的連續性の構想の理論的性格をも「誤解」されるにいたつたのである。この消極論に對して柴田氏の反批判が現はれ、貨幣の價値の歷史的連續性の構想の存在理由を强調されて、貨幣の主觀的固有價値を基礎づけんとされたのである。併しながら、私の考ふるところでは、田中敎授のかの構想に對する「誤解」そのものにはなにら問題はなく、むしろその「誤解」と同時に、かの構想の意圖せる貨幣の價値性の問題をも放棄するにいたられたといふことにこそ問題が殘されて居るのではないかと思ふのである。而して田中敎授は、貨幣の價値の始源への溯及には反對されるも、なほ出發點としての貨幣の價値を歷史的に所與のものとなし、この意味においてのみ、貨幣の價値の歷史的連續性を認め

て、この與へられし一定の貨幣の客觀的交換價値が主體の將來的豫測（主觀的評價）を通じて如何に變動してゆくかを說かれたのである。而してこの主觀的評價に關するかぎり、限界效用學說の適用を認め、貨幣價値變動の動機をば、限界效用の原理をかりて解明せんとされたもののごとくである。

同じく正井敎授は、貨幣の價値性の基礎づけの價値原理としては限界效用學說の貨幣への適用不可能を斷じ、もつぱら、貨幣價値量の變動の動機理論としての限界效用學說の貨幣への適用可能を主張されるのである。而してその道程においては、ヘルフェリッヒの機能價値學說とその構想を同じくされ、しかも貨幣の價値性の問題を放棄されるの一點では、ヘルフェリッヒと袂を分かたれた。ところが、ヘルフェリッヒ自身が限界效用學說の貨幣への適用に極力反對したるその第一人者であつたことは、前揭のごとくである。かゝる消極的な理論體系をかりて、なほ限界效用學說の貨幣への適用可能を主張し得られるものなのであらうか。これ私は、正井敎授の限界效用學說的な貨幣價値變動の理論をもつて、かりに、「動機理論」と呼べる所以なのである。

すなはちヘルフェリッヒは貨幣の價値性の說明原理としての限界效用學說を否定して、獨自の機能價値學說を提唱したのであるが、正井敎授は、この場合、貨幣の價値性の問題を排除して居られる。從つてこの點では兩者の見解に對立の生じ得る餘地はあり得ない。而して敎授は、貨幣の利用價値の獨立性を論證することにより、貨幣の客觀的交換價値變動の原因としての貨幣の利用價値の決定に、限界效用學說の妥當を主張されるのである。しかれども貨幣の利用價値なるものは、なにら、貨幣に固有の價値ではなく、從つてそれはまた貨幣の客觀的交換價値の變動の原因たり得るものではない。それは、田中敎授の謂はゆる、貨幣の主觀的交換價値が貨幣の客觀的交換價値の決定原因たり得ざると同じである。貨幣の主觀的交換價値がミーゼスのごとくに主觀的使用價値に溯及せしめられてこゝにはじめて、貨幣の客觀的交換價値の決定原因たり得べく、從つて限界效用學說は貨幣の價値の變動原理ともなり得るがごとくである。しかるにこの貨幣價値の歷史的連續性の構想に反對して、貨幣の主觀的交換價値を主觀的使用價値に溯及せしめざる限りは、貨幣の主觀的交換價値は貨幣の客觀的交換價値の決定要因たり得ない。それは、むしろ、後者によつて決定さるべきものにすぎない。かくしてこゝに限界效用學說は、「當面」の貨幣の客觀的交換價値の變動を動機づけるべき原理として終れる所以である。

ところで、栗村氏は田中敎授の消極理論にはくみせざれども、同樣にミーゼスの貨幣の價値の歷史的連續性の構想に反對して、獨自の貨幣價値理論、いな貨幣價値變動の理論を展開して居られるのである。栗村氏の消極論が、前二者の消極論と區別さるべき特異の點は、一般均衡の理論に立ちて貨幣

の客觀的交換價値の變動に關し、謂はゆる「動機理論」の域を脱して、その決定の機構を究明して、變動理論を確立したる點にある。そうしてミーゼスの貨幣の價値の歴史的連續性の構想を拒否されるがゆゑに、貨幣價値變動の原理として限界效用學説の貨幣への適用可能をも否定されるにいたつたのである。

以上三者の消極理論に共通せるところは、いづれもミーゼスの貨幣の價値の歴史的連續性の構想を拒否せる點である。そうしてこの點においては、いづれの論者も、柴田氏の謂はゆる「誤解」のせめを負はねばならない。柴田氏も強調されるがごとく、貨幣の價値の歴史的連續性の構想の理論的性格は、貨幣の價値性を問題とせる點にありと言ふべきである。それにも拘らず私は、なほこれをもつてしては、貨幣の價値性の問題が、「ミーゼスにあつては」、解決されては居ないと考へるものなのである。商品價値の決定原理として限界效用學説が妥當なりやいなやの問題はこれを姑らくおくとするも、かの構想の理論的性格の徹底は、ミーゼスの貨幣本質觀とは矛盾する。少なくともクニース流の金屬主義に墮することを排撃するかぎりは、この構想を貫き得ないと考へるものである(註一)。さればこそ、私は柴田氏が田中教授の主張のうちに、ミーゼスのかの構想の「誤解」を看取されたことにはくみし得ざりし所以である。問題はかゝる「誤解」のうちにあるのではなくして、むしろ貨幣の價値性の問題そのものをも放棄せる點にこそ看取さるべきものなのである。かくして、ミーゼスの貨幣の價値の歴史的連續性の構想に就いての柴田氏の積極論、その擁護論のうちにも、なほ、「誤解」を看取することが許されないであらうか。

註一　拙著「貨幣本質の諸問題」一一一頁以下參照。

貨幣機能價値學説、あるひは一般的に言つて、名目主義的貨幣本質觀（純粋の金屬主義的學説以外のものといふ意味における）に於いては、貨幣の價値の歴史的連續性の構想の理論的性格は貫徹されるを得ない。從つてこの貨幣の價値性の基礎づけの不可能なることよりして、前掲の消極論は、貨幣の價値の變動の問題に視角を轉じ、變動に關する單なる動機理論から次第に精緻の度を加へて來たつて、一般均衡論的貨幣價値理論において、はじめて、貨幣價値變動理論として確呼たる理論的構成を得たるかのごとくである。そうしてこゝに貨幣價値理論の動態論的性格觀は完成したと云ふべきであらう(註二)。まことに、消極論の發展は、また同時に、貨幣價値理論の動態論的性格觀の生成、發展の過程でもあつたのである。私はこゝにこそこれらの消極論に共通するところの根本的なる性格を見出し得るものと思ふ。

註二　本書　第一編　第一章「貨幣價値論の動態論的性質觀の批判」參照。

ウィザーも言へるがごとく、貨幣價値の惰性と貨幣價値の變動なる、これら二つの主張は相矛盾するものではない。それらはむしろ反對に相補充し合ふべきものなのである(註三)。併しながら、兩者は混同されるを許さない。兩者は次元を異にせる問題に關するものなのである。すなはち、貨幣價値の惰性すなはち、貨幣の價値の歷史的連續性なる構想の理論的性格は、貨幣の價値性に關するものであり、貨幣の價値の基礎づけの問題なのである。貨幣の價値の變動の問題とは、ある所與の價値量の變動の問題である。一つは質の次元の問題であり、他は量の次元の問題である。もとよりこれら二つの問題の間には論理的な、必然的な相關性が見られ、それらを相互にまつたく孤立化せしむることを許さない。しかれどもミーゼスの貨幣本質觀そのものは、すでに、このやうな孤立化への傾向を內包して居るものゝごとくである。蓋しそれは、ミーゼスにあつては、貨幣價値の理論が、商品の價値の理論とは區別さるべき特異なる使命を課せられて居るからである。商品價値の理論にあつては、主觀的使用價値から出發して、價値ならびに價格の形成がことごとく說明され得る。從つて商品の客觀的交換價値は少しも顧慮されることを要しない。しかるに貨幣は他の商品と異なり、それが客觀的交換價値を有する場合にのみその經濟的機能を果し得、ことに貨幣の客觀的交換價値はそれから獨立な使用價値には溯及せしめられるを得ないのであるから、貨幣の價値の理論は、この貨幣の客觀的交換價値をこそ論ずべきであつて、貨幣價値の理論の道は、主觀的交換價値を越へて客觀的交換價値へと溯つて行かねばならないのである(註四)。貨幣の價値の理論そのものは、貨幣の客觀的交換價値をば、それが貨幣たるがゆゑの價値ではなくして、商品としての價値たるにすぎないといふ、かの時點にまで溯及せしめ得るにすぎない。それ以上は商品價値の理論の仕事に屬するのであると(註五)。かくして貨幣の價値の理論の使命とするところは、恰かも、貨幣の客觀的交換價値の變動の根據を過去の貨幣の客觀的交換價値へと溯及せしめて究明することにあつて、貨幣の客觀的交換價値を貨幣商品の主觀的使用價値によつて基礎づけることは、商品價値の理論の使命であるかのごとくに考へられる。こゝに田中、正井兩敎授のミーゼスよりの轉向の餘地があり、かつその貨幣價値理論の動態論的性格觀を構成し得る根據が與へられて居るかのごとくである。

註三　Vgl. F. F. v Wieser, Der Geldwert und seine geschichtlichen Veränderungen. Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung. XIII. Bd., 1904. (Gesammelte Abhandlungen. Tübingen 1929. S. 177.)

註四　Vgl. L. v Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. SS. 78, 79, 81, 84.

註五　Vgl. L. v. Mises, a. a. O., SS. 100 passim.

もちろん貨幣の價値の理論と商品價値の理論におけるこの相違は、なにらミーゼスの貨幣理論のカタルアクティークな性質に矛盾するものではなきがごとくである。蓋し商品價値の變動も貨幣の價値の變動も、ともに主觀的評價を通じて實現されるから

である。それらはともに、限界效用學說に依據して主觀主義的に基礎づけられて居るからである（Vgl. L. v. Mises, a. a. O., SS. 123. passim.）。

しかれどもミーゼスは貨幣の價値の變動の問題のみをもつて貨幣の價値の理論の全使命として居るのでは決してない。このことは、貨幣の價値の變動の理論と稱せられて居るところの貨幣數量說に對するミーゼスの批判よりして、これを推知するに難くはない。すなはち、「數量說の他の亞流は、暗默のうちに、一定の高さの貨幣の價値をば所與のものとして前提して居り、そうしてその研究をさらに溯らしめやうとはまつたくしない。貨幣の商品との交換割合の形成が必要なのであつて、肝要なのはそれの變動を說明することだけではないといふことが、忘却されたのである。この點にあつては、數量說は、諸種の一般的價値理論、例へば、價格自體の解明を放棄して、價格の變動を一つの法則に歸せしめてそれに滿足して居るところの多樣な需要供給學說とその軌を一つにして居る」（傍點筆者）（註六）。それは貨幣の價値の根本問題――貨幣の客觀的交換價値の決定原因の究明の問題――には觸れず、所與の貨幣價値の水準から出發して、貨幣價値の變動の理論をば展開して居るにすぎない。それでは貨幣の價値の完全なる理論とは言ふを得ない。貨幣の價値の成立、從つて貨幣の價値性の問題こそは、貨幣の價値の變動の理論とともに究明さるべき貨幣價値理論のいま一つの重大なる使命ともいふべきものなのである。これがためには、貨幣の價値の歷史的連續性の構想が必要である。そうしてこの構想こそが主觀的價値學說、ことに限界效用學說のうへに打ち立てられし完全なる貨幣價値理論展開への道を開拓するものといふべきなのである（註七）。

註六　Vgl. L. v Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. S. 95.

註七　Vgl. L. v. Mises, a. a. O., SS. 96-97, 93-94.

すなはちミーゼスは、ウィーザーの所得數量說を批判して、貨幣の價値の理論の二つの使命を明らかにするとゝもに、貨幣の價値の歷史的連續性の構想の理論的性格をも明確にかく說いて居るのである。――

「ウィーザーは、貨幣の客觀的內的交換價値の變動の說明を、國民經濟において貨幣所得と實質所得との間に存する割合の變動からなさんとして、彼みづからがその解決をもつて研究の目標としたる問題を放棄して居るのである。蓋し、ウィーザーは、貨幣所得と實質所得との關係から貨幣の內的客觀的交換價値の變動を說明し得るやもしれないが、しかも貨幣の價値の充全なる理論を樹立すべきことを……企てゝさへも居ないからである。價値が、本來、如何にして形成され、それがその時々に如何なる高さになければならないかに就いてはなにら述べてゐない、といふ從來の數量說に對して彼のなしたると同じ非難は、ウィーザーの學說にも、また、なされねばならない。そうしてこのことは、まさに、ウィーザーが貨幣の購買力の歷史的な聯繫を發見して、主觀的な貨幣價値理論の將來の發展のための根柢をつくり出したるだけに、一層奇怪である」と（傍點筆者）。

かくして貨幣の價値の歷史的連續性の構想の理論的生格は、貨幣の價値性の主觀主義的基礎づけに關聯するものなのである。そうしてそれは貨幣の價値量の變動の問題に關するものでは決してない。

しかれどもこの構想を以てして、果して、ミーゼスは貨幣の價値性の問題を解決し得たであらうか？私は二重の意味において「否」と言はざるを得ない。一つは、この構想の徹底はミーゼスの貨幣本質觀そのものに矛盾するといふ意味において。二つには、限界效用學說が商品價値決定の原理としても成立し得ずとの意味において。前者に就いては私はすでに繰り返して述べておいたから、こゝにはもつぱら、後者の否定の理由を簡單に述べておくことにしやう。

元來、使用價値なる概念規定は交換經濟的な概念規定ではない。交換經濟ことに貨幣經濟にあつては、財貨は商品であり、他人のための欲望充足物たるにすぎない。從つて商品は生產者にとつては使用價値ではない。このことはミーゼス自身も言及せるがごとくである(註八)。かくしてヘルフェリッヒが使用價値に代つて機能價値を用ひんとしたることは正當といふべく、この故にこそ、貨幣への限界效用學說の適用に反對したのである。それにも拘らずミーゼスは、貨幣經濟においても商品は究極において消費對象物となることのゆゑに、主觀的使用價値をもつて商品の價値を規定せんとするのである(註九)。このことは財貨と商品との規定の歷史的な差別性を抹殺することであり、貨幣經濟と自然經濟との本質的相違をも無視せるものと言はねばならない。ミーゼスにとつては、自然經濟も貨幣經濟も、結局は、財貨が生產者から消費者へ歸趨するといふことにおいて、いづれも異るところがない。たゞその歸趨が貨幣といふ媒介物で媒介されて居るかどうかの點が、兩者において異なつて居るといふだけである。そうして本質においては、それらのうちにはなにらの差異もなきがごとくである。さればこそ貨幣の發生も、彼にあつては、一般的需要の多きものが、かゝる媒介物の役目を引受けて、財貨の歸趨の過程に於ける困難を除去する、といふことのうちに胚胎せるものたるにすぎざるがごとくである。そこにはなにら貨幣生成の必然性は看取されない(註一〇)。吾々はこゝに限界效用學說の方法論的な缺陷を見ることが出來る。しかのみならず、限界效用學說は商品價値の基礎づけにおいても、決して成功して居るものとは思はれないのである。

註八　Vgl. L. v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel. SS 78-79.

註九　Vgl. L. v. Mises, a. a. O., S. 79.

註一〇　Vgl. L. v. Mises, a. a. O., I. Kap. §§ 1. u. 2.

ミーゼスは商品價値の理論においては、商品の客觀的交換價値、したがつてそれの價格を商品の使用價値をもつて基礎づけるには、もはや、なにらの困難も起らないと言つてゐるが、果してこのことは首肯できるであらうか。ウィーザーの價値費用法則やボェーム・バヴェルクの價格決定要因論における循環論(註一一)は、ミーゼスの貨幣の客觀的交換價値の說明における循環論法を想起せしめるもの

がある。そこには價格の基礎づけの問題は解決されて居ない。かくしてツウィーディネックが物價の惰性を説くがごとく、限界效用理論的價格理論にあつては、所與の價格から次ぎの價格へと如何にして動いてゆくかといふことのみが問題とされしにすぎない。これメンガーやウィーザーにあつては、價格そのものゝ究明はなくして、價格構成の法則が説かれし所以ではなからうか。然れどもこのことのゆゑに、正井教授のごとく、貨幣經濟上の價値をすべて反映價値なりとし、貨幣の價値性の問題をかへりみづして、もつぱら、貨幣の客觀的交換價値の變動の問題にのみ研究を限定せんとすることには、異論があり得やう(註一二)。

註一一　Vgl. F. F. v. Wieser, Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft. G. d. S. I. Abt. II. Teil, 2. Aufl., Tübingen 1924, §§ 38 u. 39.; E. v. Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins. II. Abt. Positive Theorie des Kapitals I. Band. 4. Aufl., Jena 1921, SS 295 ff.

註一二　正井敬次教授「貨幣價値の研究」一三六―一三七頁參照。

正井教授は貨幣の利用價値がそれの反映性にも拘らず價格の變動を規定し得ることをば、墺太利學派の價値理論の正當性を前提して論定し居られるがごとくである。――

「貨幣經濟における價値は、すべて社會的の效用（または營利原則的の效用）を基礎とするものである。第一段には財は必ずしも物質的の效用にではなく、社會的效用に基づきて財たり得る點において、第二段には物が交換性を有するといふ社會的條件に基づきて財たり得る點において、貨幣經濟にての財の效用は總べて社會的效用である。この意味の效用を間接的效用と稱するならば、貨幣經濟上の財はすべて間接效用に基づくところの財である。貨幣のみが交換能力を持つことを前提として、又は價格を前提として價値を持ち得るのではなくして、貨幣經濟上の財の價値はすべてが右のごときものである。斯くのごときが導き出されたる價値であるならば、貨幣價値のみならずすべての價値がそれである。右のごときは必ずしも余の獨斷的説明ではない。……ベーム及びウィーザーの貨幣經濟上の價値に關する説明においてすでに同樣のことが言はれてをる」と。

しかれども、貨幣價値の理論における主觀主義學説、ことに限界效用學説の不成功は、ミーゼスの意圖にも拘らず、貨幣價値理論の動態論的性格觀を勃興せしむるの機緣を與ふることとなつた。このことは、他方において、オースタリー學派の商品價値の理論における「不生產性」が一般均衡論的價格理論の發展を促したる歷史的な情勢と考へ合すべきであらう。そうして一般均衡の理論の波浪は、貨幣の分野にもおし寄せずしてはおかなかつた。そうしてこの波浪の侵蝕のあとを歷史的に物語つて居るものが、すなはちこゝに問題とせるミーゼスの貨幣の價値の理論ではなからうか。彼こそは貨幣の價値の理論の動態論的性格觀への轉向點に立てるものであり、彼においてはとも角も、貨幣の價値の歷史的連續性の構想をもつて貨幣の價値性の問題に飽くまでも固執して、これが解決に孤軍奮鬪したるものともなすことが出來やう。しかしながら思潮の侵すところ如何ともしがたく、貨幣の價値の理

論は、遂に、貨幣の價値の變動の理論となり、それの完成形態をば、一般均衡論的貨幣價値理論において見出したるものと言ふべきであらう。主觀主義的貨幣價値理論の不生產性は、もとより、貨幣の價値性の問題の放棄を正當化し得るものではない。吾々はこゝに再び、古典學派經濟學への思慕の情をあらたにせざるを得ない。現代における一般均衡論的なる思潮の激流のなかにあつては、それは、むしろ、無謀な、そうして甲斐なき企てであるにはすぎなくとも。

第三章　貨幣心理學說の批判

第一節　序　說

貨幣の價値（嚴密に言へば貨幣の客觀的交換價値）の主觀主義的價値學說ことに限界效用學說による基礎づけは、一方ではミーゼス流の貨幣價値の歷史的連續性の構想をもつてするそれと、他方ワルラスの保有效用學說的な基礎づけないしはアフタリオンの貨幣心理學說による基礎づけとの、二つが存する。而して前者のミーゼス流な基礎づけの仕方にあつては、結局、一種の金屬主義的な貨幣本質觀にいたるか、あるひはしからずして名目主義的なそれに固執するかぎりにおいては、それの貨幣價値理論は、遂いに、動態論的な性格のものとならざるを得い(註一)。この「消費」效用學說的な貨幣價値の基礎づけの失敗は、やがてワルラスの「保有」效用學說的な、またはアフタリオンの「豫測」效用學說（心理學說）的な貨幣價値の基礎づけに論者の關心を向けしむるにいたれるものゝごとくである。最近のわが學界におけるワルラス貨幣理論の再檢討はこのことを物語れるものであつて、中山伊

知郎教授の計算貨幣論はその一例である(註二)。なほ安井琢磨氏の詳細をきはめたるワルラス研究は、この間にあつてまことに貴重なる研究資料を學界に提供したものと云ふことが出來やう(註三)。

註一　第一編　第二章「貨幣價値の歴史的連續性の構想の性格について」一二六頁以下參照。

註二　中山伊知郎教授「貨幣の本質とその價値」(「經濟論叢」第四十六卷　第四・五號所輯)。

註三　安井琢磨氏「貨幣と經濟的均衡――ワルラス貨幣理論の一研究」(「經濟學論集」第八卷　第四號所輯)參照。

それはともあれ、これらの諸學説はいづれも、貨幣の客觀的交換價値を主觀價値學説ことに限界效用學説によつて基礎づけんがために、貨幣の主觀的固有價値したがつてそれの價値性を究明することをもつてその課題としてゐるものなのである。換言すれず貨幣の主觀的交換價値の獨自性、それが貨幣そのものに固有の價値なることを解明せんとすることに存するのである。從つて貨幣の主觀的交換價値の受動性、それの反映性を强調し、これを基礎づけんとする學説とは、根本的にその立場を異にし、まつたく對蹠的な關係に立つてゐるものなのである。この貨幣價値の受動性を説く學説の歸結たる貨幣の價値に關する動態論的性格觀に對して、前者の貨幣の固有價値を主張する學説は、貨幣價値理論の性格をもつて靜態論的なるものとなすのである。

併しながら私の考へでは、ミーゼス流な消費效用學説に立ちては、貨幣の主觀的交換價値の獨自性、それが固有性を論證し得ない。從つて限界效用學説は貨幣の客觀的交換價値の決定原理としては妥當せず、ただ商品價値理論としてそれに固執せる論者は、その貨幣の理論においては、一應、非交換論的なものへといたらねばならない。そうして貨幣の價値の理論においては、動態論的な性格觀を奉持せざるを得ないと私は信じてゐるのである。ところで貨幣の主觀的交換價値の基礎づけとしては、ミーゼス流の消費效用學説なるものが唯一のものではなく、なほワルラスの保有效用學説的な並びにアフタリオンの心理學説的な基礎づけの仕方もあり得るがごとくである。從つてこれらの基礎づけのうちに、なほ主觀的價値學説による貨幣の價値の基礎づけの餘地が、かくしてまた主觀主義的價値學説の上にもなほ交換論的な貨幣理論が建設し得るの餘地が存するものと言はねばならないであらう。前掲の中山教授は、このワルラスの保有效用學説に準據して、貨幣の固有の主觀的價値を基礎づけんとしておられる。いま私は、こゝには、アフタリオンの貨幣心理學説について、貨幣の固有の主觀的價値の基礎づけが果して可能なるやを、考察せんとするものなのである。

アフタリオンは、――正確なる心理的分析は貨幣單位の評價に於けるかゝる受動性や、最終所得單位の購買する商品の評價と貨幣の評價との同一視や、貨幣自體における質的要素の缺除とかを、否定しないであらうか。事實において貨幣は商品を通してゞなければ評價されないであらうか。あるひは

また反對に、所得の最終單位が購買する商品の評價となにらか獨立した貨幣の評價が個人のうちに見出されないであらうか。これら二つの評價についてなにらかの相違がないものであらうか、――と述べて(註四)、貨幣の主觀的交換價値の獨自性を强調せんとするのである。併しこの基礎づけの仕方が果して妥當であらうか。もしもこのことが成功したものであつたならば、主觀主義的價値學說によつても、なほ、交換論的な貨幣理論を樹立することが可能となり、從つてまた靜態論的なる主觀的貨幣價値理論の建設も可能となるであらう。

註四　Cf. A. Aftalion, Monnaie, Prix et Change. Expériences récentes et théorie. Paris 1935, pp. 205-206.〔松岡孝兒譯「アフタリヨン・貨幣・物價・爲替論」二〇六―二〇七頁參照。〕
譯文については松岡氏のそれに負ふところ大である。こゝに記して謝意を表す。たゞ原文について譯者とその解釋を必ずしも同じうしなかつたところがあつたので、それに從はなかつた部分も少くない。

以下において私は、アフタリオンの貨幣心理學說を中心として、前揭のごとき諸問題についてこれを吟味し、貨幣の主觀的交換價値を基礎づけるべき原理としての豫測效用學說の妥當性を究明することゝしやう。

第二節　最近の貨幣經驗と貨幣心理學說

アフタリオンは最近の豐富なる貨幣的經驗に基づいて、貨幣數量說や所得數量說の現實の事實との矛盾の甚だしきを說き、これら諸事實と調和し、これらを全面的に解明してあますところなき貨幣學說の樹立さるべきことを强調するにいたつたのである。彼の謂はゆる「貨幣心理學說」こそはかゝる任に堪へ得るものゝごとくであつて、この學說を樹立するにいたれるいきさつをば、次ぎのごとくに述べてゐる。

最近の貨幣經驗、ことにフランスにおいて觀察されたるがごとく、爲替による物價の變動は、まづ、貨幣數量說の否定に導き、そうして所得數量說を、一應、是認せるがごとくであつた。すなはち、貨幣數量の不變にも拘らず、爲替の影響のもとにあつては、たゞ所得の變動によつてのみ說明さるべきがごとき極めて著しき物價の變動が生じたのである。併しながら、紙幣の價値が周知のごとく、著しく下落せる中央ヨーロッパの二三の國々にあつては、所得數量說をもつてしても、もはやまつたく解明し得らるべくもなき現象が現はれた。從つてこれらの事實からして、こゝに所得數量說は一定の修正を必要とすることゝなつたのである(註一)。

註一　A. Aftalion, Monnaie. p. 196.〔前掲邦譯書　一九七頁參照。〕

すなはちアフタリオンの貨幣心理學說の積極的な根據となれる貨幣經驗といふのは、つぎのごときものなのである。彼に從へば、これらの國々にあつては、爲替相場が貨幣數量と獨立して物價を支配し、むしろ貨幣數量が物價の影響に支配されることが認められたのである。詳言すれば、貨幣がその莫大なる數量にも拘らず不足してゐて、物價の著しき騰貴には應じ切れず、從つて新しき貨幣の發行が要求されたのであつた。ドイツのマルク紙幣史の敎ゆるところに從へば、物價に對する爲替の影響はあらゆる商品に及び、單に卸賣物價に對してのみならず小賣物價に對しても、殆んどこれを瞬間的に變動せしめたることが示されてゐる。一日にいく回となく起れる爲替相場の瀕繁なる變動は、あきらかに、まつたく、國際市場への依存性を缺いてゐるところの商品の卸賣物價および小賣物價に對しても、同樣に直接的なる變動を與へてゐる。從つて一定商品の價格への爲替の直接作用は、もはや、なにらの制約もなく現はれた。また個々人における需要曲線を引き上げる所得增加に對して、次第に他の商品へと波及する物價騰貴普及の根據を認めるといふこともはや不可能なことである。物價の一般的上昇はきはめて迅速におこなはれて、所得の增加ならびに所得の物價に對する作用の實現されるを俟たずして、それらよりもより一層速かに顯はれる。從つて、物價に對する爲替の影響は、その影響が一層緩慢である國々において認められるがごとき中間的な段階をばとび越へて、騰貴させるので、このことは所得への考慮をばまつたく無用ならしめたのである(註二)。

註二　A. Aftalion, Monnaie. pp. 196-197.〔前掲邦譯書　一九七—一九八頁參照。〕

このやうに貨幣數量說や所得數量說をもつてしては、もはやこれら現實の貨幣經驗は說明さるべくもない。こゝにアフタリオンはこれら事實の複雜性を充分に解明するに堪ゆる理論の建設を意圖せるものなのであつて、貨幣心理學說さらには爲替心理學說こそはこの課題を解決せんとするものなのである。

しからばアフタリオンの謂はゆる貨幣心理學說とは如何なるものであるか?、吾々はこの學說の內容に立ち入つて說明するまへに、從來の支配的なる學說であつた貨幣數量說ならびに所得數量說なるものが、最近の貨幣經驗をなにゆゑに解明しなかつたのか、それら學說の理論的缺陷が如何なる點に存するかを、まづ明らかにしておかなければならない。それは、これらの點を明らかに捉へておくことが、やがてはかかる貨幣學說にかはつて新たに提唱せられるにいたつた貨幣心理學說そのものゝ特質を、同時に、明らかにすることとなるからである。

アフタリオンに從へば、すでに述べたるがごとく、貨幣數量說が物價の一般的上昇を貨幣數量の增

大に歸因せしめて理解せんとすることは、最近の貨幣經驗が物價と貨幣數量との間の變動上の不一致からして、これを否定してゐる(註三)。それのみならず、貨幣數量說論者のあるものは、さらに、物價の一般的上昇をば貨幣の流通速度の增加、貨幣よりの逃避、あるひは國內貨幣への信認の喪失――これを受取るとゝもに手放さうとして商品の買入を急ぎ、また同時にその數量をも大ならしめやうとするから――を以つて解明せんとするが(註四)、これもまたその理論的根據薄弱なりと言はねばならないと言ふにある。

註三　A. Aftalion, Monnaie. pp. 196 et seq.〔前揭邦譯書　一九七―一九八頁、ことに第二部、第一章及びその他參照。〕

註四　數量說論者ケインズは、貨幣の價値の變動要因としての貨幣の流通速度に關し、次のごとき具體的なる事例を擧げて、インフレェーシオンの一定時期における通貨の價値の下落が、それの流通速度に依存せるものなることを說いてゐる。すなはち、

「モスカウにおいては、どくわづかなる期間をのぞいては出來うるかぎり貨幣を手許におかないやうにしやうとすることが、一時は、滑稽なほどの程度にまで達した。ある食料品商が一ポンドの乾酪でも賣れば、彼はそのルーブル紙幣をもつて彼の脚の續くかぎり速かに中央市場に驅けつけ、その紙幣の價値の損失せざらんことを恐れて、それを再び乾酪にかへてそのストックを補充せんとしたのである。かくして謂はゆる『流通速度』なる現象を擧げたる經濟學者の先見の明を立證したのである。ウィーンにあつては崩壞期間中、街の角々にはにわか仕立の兩替屋が簇出して、人はクローネを受取つて數分以內にはそれをチューリッヒ・フランに替へて、取引銀行にゆきつくまでの間に起る損失の危險を免れることが出來たのである。深慮ある人は、カフェーで一杯のビールを註文するにも、しばらくの間にも價格の騰るのをおそれて、微溫なのを飲むことを忍んですらも、つぎの一杯を同時に註文しておかねばならないものだといふなのが、當節の諸講となつておつた」と(Cf. J. M. Keynes, A tract on monetary reform. 1923, p. 46 note 1.)

同樣の見解はオースタリーの紙幣についてのボーデスの敍述にも見へてゐる(Cf. Walré de Bordes, The Austrian Crown. 1924, pp. 162-164, 166.)。そうしてかゝる現象がすでに第十九世紀の初葉以來看取されしところのものなることがマーゲットによつて究明されてゐる(Cf. A. W. Marget, The definition of the concept of a "Velocity of Circulation of Goods." Economica. No. 41, 1933, p. 289.)。なほ拙著「貨幣本質の諸問題」四五四頁以下參照。

しからばアフタリオンの反對するところの理論的根據が如何なる點に存するかを見るに、歐洲大戰後のドイツのマルク貨の激動期にあつては、貨幣の流通速度はすでにその極限に達して、もはやこれをもつてしては、さらに引きつゞき奔騰せしところの物價を說明すべくもなかつたといふのである。實際、アフタリオンも言へるがごとく、連續的な物價上昇を惹きおこし、マルクの國內購買力をその從來の購買力の千分の一、百萬分の一、十億分の一に下落せしめたる速度をば、さらに大ならしめる可能性は、もはや貨幣の流通速度について考へらるべくもない。物價の殆んど無際限な騰貴を可能ならしめうるがごとき貨幣の流通速度の殆んど無限な增加といふものは、決して生じ得べくもない。さらに第二の反對理由として、貨幣の流通速度の變化に歸因する物價騰貴の實現には一定の時間を必要とするが、ある時期における爲替による物價の變動は瞬間的に顯現し、また一日に幾回ともなく行は

れる事實からしても、貨幣の流通速度のみをもつてしては解決し盡さざるものがある。第三のそうしてまた最後の反對理由は、貨幣數量說にあつては、物價の變動を制約するものとしての貨幣の流通速度なる要因は、その變化が同時に貨幣そのものに對する一定の心理的變化、すなはち個人の評價における變化を假定してゐるが、この心理的變化そのものがかへつて、流通速度よりもよりよく物價の變動を說明することこれである。蓋し貨幣の流通速度を迅速ならしめるものは、貨幣に對する不信認の增大であり、出來うるかぎりこれを速かに手放さうとする欲求であるからである。從つてこの場合、物價の上昇の直接的な要因となるものは、貨幣に對するこの不安そのものであり、個人の眼に映じたる貨幣の價値の下落そのものなのである。かくして物價が騰貴するのは、表面的なかつ結果的な事實たる貨幣の流通速度が增加するがゆゑにではなくして、むしろ本來的な心理的事實として人々が商品に對して漸時に貨幣の價値を下落させるからなのである(註五)。

註五　A. Aftalion, Monnaie. pp. 197-198.〔前揭邦譯書　一九九―二〇〇頁參照。〕

こゝにおいて物價を制約するものは、したがつて貨幣の客觀的交換價値を規定し、決定するものは、貨幣の數量や、ましてそれの流通速度などのうちにはもはや、看取さるべくもない。それは、實に、心理的な事實のうちに、すなはち貨幣そのものに對する個人の評價のうちに、その決定根據を求むべきがごとくである。こゝにアフタリオンの貨幣心理學說、さらには爲替心理學說の出發點が與へられてゐると言はねばならないであらう。

併しアフタリオンみづからも認めてゐるがごとく、フランスにおける貨幣的經驗は、その物價騰貴を解明する原理として、所得數量說の妥當なることを實證せるがごとくである。それにも拘らず、アフタリオンが結局において所得數量說にさへもあきたらず、彼の謂はゆる貨幣心理學說を樹立するにいたつたのであるから、吾々はその理論的根據として、アフタリオンの所得數量說に對する批判も、一應、あとづけておくことゝしやう。

アフタリオンに從へば、貨幣數量の增減もなく、あるひはそれの增加が物價騰貴の割合よりもなほ遙かに少なかりしにも拘らず、ドル相場の騰貴の結果、その物價の上昇をみたるフランスの經驗的事實からして、物價の騰貴が貨幣數量の增加に因るものでも、また貨幣の流通速度の增加に基づくものでもなきことが明らかとなる。すなはち、彼は貨幣の流通速度の增加が、理論的分析のうへからは、むしろ物價騰貴よりも後にきたるものであり、從つてその結果なることを强調する。そうして爲替の上昇に伴ふ所得の增加からして、その直接的結果として物價の騰貴が生じ得たるがごとくである。これ所得數量說の妥當がなほ主張され得る所以なのである(註六)。

註六　A. Aftalion, Monnaie. pp. 149-152.〔前掲邦譯書　一四七―一五〇頁參照。〕

すなはち、爲替による物價の騰貴は、あるひは商品供給の減少か、あるひは需要曲線の上昇か、またあるひは所得の增加かの、これら三つの事情のうちいづれか一つと結びつくことによつてのみ生じ得るのである。ところでフランスにおける爲替による物價騰貴は、必ずしも商品供給の減少とは結合しなかつたし、また物價騰貴の原因たる需要曲線の變化なるものもその變化がある種の特定商品にではなく大部分の商品に關係してゐるのだから、一定の商品に對する特殊の欲求における變化、趣味や流行の變化からは起り得ない。從つて物價騰貴は結局、所得の增加、國內貨幣でもつてする所得の增加からでなければ殆んど生じ得ないわけである。そこでアフタリオンは、外國爲替相場上昇の直接の結果としての所得の增加として、

i　爲替漸騰以前に受取り支拂も完了せる在庫商品に比例する輸入業者所得の增加

ii　外國證券所有者（國內貨幣による）所得の增加

iii　外國人にして常にその國に居住し、彼の本國から所得を受取つてゐるもの、（國內貨幣における）所得の增加

iv　輸出業者所得の漸增

v　輸出發展による所得の漸增

などこれら五つのものを擧げて、これら所得の增加がやがてまた物價の騰貴を生ずるにいたりしことを說いてゐるのである（註七）。

註七　A. Aftalion, Monnaie. pp. 150-154.〔前掲邦譯書　一四九―一五三頁參照。〕

このやうな物價の騰貴が一般化してゆくに從つて、所得の增加もまた普遍化する。國內消費に充當さるべき國產品の所有者たちは、それら商品價格の騰貴によつて、やがては所得增加の利益に均霑することゝなる。この所得の新增加部分は物價に對してさらにこれを促進する原因となる。かくして變動はさらに變動をよんで擴大し增大してゆく。そうして外國爲替の騰貴が停止するとせば、新しき爲替相場と調和し均衡する物價の成立するにいたるまで、物價の騰貴は所得を增し、所得の增加はさらに物價を上昇せしめて行くのである。一九二二年より一九二四年にわたつてフランスに見られたるがごとき爲替による物價の騰貴は、まつたく所得のみの作用によれるもののごとくであつた。從つて爲替による通貨物價間の不一致は、物價に對する所得のかゝる作用によつて說明されるかのやうに見へた。貨幣數量の增減なくとも、なほ物價の變動が起り得たのである。物價變動の支配的要素は貨幣數量ではなくして、所得の變化であつた。從つて所得の變化が導くものは、物價水準への訂正を行ふ貨

幣量であり、さらにはまた貨幣の流通速度なのである。それらは物價騰貴の原因ではなくしてむしろ結果たるにすぎないものなのである(註八)。

註八　A. Aftalion, Monnaie. pp. 154-156.〔前掲邦譯書　一五三―一五四頁參照。〕

ところで所得の變化は、單に爲替の直接的な作用の結果たるのみではない。所得變化の貨幣的要素としては、爲替以外に、硬貨または信用通貨の流通數量上の變化がある。名目的な貨幣所得は、これら硬貨または信用インフレーションあるひは外國爲替の變動に因つて、商品生產における對應的な變化のなにら起らざる場合においても、變化し得る。かくして所得の變化は物價の變動を惹起するものであつて、硬貨にせよ信用通貨にせよまたあるひは爲替にせよ、それら貨幣的要素の物價に對する作用は、所得の仲介によるものゝごとくである(註九)。

註九　A. Aftalion, Monnaie. pp. 156-157.〔前掲邦譯書　一五六―一五九頁參照。〕

かくして所得數量說は、謂はゆる貨幣數量說とは異なれる根據を、物價の變動に與へんとする。すなはち貨幣數量說は、貨幣數量を外部的な事實として認めるだけであつて、物價の變動をば貨幣數量の變動に機械的に結合させたるものたるに過ぎない。そうして物價の變動および貨幣の數量の變化がなにが故に存在し、賣手か買手がなにが故に物價の變動を認めるかといふことに就いては、なにらの理解をも與へやうとはしない。これに反して所得數量說の關心するところは、これら所得の變動が物價に及ぼす個人的所得における人間的な動機ならびに心理作用にある。所得數量說は、經濟的變動が吾々の欲求や欲望に依存してゐるものであるといふこと、從つてまた經濟法則の精神的側面の昂揚すべきことを、忘れてはゐない。かくして所得數量說の援用してゐるところのものは、自動的に吾々に要求されてゐる外部的な一定の機械的な必然の假定ではなくして、むしろ心理的な要因である。こゝにこそ所得數量が從來の貨幣數量說に一歩を進めたる重大なる一點が存するのである(註一〇)。

註一〇　A. Aftalion, Monnaie. pp. 159-163.〔前掲邦譯書　一五九―一六三頁および一六八頁以下參照。〕

併しながら近年のドイツにおける貨幣史實の明示するところに從へば、所得數量說もなほ充全なるものではないといふことである。すなはちそれは、爲替の迅速性であつて、結果たる物價騰貴は直ちにその原因たる爲替相場の上昇に結びついて、なにらその間に所得變動の仲介を必要とせざることである。爲替は物價したがつて對內貨幣價値のバロメーターとなる。對內貨幣價値の下落は、貨幣數量說の假想するがごとき貨幣の流通速度の仲介を要せざるはもちろん、また所得數量說の希望するがごとき所得の仲介によるものでもない。貨幣價値の下落すなはち物價の騰貴が貨幣の對外價値の下落に伴ふのはまつたく直接的である。爲替はこの迅速性のゆゑに極めて異なれる經濟的なまたは政治的な

現象の反動をうけ、謂はゆる心理的な要素とも言はるべきものに對する敏感性によつて、こゝに爲替ならびに貨幣價値の變動を制約し規定する要因としての心理的要素の著しき重要性が示されてゐる。信認のごくわづかなる程度の變化も、對外貨幣價値の個人的評價においては重要なる變動したがつて爲替相場の烈しい變動を決定するものなのである。さらに爲替相場變動の結果としての物價騰貴の豫測、對內貨幣價値の近き將來における下落への確信は、その直接な下落をひきおこさせるものなのである(註一一)。

註一一　A. Aftalion, Monnaie. pp. 199-200.〔前掲邦譯書　二〇〇—二〇一頁參照。〕

ともあれ、爲替による物價の變動に關しては、フランスにおけるがごとくその變動が所得の變動を通じて行はれる國と、ドイツにおけるがごとく物價の變動が直接的に貨幣の對內貨幣價値の下落に關聯してゐる國との間には、著しい限界なるものは存しない。物價變動の程度や速度にともなつて一つの狀態から他の狀態への推移は段階的に行はれる。そうして物價騰貴が一般化するがためには、もちろん最初は所得の仲介を必要とすることはいづこにおいても變るところがない。それにもまして豫測は急速的に一定の重大なる役割を演じはじめることゝなる。そのことは卸賣物價において特に著じるしい。物價騰貴に對する期待は、所得の作用が促進する物價の騰貴に對して、ある傾向に拍車をかける。同樣な經驗の反復と重力とは、爲替物價間の比に對する人々の經濟的訓練が進むにしたがひ、豫測の役割をより重大なるものとなし、かくしてまた小賣物價にまでもその影響を擴張する。結局、爲替および物價の日々の烈げしい瀕繁な變動狀態を問題とする場合には、所得の役割は次第に薄弱とならざるを得ない。貨幣の對內價値はますます緊密に貨幣の對外價値に聯關をもつにいたる。物價の騰貴は貨幣の對內價値の直接的な卽時的なる下落によつて行はれることゝなる。前揭のごとく吾々は、フランスの物價騰貴によつて、物價は貨幣量とは獨立に、たゞ所得の作用によつて變化し得ることを敎へられたのであつた。併し所得數量說も多くの假定のもとにおいては充分說明的ではあるが、若干の例外的なる場合についてはまつたく無力である。ことにドイツにおける經驗によつて物價が貨幣のみならず所得からも獨立して、純粹に心理的なる要素の作用によつて變化し得るものであるといふことを、從つて所得數量說がこの點に關してある種の修補の加へられるべきことが敎へられた。これ所得數量說をこへて、さらに貨幣心理學說の提唱されるにいたれる所以である。すなはち、爲替による物價騰貴をば、直接的に貨幣の價値の下落から說明せんがために、これが下落の決定的なる要因としての心理的要素の究明へといたらねばならない所以なのである(註一二)。

註一二　A. Aftalion, Monnaie. pp. 200-201.〔前掲邦譯書　二〇一—二〇二頁參照。〕

吾々はさらに歩みを進めて、しからばその謂ふところの貨幣心理學說とは如何なるものであるかを、アフタリオンについて聞くことゝしやう。

第三節　貨幣心理學說

アフタリオンが貨幣の價値に關し、從來の支配的な學說たりし貨幣數量說や所得數量說にはあきたらずして、さらに貨幣心理學說なるものを提唱するにいたれる所以のものは、實に前揭のごとき最近の貨幣經驗よりの貴重なる敎訓によるものなのである。而してその敎訓の重要なる內容をなすところのものは、從來の學說にあつては貨幣の價値の決定要因としては、もつぱら量的なる要因のみを採りあげて、より重要なる質的要因への反省がまつたく、あるひは殆んどまつたくなされてゐなかつたといふ點に存するものゝごとくである。爲替の物價への影響の迅速性と直接性との强調、あるひは貨幣價値の變動すなはち物價の變動の獨自性、したがつて物價の貨幣數量や流通速度への影響の强調(註一)などは、いづれもこのことを物語るものと言ふことが出來やう。そうしてアフタリオンは貨幣の價値そのものゝ變動を規定すべき質的要因としての獨自的な心理的要因を提唱するにいたつたのである。このやうに貨幣の價値性を心理的な要因をもつて基礎づけ、貨幣の固有價値の存在を强調せんとせし彼の意圖は、ウィーザーの所得數量說に對するアフタリオンの次ぎのごとき批判からしても容易に推測し得られるところである。

註一　A. Aftalion, Monnaie. pp. 199 et seq., 215-216 et passim.〔前掲邦譯書　二〇〇頁以下および二一七頁、その他諸所參照。〕

アフタリオンに從へば、ウィーザーの所得數量説の根本的な缺陷は、貨幣單位の評價において、貨幣自體に關する質的な諸要素がなほ演じ得るところの役割をば除外してしまつたといふことにある。貨幣の側のこれらの質的要素は、所得數量説にあつては、金屬がその價値の全部を貨幣に與へておつた古い時代にしか存在してゐなかつた。しかるにその後は貨幣は購買力として評價され、質的な要素はまつたく商品の側に求められなければならなくなつた。それは市場價格狀態により所得の最終單位が購買したるところの財貨のもつ效用となるにいたつた。從つて貨幣には直接效用はなく、その效用はまつたく間接的なものたるにすぎないといふにある(註二)。もちろんアフタリオンのこのやうなウィーザー批判には必ずしも與みするを得ないが、併しこの批判のうちには、彼の貨幣心理學説の主張せんとするところの貨幣の價値に就いての性格規定が、非常に明瞭に浮び出てゐる。

註二　A. Aftalion, Monnaie. pp 203-205.〔前掲邦譯書　二〇四―二〇六頁および第二部、第二章、第三節參照。〕

しからばアフタリオンは貨幣單位の評價におけるかゝる受動性を否定して、貨幣の價値の固有性をば心理的な要因によつて如何に基礎づけんとするのであらうか？

アフタリオンは、所得の最終單位が購買し得るところの商品の評價とは離れて貨幣の評價の行はれうることをば、具體的な例をもつてまづ説明してゐる。例へば、これまで相當に安定を續けておつた市場では物價が騰貴しはじめても、その貨幣所得に變化のなかつた人々は、一時的には、彼等の貨幣單位の評價をば貨幣の購買力に對應して引きさげやうとはしない。貨幣單位に關する彼等の評價は彼等の所得の最終貨幣單位が新しい價格において購買し得るところの商品の評價よりも一層大である。かゝる人々は貨幣單位自體をばより好むがゆえに出來得るかぎり商品の購入を控へる。從つてこゝには貨幣の評價がそれの購買力の如何に拘らず、それとはまつたく獨立してゐることがかなり明瞭に示されてゐると言ふことが出來る。ことに貨幣をば貨幣自體のために欲求せられるところの貪婪性は、この獨立性をもつともよく論證するものである。それはともあれ、貪婪と浪費との間には、貯蓄心または浪費の內容について種々異なつた心理的狀態がそれぞれ異なれる程度において認められるものであり、それは所得ならびに購買力が同じであつても貨幣單位の個人的評價には著しい相違の生じ得ることを考へさせるものであると(註三)。

註三　A. Aftalion, Monnaie. pp. 206-207.〔前掲邦譯書　二〇七―二〇八頁參照。〕

かくしてアフタリオンは、貨幣についての個人的なる評價は、所得の最終貨幣單位が交換によつて

「與へる」滿足に依存するものではなくして、貨幣の仲介によつて「獲得せんとする」滿足、すなはち各人がその所得の最終貨幣單位に「期待する」滿足に依存するものなのであると主張するのである。もちろんこれを以つてしても、貨幣單位の評價が依然として貨幣の購買力すなはち獲得され得る商品の效用にたしかに結びついてゐることには變りはない。併しその評價が完全に既成の購買力したがつて購買商品の效用に從屬してゐるといふわけではない。むしろそこには既成の購買力から獨立せる要素、すなはち貨幣についての質的な要素が入りこんでゐる。そうしてこの質的要素こそ却つて貨幣についての個人的評價を制約し、貨幣の價値を決定するところの重要な心理的要因なのである。これアフタリオンの貨幣の價値の理論が心理學說と名づけられてゐる所以である(註四)。

註四　A. Aftalion, Monnaie. pp. 208 et seq.〔前掲邦譯書　二〇九頁以下參照。〕

しからば貨幣の價値を決定し制約するところの心理的要因とは如何なるものであるか？　アフタリオンに從へば、それは「交換における欲求の大小」、「貯蓄心」および「豫測」の三つである。

まづ第一の要因に就いて見るに、アフタリオンに從へば、個々人の性格すなはち個々人が交換において提示する要求の大小、その强度、その持續性、あるひは反對にその無頓着さ、無關心さは、彼等をして貨幣評價に大小を生ぜしめ、交換によつて獲得を期待させる商品量に大小を生ぜしめるものである。從つて所得同じくかつ支出等しき場合にあつても、購買に際してそれぞれの拂はれる・ところの配慮の差異によつて、各人の貨幣單位に認めるところの重要度すなはち價値に大小があり得るのである(註五)。

註五　A. Aftalion, Monnaie. pp. 206-210.〔前掲邦譯書　二一〇—二一一頁參照。〕

貨幣評價を制約する第二の質的要素とし擧げるべき「貯蓄心」についてみるに、節約者は浪費者よりも遙かに大きく貨幣單位を評價する。すなはち浪費者はたいした重要度を貨幣に認めずその所得の全部をあげて欲望充足のために浪費し、その滿足は商品の遞減的效用に從つて次第に低下する。これに反し節約者は一定時においてその所得の消費に注意する。この場合彼はその貨幣單位はあらたなる購買の彼に齎らしうる一層低い滿足よりも大なる價値をもつと考へる貯蓄をこゝに選ぶことゝなる。所得の等しき場合に彼はかくして浪費者よりもより低い商品需要曲線または貨幣供給曲線をもつて市場に參加する。すなはち節約者は浪費者よりも購買量が少なきをもつて、一層ひくき所得を所有せると同樣である。節約が構成するかゝる質的要素における相違は、かくして所得が構成されたる量的要素の相違と同樣の結果となる。所得二〇、〇〇〇フランのうち、六、〇〇〇フランを貯蓄にふり向けるものは、その他の事情を同一として、その貨幣單位をば彼が消費する一四、〇〇〇フランの全所得をも

てるものと同様に評價する。彼の貨幣單位に對する評價は、彼が第一四、〇〇〇番目の貨幣單位の消費に對して期待する滿足によるものであつて、第二〇、〇〇〇番目の消費に對して期待しうる一層ひくい滿足によるものではない(註六)。

註六　A. Aftalion, Monnaie. p. 210.〔前掲邦譯書　二一一—二一二頁參照。〕

節約者がこのやうに貨幣單位を浪費者よりも一層たかく評價するといふのは、彼が貨幣に對しては浪費者のまつたく豫想せざる一定の滿足を要求するからであり、更にまた彼は貨幣に對して同時に現在ならびに將來の滿足をも要求するからなのである。この場合、その所得たる貨幣單位のそれぞれに關しては、個人が貯蓄に期待する滿足、すなはち個人が利子だけ增える貨幣單位に對して期待する將來の滿足は、現在の消費が彼に齎らす滿足に對して競合する。そうして全所得の處分は、一般に消費される最終單位および貯蓄される最終單位に期待される滿足がそれぞれ相等しくなるやうに、またその各々がその所得の最終單位として、すなはち限界滿足を與へる單位として看做されるやうに行はれる。從つて彼にとつては恐らく、消費される第一四、〇〇〇番目の貨幣單位と貯蓄される第六、〇〇〇番目の貨幣單位とに期待されるところのものの間には、ほとんど相違がないやうに思はれる(註七)。

註七　A. Aftalion, Monnaie. p. 211.〔前掲邦譯書　二一二—二一三頁參照。〕

貨幣の價値を制約する第三の質的要因とは、貨幣の將來價値に關する「豫測」である。

アフタリオンに從へば、豫測も他の二つの質的要因と同じく、個々人の貨幣的評價の相違を決定する。もしも彼等が將來物價の騰貴すなはち貨幣の價値の下落を豫測するときは、他の事情にして同一なるかぎり、彼等は他の人々よりも一屬高い商品の需要曲線または貨幣の供給曲線をもつて市場に參加するであらう。さらに豫測は、貨幣に關する個人的評價間の相違の要素としてよりも、これら評價の一般的變動の要素として一層重要なる役割を演じてゐる。物價激變期においては多くの人たちは急激なる變動を期待するが、それはこれらの變動が急激に現はれることが認められるからである。そうしてかゝる考へ方は變動の大いさをさらに一層著しからしめる要素となる。近き將來において物價騰貴の激化が一般的に期待されるにいたると、物價騰貴の調子は直接的となる。購買はますます多くなされるにいたり、しかも價格を論じない。多くの人たちの商品需要曲線したがつて社會的需要曲線は上昇し、物價をば一層いちじるしい騰貴にかりたてることゝなると(註八)。

註八　A. Aftalion, Monnaie. pp. 213-214.〔前掲邦譯書　二一五—二一六頁參照。〕

物價に關する心理的變化は物價の循環的騰貴期および下落期（すなはち好況期および不況期）において觀察される。ところでこの際、かゝる物價に著しき作用を及ぼすべき心理的要素たる豫測が、個

人にとつては何によるかといふに、アフタリオンに從へば、好況期にあつては、貨幣單位の將來價値の下落よりもむしろ欲求される商品の將來價値による。そうして期待されるかゝる騰貴は商品の現在の騰貴を大ならしめる。しかも、直接財はたとひあらゆる經濟活動の最後の目的であるとはいへ、また間接財の價値を支配するものは直接財の價値であるとは言つても、豫測作用による物貨の騰貴は、通例、直接財物價および小賣物價よりも間接財物價および卸賣物價に關して一層強くかつ早く現はれる(註九)。

註九　A. Aftalion, Monnaie. pp. 214-215.〔前掲邦譯書　二一六—二一七頁參照。〕

しかるにこれとは反對に、爲替またはインフレーションに基づけるさらに大なる物價の上昇期にあつては、豫測の物價に對する作用は、しばしば貨幣自體の心理的な價値下落によつて行はれ、貨幣價値自體に關する豫測によつて物價が制約されるのである。併しながら物價騰貴の初期においては、豫測の性質は、それが物價の循環的騰貴期にあらはれたるがごとき特定商品の價値騰貴に關聯せるものとかなり類似してゐるやうである。人々は依然として貨幣單位は同一價値を有つてゐるといふ考へを棄てない。そうして人々にとつて偶然的にして一時的な理由のために騰貴したと確かに思はれるものは、わづかに一定商品の價格のみである。從つてこの場合、豫測の心理的要素の作用は、ほとんど間接財物價、卸賣物價にかぎられてゐる。併し經驗が一定期間繼續するときは、豫測は次第にその性質ならびにその結果の範圍を變化させてくる。豫測はいまや貨幣價値自體に加へられてくる。そうして豫測の影響はまた小賣物價ならびに直接財物價にも及ぶにいたると(註一〇)。

註一〇　A. Aftalion, Monnaie. pp. 215-216.〔前掲邦譯書　二一七—二一八頁參照。〕

貨幣の價値を制約する前掲のごとき三つの質的要素は、いづれも同じ重要性を有するものではない。いまアフタリオンの說くところに從へば、交換における要求の大小および貯蓄心の强弱なる二つの心理的要因は、物價水準の決定に對しては著しい影響を及ぼすが、物價の變動に對してはなにら重要なるものではない。すなはち、各人がその性格、その心持ち、その要求、その貯蓄心により貨幣單位に期待するところのものは、商品の需要曲線、したがつて貨幣の供給曲線を決定するものである。といへ、これら個人的な特性の分布は年々といな時代時代で、さほどの變化をみるものではない。從つてかゝる二つの質的要素は、殆んど物價の變動を支配しないものと見られやう。しかるに第三の質的要素たる貨幣の將來價値に關する豫測は、二者とは異なつて、少くとも一定の時期においては物價の變動自體に極めて强い作用を及ぼすものである(註一一)。

註一一　A. Aftalion, Monnaie pp. 221-223.〔前掲邦譯書　二二三—二二五頁參照。〕

とまれこれら三つの質的要素、心理的要因によつて貨幣そのものゝ價値は決定さるべく、ことに貨幣價値はそれが下落するはずであると考へてゐる總べての人たちの確心によつて下落してしまふ。それは所得額やもちろん貨幣數量の著しき增加を俟たずに、それ自體變化し、むしろそれに伴ふ物價の騰貴によつて所得や貨幣の數量の追隨的なる變化が惹起されるがごとくである。貨幣の價値の下落はかくして、前掲のごとき心理的諸要素の作用において直接的に實現せられるものなのである。これアフタリオンの貨幣價値學說が心理的貨幣價値學說と稱せられる所以である(註一二)。

註一二　A. Aftalion, Monnaie. p. 223.〔前掲邦譯書　二二五頁參照。〕

ことにアフタリオンにおける貨幣の評價は、所得の最終單位に期待する滿足に依存するものであつて、それは單に所得のかゝる最終單位によつて購買された商品效用のみに依存するものではない。貨幣單位の評價のうちに數へらるべきものは、貨幣單位の前日の購買力のみでなく、さらに翌日に對して豫想される購買力の各人による評價もある。併しなほそこには、これまでの評價の單なる結果ではない今日のための購買力の評價なるものも含まれてゐる。かくして、貨幣の價値は、それでもつて得られる商品の效用、したがつて商品の消費に基づける效用のみに依存せず、さらに將來獲得の期待し豫想せらるべき效用、すなはち貨幣の貨幣としての效用にも依存するがごとくである。かくしてミーゼスにおけるがごとき貨幣の價値に就いての限界效用學說は、これを消費效用的貨幣價値學說と言ひ得られるならば、アフタリオンのそれは、豫測效用的貨幣價値學說とも稱せらるべきものであらう(註一三)。そうしてこの豫測效用をもつてする貨幣の固有價値の基礎づけにこそ、アフタリオンの貨幣價値學說の特徵的な性格を看取すべきであらう。しからざれば、ある論者の批判におけるがごとく、アフタリオンの主張のうちに、心理的要素の作用を規定する根本的客觀的事實への輕視を看取するにいたるといふ、批判的マンネリズムに陷ることゝなるからである。

註一三　A. Aftalion Monnaie. pp. 220-221, 224.〔前掲邦譯書　二二二頁および二二五—二二六頁參照。〕

第四節　豫測效用の反映性

――貨幣心理學說の動態論的性格――

アフタリオンの貨幣心理學說にあつては、豫測效用の獨自性すなはち非反映性は、まことに重大なる役割を演じてゐることが明らかとなつた。彼はこれによつて物價すなはち貨幣の客觀的交換價値の變動をば豫測效用なる心理的な要因によつて基礎づけ、貨幣の主觀的價値の固有性、非反映性を强調せんとするものゝごとくである。この點は、貨幣數量說ことに所得數量說に對してなせるアフタリオンの批判のうちによくその特質が現はれてゐる。しかも彼の所得數量說に對する誤解は、いづれも、まつたく、彼のかかる意圖の强調に急なりしことに歸因せるものと言ふことが出來やう。

併しながら貨幣の固有價値をば、アフタリオンにおけるがごとく、心理的なる要因をもつて基礎づけることは、はたして出來るものなのであらうか？　彼の謂はゆる豫測效用なるものはかゝる任に堪へ得るのであらうか？　換言すれば豫測效用なるものは、果して彼の言ふがごとくに、獨自的な、非反映的なものであらうか？

このやうな問題に對して充分なる解答の與へられざるかぎりは、アフタリオンの貨幣心理學說、すなはち豫測效用的貨幣價値理論は、貨幣の主觀的固有價値、すなはち貨幣の客觀的交換價値の原因でありそれの根據ともなるべき貨幣の主觀的價値を基礎づけんとせるその意圖にも拘らず、失敗せざるを得ないであらう。吾々はこの點に就いてアフタリオンの論證を吟味することゝしやう。

アフタリオンは貨幣の價値を制約するところの心理的要因の一つとして貯蓄心の存在を主張せることは前掲のごとくである。そうしてこの要因の存在こそは貨幣心理學說の所得數量說への卓越性を證明するものとしてかく述べてゐる。

所得數量說が希望してゐるやうに、貨幣評價が所得の最終單位によつて購買される商品の與へる滿足に依存するとしても、貯蓄のある場合にはその所得の最終單位は如何なるものであるかといふことについては、何人ももはや充分にこれを說明し得ない。二〇、〇〇〇フランの所得のうちその一部分が貯蓄される場合に、貨幣評價をば第二〇、〇〇〇番目の所得單位で購買される商品の與へる滿足に依存させるといふことは、明らかに不可能であると(註一)。

註一　A. Aftalion, Monnaie. p. 212.〔前掲邦譯書　二一三―二一四頁參照。〕
そうしてアフタリオンは、さらにこの敍述に引きつゞいて、貨幣評價が單に費消される最終の所得單位から求められる滿足にのみ依存するものではなきことを說きて、所得數量說の不充分なる所以をかく述べてゐる。

すなはち、評價は費消される最終所得單位から求められる滿足に依存するものであるとなすことだけでもつて充分であらうか。たゞ費消される最終所得單位、すなはち支出が中止される點は、貯蓄に期待される現在ならびに將來の滿足に依存する貨幣への評價の結果自體であつて、一定時には確定してゐない。各人は貨幣の二重の用途に基づけるかゝる合成評價ともいふべき貨幣評價をもつて市場に參加するものであり、この評價の市場價格との比較の結果に從ひ、あるひは多く費消し、あるひは少く費消するものである。もしも物價が高く、しかもなほ高くなる場合にあつても、もし物價騰貴が著しく長期にわたるものにあらざることが豫想されるときには、そのことは恐らくその月またはその年における支出を減じ、一層貯蓄を行ふべきであらう。同樣にして、もしも金利が上昇する場合には、その所得のうち貯蓄される單位に關して豫想する滿足は增加するであらう。この場合さらにもしあらゆる他の事情にして相等しければ、彼はその支出を制限するかも知れない。すなはち貯蓄は六、〇〇〇フランではなく、七、〇〇〇フランまたは八、〇〇〇フランとなるかも知れい。從つて貨幣評價は費消される最終單位に依存するといふことは言ひ得なくなる。蓋しどれが最終單位であるかといふことがわからなくなり、またそうした點がまさに貨幣評價に依存するものであるといふこともわからなくなるからである。かくして所得數量說は貯蓄の場合において事實と一致しなくなる。從つて敢へてこゝに貨幣評價は所得の最終單位に期待される滿足に依存するといふ命題、すなはち貯蓄が行はれる場合にもまた貯蓄が行はれない場合にもよく妥當する命題について述べざるを得なくなるのであると（Aftalion, op. cit. pp. 212-213. 前揭邦譯書二一四—二一五頁參照）。

アフタリオンのこの批判は、明らかに所得數量說の理論的前提を無視せることのうへに成りたてる、まつたく誤つた議論であると言はなければならない。といふのは、所得數量說にあつては、所得はひとまづその全部が支出されるものとして前提されてゐる。その理論構成にあつては、謂はゆる貯蓄なるものの存在の餘地はあり得ない。もちろん一方の個人の貯蓄せるものであつても他方の個人の支出となつてゐるものはあり得るかもしれないが、それは謂はゆる貯蓄のうちには含まれてゐない。このことは所得數量說における所得總量なるものが、社會生產物の價格總額であることからしても容易に推知し得られるところである。それにも拘らずアフタリオンの所得數量說に對する誤解こそ、彼の貨幣心理學說の特質をもつともよく露出しておるものといふことが出來るのである。

すなはち所得數量說における貨幣の價値とは貨幣の購買力であり、客觀的交換價値なのである。それは商品價値におけるがごとく、貨幣そのものゝ直接效用したがつて主觀的價値によつて基礎づけ得るものではない。むしろ商品價値におけるとは逆に、貨幣の主觀的交換價値は貨幣の客觀的交換價値によつて說明さるべきものである。從つて貨幣の效用は交換によつて得られる商品の效用であり、それは間接效用または反映的なる效用にすぎないのである。然るにアフタリオンはこれらの事柄をまつたく看過し、これを正當に理解することなく、貨幣の固有なる主觀的價値の强調にのみ急であつたのである。そうして所得數量說にあつてはもともと問題とはなり得なかつた貨幣の固有の主觀的交換價値をば、貨幣の主觀的交換價値を貨幣の間接效用に依存せしめたるがゆえに、その缺陷のため所得數

量說は「問題となし得なかつた」ものゝごとくに誤解したのである。それゆゑ、彼はかゝる貨幣の間接效用、すなはち費消される最終所得單位から求められる效用ではなしに、最終所得單位に「期待される」效用によつて、從つて前者のごとく得られし商品の消費的な效用からではなく、むしろ豫測せらるべきあらゆる效用（貨幣の購買力そのものゝゆゑの有用性）（註二）から貨幣の固有な主觀的交換價値を論證せんとしたのである。

註二　A. Aftalion, Monnaie. p. 220.〔前掲邦譯書　二二二頁參照。〕

しからば豫測效用なるものは反映的な性格をもてるものではないのであらうか？　それは貨幣の客觀的交換價値の根抵をなすものであり、それを基礎づけ得るものなのであらうか？　さらに換言すれば、貨幣の固有の主觀的價値をば、かゝる豫測效用をもつて基礎づけ得るであらうか？

アフタリオンは貨幣單位の評價における受動性、最終所得單位の購買する商品價値と貨幣評價との同一視に極力反對し、所得の最終單位が購買する商品の評價とは獨立な貨幣の評價の存在を主張してゐる（註三）。併しこれら兩種の評價の差異、ことに貨幣評價の最終所得單位で得られし商品價値の評價よりの獨立性がよし許されるとしても、このことは決して直ちに貨幣の主觀的交換價値の固有性の是認を意味し得るものではないであらう。といふのは、それら二種の評價はなにら本質的な差異のあるものではなく、いづれも反映的であることには變りがないからである。すなはち、貨幣に對する評價は、貨幣たるがゆゑの有用性に對する評價であり、そのことは概念上、貨幣としての一定の機能をはたすことを前提としてゐるものでなければならない（註四）。これは貨幣の價値をば貨幣の機能から說かんとする機能價値學說におけると同樣に、貨幣自體に對する評價も一種の反映的な評價であつて、かかる反映的な豫測效用をもつては貨幣そのものに固有の價値を基礎づけ得るものではない。

註三　A. Aftalion, Monnaie. pp. 205-206.〔前掲邦譯書　二〇六―二〇七頁參照。〕

註四　A. Aftalion, Monnaie. p. 207〔前掲邦譯書　二〇八頁參照。〕

すなはちアフタリオンは、そこで、貨幣の評價には、貨幣の獲得し得る商品から求められる滿足のほかに、貨幣自體のために貨幣を欲求させる貪婪性にも依據することを述べて、貪婪性が貨幣たることのゆゑの有用性によつて得らるべき滿足に對する欲求たることを說いてゐるのである。

田中教授のアフタリオン批判におけるがごとく、貨幣の評價がいづれも財貨の效用に直接依據せることに就いてはなほ異論の餘地はあり得る。しかりといへども、「正確なる心理的解剖はますます貨幣の評價における受動性を肯定せしめたるものと言はねばならぬ」ことについては、もちろん誰人も田中教授の批判に贊意を表せざるを得ないであらう（註五）。かくのごとくアフタリオンは、彼の豫測效用

の非反映性、獨自性を論證し、從つて貨幣の固有の主觀價値を基礎づけることをなし得なかつたとはいへ、彼の意圖せしことがらは、これを沒却することは許されない。すなはち彼は、貨幣の客觀的交換價値の變動が、從來の貨幣數量說や所得數量說におけるがごとく、機械的な因果的說明に終つてゐることに滿足せず、これを眞に說明せんがため、貨幣の主觀的交換價値の固有性を基礎づけることによらねばならないことを强調したのである。こゝにこそ彼の貨幣心理學說の本來の性格を看取すべきである。從つて彼がその基礎づけにおいてたとへ挫折したりとはいへ、なほ貨幣の價値性の問題の存在、貨幣の主觀的な固有價値の基礎づけの問題の存在せる事を指摘せるは、依然として、彼の功績といはねばならない。そうしてこの基礎づけによつてはじめて貨幣の客觀的交換價値の變動の機構もよく解明され得るものとなせる彼の意圖は、高く評價されねばならないであらう。

註五　田中金司教授「貨幣の價値の本質」（「國民經濟雜誌」第六十四卷　第四號）一一頁以下および一六頁參照。

併しながら彼の豫測效用の反映性は、結局、貨幣の主觀的交換價値の固有性を基礎づけ得ず、從つてそれは貨幣の客觀的交換價値の變動の眞の起動因、根本的原因とはなり得ず、單にそれが變動に拍車をかけ、加速度化せしめ得る二次的なる原因たり得るものに過ぎざるがごとくである。このことは豫測なる心理的要因の說明のうちによく現はれてゐる。すなはち、物價騰貴あるひは貨幣價値の下落が期待されゝば、人はかゝる價値の一定の下落に對し參加するにいたり、將來の物價の騰貴に備へるためよく購買する。このことは物價の騰貴をますます大ならしむべく、かゝる期待が一般的ともなれば、それに從つて物價騰貴の調子は直接的となり、それに拍車がかけられる（註六）。併しこの豫測が誤まつてゐたことが將來明らかとなれば、最早それだけ貨幣に低い評價を與へないから、從つて財貨により大なる效用を與へないから、財貨の價値は減じ、物價騰貴への促進作用が減ぜられる（註七）。

註六　A. Aftalion, Monnaie. pp. 201, 213-214, 215, 217 et passim.〔前掲邦譯書　二〇二頁、二一五—二一六頁、二一七頁および二一九頁その他諸所參照。〕

註七　A. Aftalion, Monnaie. p. 227.〔前掲邦譯書　二二九頁參照。〕

かくして貨幣の客觀的交換價値の變動の眞の原因は他に求められるべく、たゞそれに拍車をかけ、または一時、本來の動向よりの背離を生ぜしむべき要因としてのみ、豫測效用の存在的意義が看取される。そうしてこゝにアフタリオンの貨幣心理學說の貨幣の價値に關する動態論的性格觀がよく現はれてゐる。併しこのことは、なにら、ある論者の批判のごとく、アフタリオンが貨幣價値變動の原因としてかゝる心理的要素の作用をのみ强調するに急にして、これが作用を規定する根本的客觀的事實を輕視せるものとなさるべきではない。蓋し、アフタリオンの本來の立場に立つときは、かゝる客觀

的事實を容認することこそ、みづからの貨幣心理學說を放棄することを意味するからなのである。しかも彼にあつては、かゝる根本的客觀的事實なるものも、むしろ、貨幣の價値を決定すべき第二次的な要因でしかあり得ないのである。かゝる批判は、多くの論者によつてアフタリオンに向けられしところではあるが、アフタリオンの本來の意圖せるところの奈邊にあるやをまつたく看取することをせざる謬見と言はねばならない。たゞ、アフタリオンの意圖が實現さるるにはいたらず、從つて彼の豫測效用の反映性が、貨幣の固有價値の基礎づけに失敗せることからして、貨幣の價値の固有性、いな貨幣の價値性そのものゝ基礎づけがさらに他に求めらるべきことを示唆せるものとしてのみ、かゝる批判は、はじめて、その意義を獲得し得るにすぎざるものである。そうしてそれへの聯繫を缺くときは、批判としての意味を持ち得るものではない。いなむしろそれは批判の名にすら値ひしないところのものなのである。

第五節　結　論

商品の主觀的價値は個々人にとつてその使用し得る最終單位の效用に依存してゐる。すなはち、一方、量的には、使用し得る單位すなはち稀少性と、他方、質的には、その最終單位の效用とによつて制約されてゐる。併し價値決定要素としての量的要素は、單に最終單位の確定のうへに關係するだけで、價値はこの單位の效用に存する。從つてアフタリオンは、價値の最高決定根據としては質的要素たる效用のみを認める。このやうに價値の根據はもともと心理的なものであるがゆゑに、アフタリオンの貨幣心理學說は、實に、こゝにその理論的支盤を持てるものゝごとくである。而して前揭のごとくアフタリオンに從へば、貨幣の價値は、貨幣單位が與へる滿足ではなくして、かゝる單位に認める效用、すなはち最終單位に期待する效用に依存してゐるのである。こゝにおいて彼は商品價値學說においてもかゝる信認の演ずる役割の重要性を强調する。かくしてアフタリオンは、商品の價値とはその價値を創造する商品が與へる利益ではなく、むしろその商品が與へると思はれる利益であり、獲得すると期待される利益である、と主張するにいたつた(註一)。

註一　A. Aftalion, Monnaie. pp. 226-227.〔前揭邦譯書　二二八—二二九頁參照。〕

商品の個人的價値がかやうにして決定されるものとすれば、商品の社會的價値は需要供給曲線によつて決定されると言ふことが出來やう。すなはち、需要といひ供給といふも、實際上は、ある一定の價格における需要としてまたは供給としてはじめて意味を持ち得るに過ぎない。需要量または供給量たる量的要素とともに、需要價格または供給價格たる質的要素がなほこれに關聯してゐる。これら二つの要素は緊密に結合しあひ、量的質的曲線ともいひ得る需要供給曲線において相融合する。各人は商品の遞減的價格における遞增量の需要者である。賣手は價格が上がればますます多くの分量を與へやうとする。價格は需要と供給とが均衡する點、同一價格における需要供給間に等性が存する點に、需要供給曲線の相交はる點に決定される。商品效用によるその個人的價値は、緊密なる關係において需要供給曲線の比較により決定されるその社會的價値に明らかに結合されてゐる。總需要供給曲線は個人的需要供給曲線より成る。そうして個人的需要供給曲線上の各點においては、需要される諸單位の價値は、各人にとつて曲線上の上述せる點で最後の單位であると思はれるものゝ效用により、あるひはまたむしろその單位に期待される效用により決定される。併し今日市場に現はれてゐるやうな需要供給の個人的曲線においては、貨幣價値は商品價値とともに考察される。商品のあらゆる需要は一定價格における需要であるから、そは需要される商品價値と供給される貨幣價値との比較を意味する。

商品需要に關する個人的曲線は、同時に貨幣供給に關する個人的曲線である。商品の供給曲線は貨幣の需要曲線である。商品の效用に關する遞減曲線をまつたく同じうせる二人のひとは、もしその貨幣單位に關する價値の評價が異つてゐる場合には、同一の需要供給曲線をもつて市場に現はれはしない。貨幣により大なる重要性を認める人は、そのこと自體によつて商品需要者としては弱くなる(註二)。

註二　A. Aftalion, Monnaie. pp. 227-229.〔前掲邦譯書　二二九—二三一頁參照。〕

かやうに貨幣單位に對しその一人が認める一層大なる重要度なるものは、如何なる理由に基づくか、それはその人の裕福さ、所得の大いさ、買入條件の難易、節約の程度、貨幣の將來價値に對する豫測などのいづれに基づくか、といふこのやうな問に對する答へは、貨幣價値に與へられる根據、すなはち貨幣價値學說に依存する。かくして貨幣學說は主要役割として需要供給曲線の貨幣側の說明をすることである。然るに多くの論者は、商品の價値に關する需要供給曲線については、これを認めてゐるが、貨幣の價値の問題にはこれを適用することをいまだ敢へてしない。アフタリオンはこの原理をさらに貨幣にも適用せんとするものであつて、彼の貨幣理論のカタラクティシュな性格がこゝに如實に示されてゐる。そうしてアフタリオンの貨幣心理學說こそは、前掲のごとき三つの心理的要因のうちに、貨幣側からする需要供給曲線への影響を論ずるものなのである(註三)。

註三　A. Aftalion, Monnaie. pp. 229–230.〔前掲邦譯書　二三一—二三二頁參照。〕

この貨幣價値を決定すべき質的要因の强調からしても明らかなるがごとく、單に稀少性なる量的要因にのみ固執せる貨幣數量說には、アフタリオンのくみし得ざりしは當然である。これ彼は、貨幣數量說にあつては貨幣價値の根據に關してはなにらの關心も拂はれてゐない、と斷ずるにいたれる所以でもある(註四)。さうして彼は貨幣の價値の根據を心理的要因に求め、それをもつて貨幣の固有な主觀的價値を究明し、貨幣の客觀的交換價値の基礎としてのそれを强調するにいたつたのである。

註四　A. Aftalion, Monnaie. pp. 230–231.〔前掲邦譯書　二三二—二三三頁參照。〕

しかれども豫測效用の固有性は、遂に、アフタリオンにおいては論證されることが出來なかつた。アフタリオン自身も明らかに、貨幣は直接效用 (d'utilité directe) を持つてゐないと主張して、その謂ふところの豫測效用も同じく一種の間接效用であり、反映的性格のものであることを認めてゐる(註五)。それにも拘らずウィーザーの主張するがごとき間接效用を棄てゝ豫測效用を强調する所以のものはなにか。吾々はこゝに彼の貨幣心理學說の面目を看取すべきである。

註五　A. Aftalion, Monnaie. p. 235.〔前掲邦譯書　二三七頁參照。〕

すなはち、ウィーザーにあつては貨幣の主觀的價値は、最終所得單位の獲得し得るところの商品效用に依存する。この商品效用なるものは、商品が財貨として消費することによつて得らるべきものであるがゆゑに、それは謂はば「消費效用」とも言ひ得やう。從つてウィーザーにあつては、貨幣の主觀的價値は「消費效用」に依存するといふことゝなる。このことは貨幣の評價を商品の評價に歸して、それと同一視することである。そうして貨幣をば商品から獨立に、すなはち純粹に貨幣的な特性から評價すること、貨幣を貨幣として評價することを否定するの結果となる(註六)。この故にアフタリオンは、貨幣を貨幣として評價すること、より貨幣は結局において商品を購買するものではあらうとも、それによつて得られる商品に直ちに結びつけずに、貨幣をかゝる購買力として評價すること、を主張する。從つて、貨幣の主觀的交換價値をば「直接」それによつて購買し得られる商品效用からでなしに、貨幣の貨幣としての效用、すなはち購買力としての有用性、したがつて貨幣單位に豫測し期待せる效用、一種の將來效用でもつて、基礎づけんとしたものゝごとくである。この消費效用と豫測效用との間におけるニュアンスの差異は、まことに微少なるものではあらうとも、これを看過することは許されない。それを無視してすべてを消費效用に歸してもつて貨幣の主觀的交換價値の反映性を强調せんとする見解は、アフタリオンの意圖をまつたく沒却せるものと言はねばならない。

註六　A. Aftalion, Monnaie. pp. 205, 204.〔前掲邦譯書　二〇六および二〇五頁參照。〕